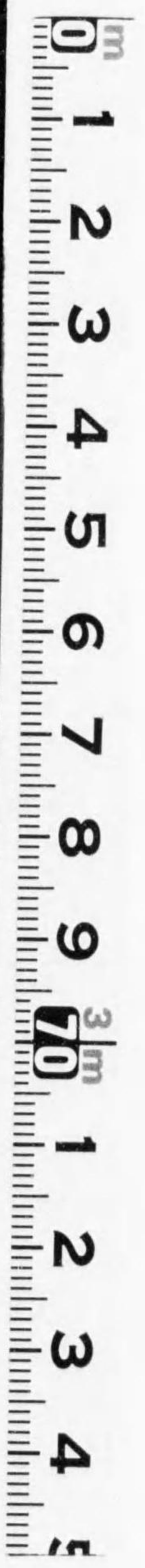


547
193



始



書辭名人術美學文 治明
正大

士博學文長校學範師等高京東
字題生先吉米宅三

士博學文授教校學範師等高子女京東
序生先郎八上尾

士博學文授教校學範師等高京東
序生先郎吉猷島兒

長院習學
長院術美國帝
序生先郎二鏡原福

論教元校學範師等高子女良奈
著助之龍本松

版大
兌發售書州立

15.62

內交

書物は
大切に

書物は
大切に



文苑

衆芳

昭軒



はしがき

○近時文化の發達につれて文藝美術の創作が盛に行はれ、如何なる方面の新聞雜誌でも、小説や詩歌の數篇が載録されて居ないものは無くなつた。婦人や兒女の手にする家庭的讀物は固より、農商工等實業界の週報とか、純粹科學の立場から發行される科學方面の月刊ものなどに至るまで、幾分なりとも藝術的香氣を加味しないものは殆んど無くなつた。即ち文化生活者にとつて、藝術は一日も缺くことの出来ない精神上のパンとなりつゝあるのである。従つてそれら作家の略統流派傾向其他の略歴を知らうとする人が多くなつたが、この要求を満たすべき適當の著書に乏しい。殊に一般人の知らうとする近現代人の傳記を蒐録した良書が無い。編者はこれを遺憾に思つて本書の編纂を企畫したのである。

○本辭典は主として明治大正の兩時代に於ける文藝美術家の傳記を蒐録したものであるが、其の蒐集の範圍は純正藝術家のみに止めず、講談怪談史譚情話等を書いてゐる所謂通俗作家や、童話童話や隨筆等に筆を執つて、未だ高級藝術家としては認められて居ない作家でも、新聞や雜誌に時々其作物を發表してゐるために、其の名が一般家庭に親しまれてゐるやうな人は、帝展や院展には出品をしなくとも、世間的に十分知られてゐる畫家彫刻家等を載録すると同じ心持で共に蒐集した。また其の文章や著書が相當の讀者をもつ

てゐるものは、其の人が學者であり實業家であると、はた宗教家哲學者であることを問はず加へるやうにした。

○本書は氏名の下に諸家の特長を一つ宛特記して、讀者檢索の便を計つた。そして括弧内の文字は次に示したやうに、括弧下の意味をもつてゐる略字である。

- (小) 小説家。
- (劇) 劇作家即ち脚本家戯曲家。
- (詩) 長詩人即ち新體詩人及び漢詩人
- (歌) 短歌作家即ち歌人。
- (俳) 俳句作家即ち俳人俳諧者。
- (川) 川柳作家。
- (文) 一般文章作家。
- (評) 評論家。
- (譯) 翻譯家。
- (記) 新聞雜誌記者。
- (著) 著述家。
- (漢) 漢學者。
- (書) 書家。

(畫) 畫家。

(彫) 彫刻家。塑像作家。

(鑑) 鑑定家。

(美) 美術關係諸家。

○併し一人を傳するに、某氏は書家、某氏は詩人と簡單に決しにくい場合が少くない。例へば山縣公は政治家であつて歌も詠み詩も作り書も書いた。尾上柴舟博士は國文學者であつて兼ねて長詩・和歌・書道の大家である。島崎藤村は詩人であり小説家であり、正岡子規は俳句の宗匠であり兼ねて和歌と文章の名手であつた。夏目漱石は英文學者であり、俳人詩人畫家書家であり、そして亦偉大なる小説家であつた。其の他與謝野晶子・有島生馬・阪正臣・中村不折・森鷗外・相馬御風・黒木欽堂・北原白秋・島木赤彦等數へ挙げれば限が無い。それ故作家名の下括弧内の文字は、編者が全く本書の目的より見て最も重きを置いた一方面を表したものと見られたい。尤も讀者の中には編者と見を異にして居られる方があるかも知れぬが致し方が無い。

○諸家の現住所は將來も長く其の所に定住する人ばかりで無いから、寧ろ省略しようかとも思つたが、現在の住所が縦令前住所と變する場合があつても、有る方が幾らか便益あると思はれたので載せることにした。然るに諸家の住所中關東大震災以來移動甚しく、同一人で數回訂正を施したのも珍らしく無い。尙現住所不明又は不正確のものは、空欄

を存して讀者の隨時記入に便ならしめた。常時に在つてすら終始變化する現代人の傳記は、こんな鎖末な事にも意想外の煩累と苦慮とがある。

○稿成るに及んで學習院長帝國美術院長福原録二郎、東京高等師範學校長文學博士三宅米吉、同校教授文學博士兒島獻吉郎、東京女子高等師範學校教授文學博士尾上八郎諸先生の閱を請うたのに、何れも御多忙中の時間を割いて、懇切な御批評と有益な御指導となして下されたことは、杜撰の恐れを懷いて居る本書の不備を補ふ上に、どれほど有益であつたか知れない。且つ題言や序文等をも賜はつて、後學の編者を教訓し鼓舞し獎勵する御詞を與へられたことは實に感謝に堪へないところである。なほ東京府立第三高等女學校教授豊田八十代、學習院教授村山熊太、奈良縣圖書館司書中岡清一、川柳作家高木角戀坊諸氏が、この編述に對して陰に陽に多大の援助を與へて、本書完成の上に盡して下されたことも編者の銘記して忘れられぬところである。茲に併せ記して以上の諸賢に感謝の意を表する次第である。

○本書傳へるところ總べて千六百三十家、編者は稿を起してより夙夜覃精、該博と正確とを期して蒐集整理に力めたけれども、流轉止むなき現存者を多數に網羅して居る本書のごときは、遺漏や誤謬の無いことは到底保し難い。それは他日重訂の時を期して完璧のものにしたいと思ふ。

大正十五年初春

編者 しるす

文學博士尾上八郎先生序

明治大正の時代が未曾有の盛時であることは勿論であるが、藝術の方面では、まだ模倣及び翻譯を脱しえぬ時代であるのも、否む譯には行かない。明治時代に、外國の藝術を必死になつて輸入したのみならず、度を越えて心酔した結果、それを模倣し、又は翻譯することが、非常に盛んになつた。それが引き續いて、大正の今日に到つて居るのである。これらの中から、獨創的氣分が大いに起らねばならず、またすでに起りつゝあるのであるが、これを促進する事は、今の時代の人々に通じた最大任務であらねばならぬ。しかし、かゝる間に人材の輩出したのは、特筆しなければならぬ。いかなる時代にも、英物の出ないことはないが、この間ほど多數なのは、絶無といつ

て差支はないであらう。實にこれらの人々が努力したればこそ、今日の文化は燦然として光を放つて居るのである。従つて、これらの人々の功績は、永久に涉つて没すべからぬものである。松本君が多年勉強して、これらの人々の傳記を編輯せられたのは、その意恐らくはこゝにあると思ふ。從來この類のものもあるにはあつたが、松本君の此の著の如く、叮嚀懇切なのはなかつたやうである。松本君の勞は多としなければならぬ。今日のみならず後世もこの書によつて益をうけるものは實に尠くないと思ふ。君の需によつて卷頭を汚すものは君の舊友の一人尾上八郎である。

大正十五年三月

序

人は庚申塚の猿の如くに、見ざる・聞かざる・言はざるを理想として、總べての人事を一切閑却すべからず。孔子の所謂非禮は視るなかれ・非禮は聽くなかれ。非禮は言ふなかれは、顔回が仁を問ひしに對して、視聽言動皆禮に由るべきを誨へしものなれば、猿智慧にては、到底企及すべきに非ず。たゞ老子の所謂無爲の事・不言の教は、耳目の欲を塞ぎて、虚靜玄默、聖を絶ち智を棄つるものなれば、猿の三ざる主義の遠祖といふも、亦或は可ならむ。然れども人の本能には物質欲あり、また智識欲あり。一攫千金を夢みて、不義の富貴を欲求するは物質欲なり。博學達識を目的として、賢哲の書萬卷を讀破せむとするは智識欲なり。物質欲に對して、孔子は道義に由りて取捨すべきを説くも、老子は足るを知れ。止まるを知れと絶叫し。智識欲に對して、孔子は學び

て厭はざるを説くも、老子は學を絶たば憂なしと放言せり。故に望を浮世に絶ちて、自ら方外に遊ばむとするものは、老子の三ざる主義に歸嚮すべきも前途に望を屬して、大に社會に貢獻せむとするものは、孔子の善く視・善く聽き善く言ふ主義に歸依すべきなり。

松本龍之助君は嘗て東京高等師範學校に學び、卒業の後、岡山縣・奈良縣に奉職し、多年教育の任に膺りしが、近年東京に還りて、操觚社會に入り、新に此の大著を完成せり。蓋し方今文化の發達に隨ひて、物質文明の進歩は、十年前に何人も曾て豫想せざりし程度に上達せしも、精神文明の目標は西に靡き東に従ひ、左に傾き右に移りて、翻覆常なく、動搖定まらざるは、實に猿智慧の淺ましきに似たり。しかも藝術趣味に至りては、近來一般に發達し、劇に・映畫に・蓄音機に・「ラヂオ」に・皆見聞の中に趣味の修養を積むものならざるはなし。則ち大正の今日は猿の三ざる主義が時代錯誤なるのみならず、

老子の無爲不言も時勢に激して奇矯の言を發せしものなるを知るべし。故に今の世は個人としても、家庭としても、老若男女・貴賤・都鄙の別なく、皆文藝を多少理解せざるはなし。已に其の文藝を解すれば、また文藝家の經歷・性行・學問・流派までも知悉せむとす、これ人情の常なり。しかも現代この要求を充たすべき適當の著書少し。これ著者が育英の餘に本書を發行せし所以ならずや。

本書に収録せられし人物は、主として明治大正の詩歌・俳諧・川柳・小説・戯曲・書畫・彫刻・塑像等の諸名家、凡そ一千六百三十家を網羅し、一々その人の經歷・性行・學問・流派を明かにし、務めて精確と詳審とを期せしものなれば、本書は實に文藝趣味の修養に熱心と向上心とを有する青春の士女、特に文化の生活に渴仰するもの、見聞を博めて社會の耳目たらむとするもの智識を高めて一世の師表たらむとするもの、要求を充たし希望に酬ゆるに足らむ。これ予が著

者に對して滿腔の喜を致す所以なり。

四

大正十五年三月

文學博士 兒島 獻吉郎

序

松本龍之助君、此の頃明治大正の時代に於ける文藝美術家の傳記を編して世に公けにせんとし、人を介して序を余に徵せらる。浩瀚の書、之を精讀すること能はざるも、一人の力、斯くまで多方面に涉りて、諸家の傳記を蒐集せられたる苦心の尋常ならざりしを思ふと共に、また氏が趣味の廣汎なるに感ぜずんばあらず。聞く、著者は夙に文學を學びて長く奈良女子高等師範學校に教鞭を執るの傍、力めて内外の文學美術を研究し、山積せる材料を整理して本書を編むに至れりと。明治大正の時代に於て刊行せられたる此種の著述必ずしも鮮しとせず。而も、文藝美術の兩面に跨りて、これが全視野を鳥瞰し得べきものに至りては、未だこ

二

れあるを聞ず。是れ實に斯道愛好家の至寶にして、また明治大正の文藝美術史を知らんとする者の一大參考資料たり。顧ふに獨力を以て此の如き大著述を完成するは固より容易の業にあらざ。若し一々精讀せば或は加除改竄を要する所なしとせざるべし。これらの缺陷については、他日更に正確なる調査を遂げて、一層完璧に近からしめんことを希望して止まざるところなり。

大正十五年三月

學習院長 福原 鏢二郎
帝國美術院長

明治 文學美術人名辭書索引

故饗庭篁村……………	一	朝倉文夫……………	八	阿部天風……………	二七
青木月斗……………	一	淺田江村……………	九	安倍能成……………	二七
青木健作……………	二	淺原六郎……………	二〇	天岡均一……………	二七
故青木 繁……………	二	蘆田正喜……………	二〇	新井 完……………	二八
青野季吉……………	二	蘆野楠山……………	二〇	新井寬方……………	二八
青柳琴僊……………	三	安宅安五郎……………	二一	新井紀一……………	二九
青柳有美……………	三	足立源一郎……………	二一	新井 洸……………	二九
赤木格堂……………	四	足立輝子……………	二二	新井洞巖……………	二九
赤木柝平……………	四	安達半遷……………	二三	荒江 啓……………	二〇
赤松麟作……………	五	阿出川眞水……………	二三	故荒木寬畝……………	二〇
秋田雨雀……………	五	跡見花蹊……………	二二	荒木月畝……………	二二
故秋月天放……………	五	跡見玉枝……………	二二	荒木十畝……………	二二
秋庭俊彦……………	六	跡見 泰……………	二四	荒波煙崖……………	二三
秋山碧城……………	六	姉崎嘲風……………	二五	有島生馬……………	二三
芥川龍之介……………	七	故安部井磐根……………	二五	故有島武郎……………	二三
		阿部次郎……………	二六	有友蘭溪……………	二四
				有島素岳……………	二五

在原古玩……………三
粟津水榭……………六
安齋櫻魄子……………六
故安藤忠太郎……………七
故安藤榎面坊……………七
故安藤廣重……………六
安藤和風……………六

〔1〕

故飯田武郷……………六
飯田蛇笏……………六
故飯田綠處……………六
飯塚友一郎……………三
飯野忠一……………三
猪飼嘯谷……………三
筏井竹の門……………三
五十嵐力……………三
猪狩史山……………三
生田葵……………三
生田春月……………三

生田長江……………三
生田蝶介……………六
生田花世……………六
郁曼陀……………七
井汲清治……………七
池上秀敏……………六
池崎忠孝……………四
故池田雲樵……………六
池田永治……………六
池田桂仙……………六
故池田蕉園……………六
池田大伍……………六
故池田輝方……………六
池田勇八……………六
故池邊善象……………四
井澤蘇水……………四
石井金陵……………四
石井鶴三……………四
故石井鼎湖……………四

石井天風……………四
石井柏亭……………四
石川確治……………四
石川幹明……………四
石川欽一郎……………四
故石川鴻齋……………四
故石川光明……………四
故石川啄木……………四
石川丹麗……………四
石川寅治……………四
石川柳城……………四
石樽千亦……………四
石坂養平……………四
石崎光瑤……………四
石島雄子郎……………五
石橋雲來……………五
石橋思案……………五
石橋忍月……………五
故石橋羅窓……………五
石橋和訓……………五

石原純……………三
石丸梧平……………五
泉鏡花……………五
岩動炎天……………五
故猪瀬東寧……………五
磯田長秋……………五
磯野秋渚……………五
磯萍水……………五
井田絃聲……………五
一氏義良……………六
市川又彦……………六
故一條成美……………六
故市村水香……………六
伊藤鷗二……………六
伊藤貴麿……………六
伊藤銀月……………六
井東憲……………六
故伊藤左千夫……………六
伊藤松宇……………六
故伊藤小坡……………六

伊藤深水……………六
伊藤忠太……………六
故伊藤聽秋……………六
伊藤鉄女……………六
伊藤松雄……………六
故伊藤軒軒……………六
伊藤快彦……………六
伊藤六郎……………六
故稻垣碧峯……………六
稻毛詛風……………六
故稻葉鯤……………六
犬養健……………六
犬養毅……………七
井上劍花坊……………七
井上毅……………七
井上巽軒……………七
井上通泰……………七
井上康文……………七
井上賴圀……………七
故猪熊夏樹……………六

茨木不仙……………七
伊原青々園……………七
伊福部隆輝……………七
故葵文……………七
今泉定介……………七
今泉雄作……………七
今井爽邦……………七
今井彦三郎……………七
今尾景年……………七
故今戸蝸牛……………八
今西吉雄……………八
故今村紫紅……………八
入江爲守……………八
入澤昕江……………八
入山れき子……………八
岩木躑躅……………八
岩溪裳川……………八
故岩野泡鳴……………八
故岩村透……………八
故巖谷一六……………八

巖谷小波……………九

〔ウ〕

上杉信齋……………九
 植竹雲邦……………九
 故上田耕冲……………九
 上田萬秋……………九
 上田萬年……………九
 故上田敏……………九
 上野山しづ……………九
 上原桃畝……………九
 上原澹……………九
 故植松彰……………九
 故植松有經……………九
 植松安……………九
 上夢香……………九
 浮田和民……………九
 宇佐美不喚……………九
 潮みどり……………九
 牛田雞村……………九

故薄井龍之……………九

白田亞海……………一〇〇
 歌川國峰……………一〇一
 内田遠湖……………一〇一
 内田青峰……………一〇二
 内田魯庵……………一〇三
 内村鑑三……………一〇五
 故内村鱧香……………一〇五
 内海吉堂……………一〇五
 内海月杖……………一〇六
 鶴殿梁園……………一〇六
 海上龍子……………一〇六
 故海上胤平……………一〇七
 宇野喜代之助……………一〇八
 宇野浩二……………一〇九
 生方敏郎……………一〇九
 梅原龍三郎……………一一〇
 故梅本黑人……………一一〇
 海野厚……………一一〇
 故海野勝珉……………一一一

故海野美盛……………一一

〔エ〕

江川成之……………一一
 故江木冷灰……………一一
 江口渙……………一一
 江知川朝陽……………一二
 故榎本虎彦……………一二
 江原小孫太……………一四
 故江馬天江……………一六
 江馬修……………一六
 江間道助……………一七
 江見水隆……………一七
 故遠藤足穂……………一八
 大泉黒石……………一九
 故大出東臯……………二〇
 故大江敬香……………二〇
 大木雄三……………二二

大草小雲……………二三

故大口鯛二……………二三
 故大國隆正(野々口隆正)……………二三
 故大久保作次郎……………二四
 故大久保湘南……………二五
 大熊氏廣……………二五
 大倉桃郎……………二六
 大河内翠山……………二六
 故大澤清臣……………二七
 大澤鐵石……………二七
 故大下藤次郎……………二八
 故大須賀乙字……………二九
 故大杉榮……………二九
 大關五郎……………三〇
 大關柊郎……………三〇
 大瀧雨山……………三一
 大瀧鞍馬……………三一
 太田喜二郎……………三一
 太田沙夢樓……………三一
 太田稠夫……………三三

大谷句佛……………三四

大谷繞石……………三四
 太田正雄……………三四
 太田水穂……………三五
 大村廣陽……………三五
 太田原宗悦……………三五
 大智勝觀……………三五
 故大塚補緒子……………三六
 大塚保治……………三六
 大槻如電……………三六
 大槻東陽……………三六
 大槻文彦……………三六
 大坪正義……………三六
 故大沼枕山……………三六
 故大西祝……………三六
 故大野幸彦……………三六
 故大野洒竹……………三六
 大野隆徳……………三六
 故大橋乙羽……………三六
 大橋翠石……………三六

大橋房子……………三六

大場白水郎……………三六
 大曲駒村……………三七
 故大町桂月……………三七
 大村喜代子……………三七
 大村桐陽……………三七
 大森眠歩……………三九
 大藪文雄……………三九
 故大和田建樹……………四〇
 岡榮一郎……………四一
 岡鬼太郎……………四一
 岡倉秋水……………四一
 故岡倉天心……………四一
 岡崎春石……………四一
 小笠原長幹……………四一
 小笠原長生……………四一
 岡精一……………四一
 岡千仞……………四一
 尾形雲海……………四一
 岡田起作……………四一

故尾形月耕	一五	岡山高隆	一七	故小倉惣次郎	一七九
尾形月三	一五	故岡吉胤	一六	小栗風葉	一八〇
岡田三郎	一五	故岡鹿門	一六	尾崎喜八	一八一
岡田三郎助	一五	小川芋錢	一七〇	故尾崎紅葉	一八二
岡田蘇水	一五	小川煙村	一七〇	尾崎士郎	一八三
岡田正之	一五	小川千龜	一七〇	小山内薫	一八四
岡田八千代	一五	故小川直子	一七〇	小澤碧堂	一八五
岡野榮	一五	小川未明	一七一	小澤愛因	一八五
岡野知十	一五	故大給恒	一七二	故押川春浪	一八六
故岡村柿紅	一六〇	荻生天泉	一七三	尾瀬哀歌	一八六
岡村種香	一六一	沖野岩三郎	一七四	織田一鷹	一八七
岡村千秋	一六一	故荻原巖雄	一七五	尾竹越堂	一八七
岡本一平	一六一	荻原井泉水	一七五	尾竹國觀	一八七
岡本可亭	一六一	故荻原守衛	一七五	尾竹竹坡	一八八
岡本かの子	一六一	奥川夢郎	一七六	織田子青	一八八
岡本綺堂	一六一	故奥原晴湖	一七六	小田島十黃	一八九
故岡本黃石	一六一	奥原晴翠	一七六	小田蓼洲	一八九
岡本潤	一六一	故奥宮慥齋	一七七	落合東郭	一九〇
岡本大更	一六一	奥村博史	一七七	故落合直亮	一九〇
岡本靈華	一六一	小倉右一郎	一七九	故落合直澄	一九〇

故落合直文	一九	故加來春齋	二〇五	加藤英舟	二二四
故落合芳幾	一九	故角田浩浩歌客	二〇五	加藤介春	二二五
尾上柴舟	一九四	葛西善藏	二〇六	加藤一夫	二二六
故小野鷺堂	一九五	故嵩古香	二〇六	加藤子柏堂	二二六
故小野湖山	一九六	故春日白水	二〇七	加藤靜兒	二二七
小野竹橋	一九六	片上伸	二〇八	加藤雪腸	二二七
小野浩	一九六	片桐霞峰	二〇九	加藤武雄	二二七
小野政方	一九九	片多徳郎	二〇九	加藤まさむ	二二八
小野みち子	一九九	片山孤村	二〇九	加藤謙	二二九
故小原鐵心	一九九	故片山四郎	二一〇	故門脇重綾	二二九
尾山篤二郎	二〇〇	故片山冲堂	二一一	故金井秋蘋	二二九
折口信夫(釋道空)	二〇二	堅山南風	二一一	金森觀陽	二三〇
		故梶田半古	二一一	金森匏瓜	二三〇
		勝田蕉琴	二二二	金山平三	二三〇
		勝島仙坡	二二三	金子薫園	二三〇
		勝峯晋風	二二三	金子筑水	二三一
		桂井未翁	二二三	金子光晴	二三一
		加藤朝鳥	二三四	金子元臣	二三一
		加藤有年	二三四	金子洋文	二三一
		加藤磯夫	二八〇	故金田兼次郎	二三三

〔力〕

故狩野晏川	三三四	川出麻須美	三三三	河竹繁俊	三三三
加納作次郎	三三四	故川上花外	三三三	故河竹默阿彌	三三三
加納鐵哉	三三五	河上左京	三三三	川田順	三三四
狩野探令	三三五	川上三太郎	三三三	故河津直入	三三五
故狩野友信	三三六	川上澹堂	三三三	故河鍋曉齋	三三六
故狩野芳崖	三三六	故川上冬崖	三三七	河鍋狸々	三三七
鹿子木猛郎	三三七	川北霞峰	三三七	川浪てい子	三三七
鏑木清方	三三七	故川口枕河	三三八	川西和露	三三七
故鎌田正夫	三三八	故川口東州	三三八	故川端玉章	三三八
鎌田正憲	三三九	川口尙輝	三三八	川端康成	三三八
故鎌田梁洲	三三九	川崎小虎	三三八	川端龍子	三三九
鎌原手渚	三三九	川崎紫山	三三九	河原辰三	三三九
上川井梨葉	三三〇	故川崎千虎	三三九	河東碧梧桐	三三〇
神近市子	三三〇	川崎春二	三三九	川合玉堂	三三一
上司小劍	三三一	河崎蘭香	三三九	故川合清丸	三三一
故龜谷省軒	三三一	川島理一郎	三三九	河合新藏	三三一
加茂百樹	三三二	河杉初子	三七〇	河合英忠	三三二
萱野二十一	三三三	川路柳虹	三三九	故川村雨谷	三三三
茅原華山	三三三	故川田鸞江	三三九	川村花菱	三三三
河井醉茗	三三四	故河田貫堂	三三九	川村清雄	三三三

川村黃雨……………三三四
 川村曼舟……………三三五
 蒲原有明……………三三五
 故岸竹堂……………三三六

〔キ〕

菊池寬……………三三六
 菊池契月……………三三七
 故菊池三溪……………三三八
 故菊池芳文……………三三八
 菊池幽芳……………三三九
 故菊池容齋……………三三九
 岸田劉生……………三三〇
 岸浪柳溪……………三六一
 岸上操……………三六一
 故木蘇岐山……………三六一
 木蘇殼……………三六二
 北尾龜男……………三六三
 木谷千種……………三六三
 木谷蓬吟……………三六三

喜谷六花……………三三六
 北野恒富……………三三六
 北原白秋……………三三六
 北村四海……………三三六
 喜多村進……………三三七
 北村西望……………三三七
 故北村透谷……………三三八
 故北村初雄……………三三八
 北村正信……………三三九
 紀潮雀……………三三九
 吉川靈華……………三三九
 故衣笠豪谷……………三三九
 木下尙江……………三三九
 木下蘇子……………三三九
 木下白露……………三三九
 木下李太郎……………三三九
 木下利玄……………三三九
 故君尾……………三三九
 故木村香雨……………三三九
 木村小舟……………三三九

〔ク〕

木村莊太……………三三六
 木村莊八……………三三六
 木村鷹太郎……………三三七
 木村恒……………三三七
 木村毅……………三三七
 木村半文錢……………三三七
 木村武山……………三三八
 故木村正辭……………三三八
 清浦明人……………三三九
 清見陸郎……………三三九
 桐谷洗麟……………三三九
 故陸羯南……………三三〇
 日下勺水……………三三一
 日下部鳴鶴……………三三一
 草野柴二……………三三四
 久志本梅莊……………三三四
 楠田敏郎……………三三五
 葛原齒……………三三五

故楠本碩水	二六六
楠山正雄	二六七
久津見顯村	二七八
工藤他山	二八八
邦枝完二	二八九
國枝史郎	二九〇
國方林三	二九〇
○故國木田獨步	二九〇
國木田虎雄	二九三
故國澤新九郎	二九三
久保猪之吉	二九四
窪田空穂	二九五
久保田金僊	二九六
故久保田桃水	二九六
久保田俊彦	四〇九
故久保田米遷	二九六
久保田萬太郎	二九七
久保天隨	二九七
久保よりえ	二九八
熊岡美彦	二九九
故熊谷直彦	二九九
久米桂一郎	三〇〇
久米正雄	三〇〇
倉澤廣吉	三〇一
倉田艶子	三〇一
倉田白羊	三〇一
倉田百三	三〇三
故倉田柚岡	三〇四
故倉田幽谷	三〇四
九里四郎	三〇五
栗田興功	三〇五
栗原玉葉	三〇六
栗原古城	三〇六
○故厨川白村	三〇六
黑板勝美	三〇七
故黑板欽堂	三〇八
黑田湖山	三〇八
故黑川眞頼	三〇九
黑木拜石	三二〇
黑田清綱	三二一
黑田清輝	三二二
黑田重太郎	三二三
黑田鵬心	三二三
故畔柳芥舟	三二三
桑木巖翼	三二三
桑名鐵城	三三四
〔ケ〕	
故桂花園桂花	三三五
故下條桂谷	三三五
毛東又太郎	三三六
〔ク〕	
小池秋草	三三七
小泉迂外	三三七
小泉 鐵	三三八
故小泉八雲	三三八
故小出 榮	三三〇
小出樽重	三三三

○幸田露伴	三三三
故上月豊蔭	三三三
故幸堂得知	三三四
故河野小石	三三四
河野通勢	三三五
河野桐谷	三三五
故幸野樸嶺	三三六
國府犀東	三三六
郡 虎彦	三三三
國分青崖	三三七
國分操子	三三七
故小坂芝田	三三九
故小坂象堂	三三〇
小島烏水	三三〇
兒島星江	三三〇
小島德彌	三三一
兒島虎次郎	三三一
小島政二郎	三三三
故小杉楹邨	三三三
○小杉天外	三三四
小杉未醒	三三五
小杉余子	三三六
五姓田芳柳(二世)	三三六
故五姓田芳柳(一世)	三三六
巨勢小石	三三七
故五姓田義松	三三七
古泉千櫻	三三八
故小曾根乾堂	三三九
兒玉花外	三三九
故兒玉果亭	三四〇
故胡 鐵梅	三四一
小寺菊子	三四一
小寺健吉	三四一
小寺融吉	三四二
後藤末雄	三四二
後藤宙外	三四二
木島櫻谷	三四四
小早川秋聲	三四四
故小林愛竹	三四四
故小林永濯	三四五
小林古徑	三四六
小林鐘吉	三四六
小林躰齊	三四六
小林愛雄	三四七
小林萬吾	三四七
故小林清親	三四八
小堀靱音	三四八
故小牧櫻泉	三四八
小牧近江	三四九
小松原健吉	三四九
五味清吉	三五〇
小宮豊隆	三五〇
小村大雲	三五〇
故小室樵山	三五二
小室翠雲	三五二
小森三好	三五三
小山榮達	三五三
故小山正太郎	三五三
近藤經一	三五四
近藤浩一路	三五五

近藤雪竹……………三五

〔廿〕

故西郷孤月……………三五
故稅所敦子……………三五
西條八十……………三五
齋藤香村……………三五
齋藤知白……………三五
齋藤吊花……………三五
齋藤豐作……………三五
齋藤俳小星……………三五
齋藤芳洲……………三五
齋藤茂吉……………三五
齋藤與里……………三五
故齋藤綠雨……………三五
酒井覺醉……………三五
坂井久良岐……………三五
坂井犀水……………三五
堺利彦……………三五
榑原紫峯……………三五

阪口五峯……………三六

故坂崎 斌……………三六
坂田九峰……………三六
坂田玉輔……………三六
故坂田警軒……………三六
坂本紅蓮洞……………三六
坂本繁二郎……………三六
坂本石創……………三六
坂本雪鳥……………三六
阪本蕨園……………三六
故坂本四方太……………三六
故佐久間鐵園……………三六
佐久間法師……………三六
佐久政一……………三六
櫻井忠溫……………三六
櫻井天壇……………三六
笹川臨風……………三六
佐々木孝丸……………三六
佐々木信綱……………三六
佐々木味津三……………三六

佐々木茂索……………三七

故佐々醍雪……………三七
佐治祐吉……………三七
故佐瀨醉梅……………三七
故佐瀨得所……………三七
故佐竹永海……………三七
故佐竹永湖……………三七
佐竹永陵……………三七
故五月庵斗麥……………三七
佐藤 清……………三七
故佐藤硯湖……………三七
佐藤紅綠……………三七
佐藤紫烟……………三七
佐藤惣之助……………三七
佐藤朝山……………三七
佐藤俊子(田村俊子)……………三七
故佐藤梅園……………三七
佐藤春夫……………三七
故佐藤牧山……………三七
佐藤綠葉……………三七

佐藤六石……………三九〇

里見 淳……………三九一
眞田久吉……………三九一
佐野製裝美……………三九一
寒川鼠骨……………三九二
澤木 梢……………三九二
澤村胡夷……………三九二
澤 ゆき……………三九三
山宮 允……………三九四
故三條西季知……………三九五

〔廿一〕

椎塚蕪華……………三九五
志賀重昂……………三九五
志賀直哉……………三九七
鹿間松濤樓……………三九八
故重野安釋……………三九八
靜間 密……………四〇〇
篠田雪峯……………四〇〇
篠原溫亭……………四〇〇

篠原春雨……………四〇一

故信夫恕軒……………四〇一
四宮憲章……………四〇一
柴田勝衛……………四〇二
故柴田是眞……………四〇二
故柴東海散士……………四〇二
故鹽井雨江……………四〇三
故鹽川文麟……………四〇三
鹽谷青山……………四〇四
鹽谷節山……………四〇四
鹽谷鶴平……………四〇七
澁川玄耳……………四〇七
故澁谷牀山……………四〇八
澁谷せらぎ……………四〇八
島木赤彦……………四〇九
島崎藤村……………四〇九
島崎柳埜……………四〇九
島 成園……………四〇九
故島 雪舸……………四一三
故島 雪齋……………四一三

島田五工……………四一四

島田清次郎……………四一五
島田青峯……………四一六
島林一平……………四一六
島 文次郎……………四一六
島道素石……………四一七
島村民藏……………四一七
島村琴三……………四一八
故島村抱月……………四一八
志水 直……………四一九
清水彌太郎……………四一九
清水良雄……………四二〇
故清水蓮成……………四二〇
故清水樂山……………四二〇
清水鱸江……………四二一
持明院基哲……………四二二
下田歌子……………四二二
霜田史光……………四二三
下村爲山……………四二三
下村觀山……………四二三

下村千秋……………四二五
 故雀庵……………四二五
 釋 迢空……………四二一
 首藤石眠……………四二六
 庄司瓦全……………四二七
 庄田鶴友……………四二七
 白井雨山……………四二七
 白石實三……………四二八
 故白河次郎……………四二九
 故素木しづ……………四二九
 白瀧幾之助……………四二九
 白鳥省吾……………四三〇
 白濱 徵……………四三一
 白柳秀湖……………四三一
 故眞海……………四三一
 新海竹太郎……………四三一
 故春秋庵幹雄……………四三一
 新城和一……………四三一
 故進藤香塲……………四三三
 進藤 進……………四三三

神中糸子……………四四四
 吹田順助……………四四四
 故末松謙澄……………四四四
 菅 楯彦……………四四六
 故菅原白龍……………四四六
 故須川信行……………四四六
 故杉浦梅潭……………四四七
 杉浦非水……………四四七
 故杉賀阿彌……………四四八
 杉溪六橋……………四四八
 故杉 聽雨……………四四九
 杉村楚人冠……………四四九
 杉森南山……………四四九
 杉山一轉……………四四九
 鈴木 悅……………四五〇
 鈴木燕郎……………四五〇
 鈴木花菱……………四五〇
 鈴木華邨……………四五〇

鈴木松塘……………四四三
 故鈴木松年……………四四四
 鈴木西湖……………四四四
 故鈴木泉三郎……………四四五
 鈴木喜太郎……………四四五
 薄田泣菫……………四四六
 故鈴木忠孝……………四四七
 故鈴木長吉……………四四八
 鈴木東山……………四四八
 故鈴木百年……………四四八
 鈴木豹軒……………四四九
 鈴木三重吉……………四四九
 須藤鍾一……………四五〇
 故須藤南翠……………四五〇
 關口文象……………四五二
 關澤霞庵……………四五二
 關根正直……………四五二
 故關根默庵……………四五二

瀬戸義直……………四五三
 故雪中庵雀志……………四五三
 千家元鷹……………四五四

[リ]

相馬御風……………四五六
 相馬泰三……………四五七

[夕]

大藤治郎……………四五七
 故田岡嶺雲……………四五九
 故多賀庵由池……………四五九
 高木角戀坊……………四六〇
 高木背水……………四六〇
 高倉 輝……………四六一
 高桑義生……………四六一
 故高崎正風……………四六一
 高柴象外……………四六三
 高島九峰……………四六三
 高島北海……………四六四

高須梅溪……………四六五
 鷹田其石……………四六六
 高田集藏……………四六七
 高田常齋……………四六七
 高田竹山……………四六七
 高田蝶衣……………四六八
 故高野竹隱……………四六九
 高取稚成……………四七〇
 鷹野つぎ……………四七一
 故高橋勝藏……………四七一
 高橋玉淵……………四七二
 故高橋月山……………四七二
 故高橋源吉……………四七三
 故高橋廣湖……………四七三
 高橋泥舟……………四七三
 故高橋富兄……………四七四
 故高橋由一……………四七四
 故高島式部……………四七五
 高濱虛子……………四七五
 高間惣七……………四七七

故高見廣川……………四七七
 故高嶺秀夫……………四七八
 高村光雲……………四七八
 高村眞夫……………四七八
 故高村東雲……………四七九
 高村光太郎……………四七九
 高群逸枝……………四八〇
 高安月郊……………四八一
 高安紫山……………四八三
 瀧井折柴……………四八三
 故瀧 和亭……………四八四
 瀧田樗陰……………四八五
 田口掬汀……………四八六
 故田口鼎軒……………四八六
 故田口米作……………四八七
 田口米舫……………四八七
 故武井柯亭……………四八七
 故竹内久一……………四八八
 武内桂舟……………四八八
 竹内信山……………四八九

竹内栖鳳……………四八九
 竹尾千代……………四九〇
 竹越三又……………四九一
 武定巨口……………四九二
 故竹柴其水……………四九三
 武島羽衣……………四九三
 故竹添井々……………四九四
 武田 榮……………四九六
 武田 鷲塘……………四九六
 武田霞洞……………四九七
 武田仰天子……………四九七
 竹田敬方……………四九七
 竹田半山……………四九八
 竹友藻風……………四九八
 故竹貫住水……………四九九
 武林無想庵……………五〇〇
 竹久夢二……………五〇〇
 太宰施門……………五〇一
 故田崎草雲……………五〇二
 田島象二……………五〇三

田代龍岳……………五〇三
 田代 倫……………五〇四
 故多田親愛……………五〇四
 多田不二……………五〇五
 故田近竹邨……………五〇五
 橋 糸重……………五〇六
 橋 道守……………五〇六
 建島大夢……………五〇七
 館森袖海……………五〇七
 故田所千秋……………五〇八
 田中宇一郎……………五〇八
 田中王堂……………五〇八
 田中實太郎……………五〇九
 田中吾呂八……………五〇九
 田中 純……………五一〇
 田中總一郎……………五一〇
 田中田士英……………五一〇
 田中 實……………五一二
 田中賴章……………五一二
 田邊 至……………五一三

田邊碧堂……………五一三
 田邊松坡……………五一四
 故田邊蓮舟……………五一五
 田南岳嶂……………五一六
 故谷口露山……………五一六
 故谷口香嶠……………五一六
 故谷口藍田……………五一七
 谷崎潤一郎……………五一八
 谷崎精二……………五一九
 故谷森善臣……………五二〇
 故田能村直入……………五二〇
 玉手菊洲……………五二一
 田村俊子……………五二一
 田村西男……………五二二
 故田村宗立……………五二二
 田山花袋……………五二三
 田原梅谷……………五二三
 故彈琴 緒……………五二三

近松秋江……………五二四
 遲塚麗水……………五二五
 芽野蕭々……………五二五
 千葉掬香……………五二七
 千葉江東……………五二八
 中條百合子……………五二八
 故長 三洲……………五二九

〔ツ〕

塚原健二郎……………五三一
 故塚原濂柿園……………五三一
 塚本虛明……………五三二
 故月岡芳年……………五三三
 筑波四郎……………五三三
 都路華香……………五三三
 辻 宇之助……………五三三
 辻 香雨……………五三四
 辻 冬史庵……………五三四
 辻 永……………五三四
 津田青楓……………五三五

津田光造……………五三五
 萬谷龍岬……………五三六
 土井晚翠……………五三六
 土子晴吉……………五三七
 土田杏村……………五三七
 土田夢齋……………五三八
 土屋鳳洲……………五三九
 故綱島梁川……………五四〇
 故角田竹冷……………五四一
 椿 貞雄……………五四二
 津端道彦……………五四三
 坪内士行……………五四四
 坪内遣遙……………五四四
 坪谷水哉……………五四六
 津村京村……………五四六
 鶴見祐輔……………五四七
 故寺崎廣業……………五四七
 寺崎武男……………五四八

〔ト〕

寺松國太郎……………五四八
 田 鶴年……………五四九
 故土居光華……………五四九
 土居香國……………五五〇
 故東儀鐵笛……………五五一
 東郷青兒……………五五一
 戸川貞雄……………五五二
 戸川殘花……………五五二
 戸川秋骨……………五五三
 土岐哀果……………五五三
 德田浩司(近松秋江)……………五五四
 德田秋聲……………五五四
 德田隣齋……………五五五
 德富蘇峰……………五五五
 德富蘆花……………五五七
 故土佐光文……………五五八
 戸田玉秀……………五五八
 都島英喜……………五五九

(附、都島雪香)..... 五九九

戸張孤雁..... 五九九

登張竹風..... 五九九

故富岡永洗..... 五九〇

故富岡鐵齋..... 五九〇

故富田鷗波..... 五九一

富田溪仙..... 五九一

富田碎花..... 五九二

富取芳河士..... 五九三

富取風堂..... 五九三

富本憲吉..... 五九三

富安風生..... 五九四

故外山、山..... 五九四

豐島與志雄..... 五九六

故豐原國周..... 五九六

豐道春海..... 五九七

故鳥居清貞..... 五九七

鳥居清忠..... 五九七

故鳥居清滿..... 五九八

鳥居雪田..... 五九八

[十]

内藤 濯..... 五九八

内藤湖南..... 五九八

内藤銀策..... 五九〇

内藤辰雄..... 五九〇

内藤 伸..... 五九一

内藤鳴雪..... 五九一

長井雲坪..... 五九三

故永井禾原..... 五九三

永井荷風..... 五九四

長井金風..... 五九六

故中井敬所..... 五九七

永井 潛..... 五九八

永井柳太郎..... 五九八

中内蝶二..... 五九九

長尾雨山..... 五九九

永尾宗芹..... 五九九

長尾 豐..... 五九九

中川紀元..... 五九九

故中川四明..... 五九〇

故中川八郎..... 五九一

仲木貞一..... 五九一

中桐確太郎..... 五九二

永坂石塊..... 五九二

中澤靜雄..... 五九四

中澤弘光..... 五九四

故中澤臨川..... 五九四

中島 清..... 五九五

中島孤島..... 五九五

故中島湘煙..... 五九六

中島兎子..... 五九六

永島直昭..... 五九七

故中島來章..... 五九七

仲小路彰..... 五九七

永代靜雄..... 五九八

長瀨春風..... 五九八

長瀨守男..... 五九八

永瀨善郎..... 五九八

仲田勝之助..... 五九八

永田青嵐..... 五九九

中田敬義..... 五九九

永田龍雄..... 五九〇

故中谷徳太郎..... 五九一

長田秀雄..... 五九一

長田幹彦..... 五九二

中塚一碧樓..... 五九二

故長塚 節..... 五九三

中戸川吉二..... 五九四

永地秀太..... 五九四

中西伊之助..... 五九四

故中西耕石..... 五九五

中西悟堂..... 五九五

長沼守敬..... 五九五

故中根香亭..... 五九六

故中根半嶺..... 五九七

長野草風..... 五九七

故中林梧竹..... 五九七

中林 儼..... 五九八

中原綾子..... 五九八

中原潔子..... 五九九

長原止水..... 六〇〇

中原悌治郎..... 六〇〇

故中丸精十郎..... 六〇〇

故中村秋香..... 六〇〇

故中村櫻溪..... 六〇一

中村岳陵..... 六〇二

中村滕次郎..... 六〇二

中村吉藏..... 六〇二

故中村敬宇..... 六〇四

中村孤月..... 六〇四

中村星湖..... 六〇五

故中村 彝..... 六〇五

中村白葉..... 六〇五

中村不折..... 六〇六

中村武羅夫..... 六〇七

中村樂天..... 六〇七

中村良顯..... 六〇七

中村亮平..... 六〇八

中山 啓..... 六〇八

[三]

中山稻青..... 六〇九

長與善郎..... 六〇〇

半井桃水..... 六〇〇

奈倉梧月..... 六〇一

故夏目漱石..... 六〇二

名取春仙..... 六〇四

鍋井克之..... 六〇四

浪上圓玉..... 六〇五

故成島柳北..... 六〇五

成瀨正一..... 六〇六

故成瀨大城..... 六〇六

成瀨無極..... 六〇七

南部修太郎..... 六〇七

故南摩羽峰..... 六〇八

新居 格..... 六〇九

新岡旭宇..... 六〇九

贊川他石..... 六〇九

西井敬岳..... 六〇九

故西尾爲忠……………三〇
 故西川春洞……………三〇
 西川 勉……………三一
 西澤笛畝……………三一
 西島〇丸……………三二
 西田幾太郎……………三三
 故西 南臺……………三三
 故西 薇山……………三三
 西宮藤朝……………三三
 西村伊作……………三四
 西村渚山……………三五
 西村醉夢……………三五
 西村天囚……………三六
 西村陽吉……………三七
 故西村芳藤……………三七
 西山翠嶂……………三八
 西山泊雲……………三八
 丹羽海鶴……………三八

〔又〕

額田六福……………三九
 沼波瓊音……………三〇
 沼田一雅……………三〇
 沼田笠峰……………三〇
 沼 夜濤……………三一
 〔示〕
 故根本樵谷……………三一
 根本雪蓬……………三二
 故根本通明……………三三
 〔ノ〕
 納谷一堂……………三三
 野上白川……………三三
 野上彌生子……………三三
 野口雨情……………三三
 野口小惠……………三三
 故野口寧齋……………三三
 故野口幽谷……………三三

野口米次郎……………三八
 野尻抱影……………三八
 野田九浦……………三九
 野田別天樓……………三九
 野長瀨晚花……………三九
 野々口隆正……………三九
 信岡雄四郎……………四〇
 昇 曙夢……………四〇
 野村愛正……………四〇
 野村喜舟……………四〇
 野村素軒……………四〇
 故野村文學……………四〇
 故野村隈畔……………四〇
 〔ハ〕
 灰野庄平……………四〇
 故芳賀眞咲……………四〇
 芳賀矢一……………四〇
 故萩野由之……………四〇
 萩原恭次郎……………四〇

萩原朔太郎……………三七
 萩原蘿月……………三七
 橋口五葉……………三八
 橋田東聲……………三八
 橋爪 惠……………三八
 橋本永邦……………三九
 橋本海關……………三九
 故橋本雅邦……………三九
 橋本關雪……………四〇
 橋本邦助……………四〇
 橋本靜水……………四〇
 橋本秀邦……………四〇
 長谷川榮作……………四〇
 長谷川時雨……………四〇
 長谷川春草……………四〇
 長谷川天溪……………四〇
 長谷川如是閑……………四〇
 長谷川 昇……………四〇
 長谷川二葉亭……………四〇
 長谷川巳之吉……………四〇

長谷川亮三……………三七
 長谷川零餘子……………三七
 故畠山 健……………三八
 畑 耕一……………三八
 羽田子雲……………三九
 畑 仙齡……………三九
 秦 豐吉……………三九
 畑 正吉……………四〇
 故八田知紀……………四〇
 服部宇之吉……………四〇
 服部耕石……………四〇
 服部擔風……………四〇
 服部桐園……………四〇
 服部嘉香……………四〇
 花田世大……………四〇
 花田比露思……………四〇
 花酒本聽秋……………四〇
 花房雲山……………四〇
 壇原久和代……………四〇
 馬場孤蝶……………四〇

故馬場不知嫂齋……………四〇
 濱谷白雨……………四〇
 濱田廣介……………四〇
 濱邨藏六……………四〇
 濱村米藏……………四〇
 林 信一……………四〇
 故林 美雲……………四〇
 林 龜臣……………四〇
 林 和……………四〇
 速水御舟……………四〇
 原阿佐緒……………四〇
 原 月舟……………四〇
 故原 在泉……………四〇
 原 石鼎……………四〇
 原田謙次……………四〇
 故原田直次郎……………四〇
 原田 實……………四〇
 原 白光……………四〇
 原 夢笑子……………四〇
 故春木南溟……………四〇

半田良平……………七〇八
阪正臣……………七〇八

〔七〕

故東久世通禧……………七〇九
匹田朱泉……………七〇九
故樋口一葉……………七〇九
樋口龍峽……………七〇九
故菱田春草……………七〇九
比田井天來……………七〇九
故日高秩父……………七〇九
故日高鐵翁……………七〇九
飛田周山……………七〇九
人見東明……………七〇九
日夏耿之介……………七〇九
故日根對山……………七〇九
日野草城……………七〇九
姬島竹外……………七〇九
平井樑仙……………七〇九
故平井晚村……………七〇九

故平木白星……………七〇八
平柳田中……………七〇九
故平子鐸嶺……………七〇九
平田松堂……………七〇九
平田禿木……………七〇九
平塚義平……………七〇九
平塚雷鳥……………七〇九
平沼鶴峯……………七〇九
故平野五岳……………七〇九
平林初之輔……………七〇九
故平福穗庵……………七〇九
平福百穗……………七〇九
齋崎英朋……………七〇九
廣島晃甫……………七〇九
故廣瀨勝平……………七〇九
廣瀨哲士……………七〇九
廣瀨東畝……………七〇九
廣田花崖……………七〇九
廣津和郎……………七〇九
廣津柳浪……………七〇九

〔フ〕

風光堂菊外……………七〇〇
故深川照阿……………七〇一
深田康算……………七〇一
故福井學圃……………七〇一
福士幸次郎……………七〇一
福島甲羽……………七〇一
故福住正兄……………七〇一
福田眉仙……………七〇一
福田正夫……………七〇一
故福地櫻痴……………七〇一
福永挽歌……………七〇一
故福羽美靜……………七〇一
故福原周峰……………七〇一
福原蘇洲……………七〇一
福本日南……………七〇一
藤井浩祐……………七〇一
藤井紫影……………七〇一
藤井眞澄……………七〇一

藤岡勝二……………七二二

故藤岡好古……………七二二
故藤岡東圃……………七二二
富士崎放江……………七二二
故藤澤南岳……………七二二
藤澤衛彦……………七二二
藤島武二……………七二二
藤代素人……………七二二
藤波千溪……………七二二
故藤雅三……………七二二
藤村千代……………七二二
藤森成吉……………七二二
藤森秀夫……………七二二
故藤原忠朝……………七二二
筆谷等觀……………七二二
舟木重雄……………七二二
舟木重信……………七二二
普門曉……………七二二
古手川忠助……………七二二
古屋芳雄……………七二二

〔ハ〕

碧流舎川柳……………七二三
別所梅之助……………七二三

〔ホ〕

帆足杏雨……………七二四
故星野恒……………七二四
星野更園……………七二四
星野潤一……………七二四
星野夢人……………七二四
故細川潤次郎……………七二四
故細川風谷……………七二四
細田源吉……………七二四
細田劍堂……………七二四
細田民樹……………七二四
堀内新泉……………七二四
堀江朔……………七二四
堀木克三……………七二四
堀口大學……………七二四

堀進二……………七二五

故堀秀成……………七二五
本多錦吉郎……………七二五
故本田種竹……………七二五
本間俊平……………七二五
本間久雄……………七二五

〔マ〕

前川素泉……………七二六
前田晃……………七二六
前田河廣一郎……………七二六
故前田香雪……………七二六
前田春聲……………七二六
前田曙山……………七二六
前田青邨……………七二六
前田普羅……………七二六
故前田默鳳……………七二六
前田夕暮……………七二六
前田林外……………七二六
牧野信一……………七二六

牧野虎雄……………七四一
 故卷 菱澤……………七四一
 故正岡子規……………七四三
 正木直彥……………七四六
 正木不如丘……………七四七
 正富汪洋……………七四七
 正宗得三郎……………七四八
 正白鳥……………七四八
 眞下醒客……………七四九
 故益頭峻南……………七五〇
 增田篤夫……………七五〇
 益田玉城……………七五一
 增田龍雨……………七五一
 故股野 琢……………七五二
 町尻量弘……………七五二
 町田曲江……………七五三
 松居松葉……………七五三
 故松井直吉……………七五四
 松井柏軒……………七五五
 松井友石……………七五五

松浦爲王……………七五五
 松浦 一……………七五五
 松浦鸞洲……………七五七
 松岡映丘……………七五八
 松岡 壽……………七五九
 松岡正雄……………七五九
 松岡 讓……………七五九
 松尾竹後……………七六〇
 松崎天民……………七六〇
 松平破天荒齋……………七六一
 松田學鷗……………七六二
 松田霞城……………七六二
 故松田秋水……………七六三
 故松田雪柯……………七六三
 故松波資之……………七六四
 松根東洋城……………七六四
 松林桂月……………七六五
 松原三五郎……………七六五
 松原至大……………七六六
 松原岫雲……………七六六

松村英一……………七六六
 松村みね子……………七六七
 故松本 巖……………七六八
 松本恭三……………七六九
 松本苦味……………七六九
 松本俊一……………七六九
 松本淳三……………七六九
 松本 泰……………七七〇
 松本白華……………七七〇
 松本初子(河杉初子)……………七七〇
 故松本楓湖……………七七一
 松本芳山……………七七一
 松本亦太郎……………七七一
 故間中雲颯……………七七一
 眞山青果……………七七二
 丸山晚霞……………七七三
 故丸山龍川……………七七三
 萬造寺 齊……………七七四

故三浦修吾……………七七四
 三浦關造……………七七五
 故三浦 安……………七七五
 三夕島葎子……………七七六
 三上於菟吉……………七七七
 故美甘政知……………七七七
 右田年英……………七七八
 故右田寅彦……………七七八
 三木露風……………七七八
 故三國幽眠……………七八〇
 三島章道……………七八〇
 三島霜川……………七八一
 故三島中洲……………七八一
 三島文子……………七八二
 故水落露石……………七八二
 水上泰生……………七八二
 水上瀧太郎……………七八三
 水島爾保布……………七八四
 水田竹圃……………七八四
 水木京太……………七八四

水谷竹紫……………七八四
 水谷鐵也……………七八五
 故水谷不倒……………七八五
 水谷まさる……………七八六
 水谷弓夫……………七八六
 故水野仙子……………七八六
 故水野疎梅……………七八七
 故水野年方……………七八七
 水野葉舟……………七八七
 水守龜之助……………七八八
 故溝口桂巖……………七八八
 溝口白羊……………七八九
 三井甲之……………七八九
 三津木貞子……………七九〇
 滿谷國四郎……………七九〇
 南木暉天樓……………七九一
 南 薰造……………七九一
 南 靜山……………七九二
 故嶺田楓江……………七九二
 故箕田凌頂……………七九二

三宅幾三郎……………七九五
 三宅克己……………七九五
 三宅孤軒……………七九四
 三宅周太郎……………七九四
 三宅雪嶺……………七九四
 三宅やす子……………七九五
 宮崎一雨……………七九六
 宮崎湖處子……………七九六
 故宮崎三味……………七九七
 故宮崎知全……………七九八
 宮崎安右衛門……………七九八
 宮崎來城……………七九九
 宮島新三郎……………八〇〇
 宮島資夫……………八〇〇
 宮地嘉六……………八〇〇
 宮林董哉……………八〇一
 宮原晃一郎……………八〇一
 宮森麻太郎……………八〇二

[ム]

故向山黄村……………八〇三
 武者小路實篤……………八〇三
 武藤竹陰……………八〇五
 武藤直治……………八〇五
 村井弦齋……………八〇五
 村岡融軒……………八〇五
 村上委山……………八〇六
 村上華岳……………八〇六
 村上鬼城……………八〇七
 村上露月……………八〇七
 村上浪六……………八〇八
 故村上佛山……………八〇八
 村上炳魚……………八〇九
 故村瀨玉田……………八〇九
 故村田海石……………八〇九
 村田綱坊……………八二二
 村田丹陵……………八二三
 室生犀星……………八二三

[メ]

村松梢風……………八三三
 村松正俊……………八三三
 故村山遜軒……………八四四
 村山勇三……………八四四
 目黒野鳥……………八四四
 免取慶一郎……………八四五

[モ]

故望月玉泉……………八四五
 故望月金鳳……………八五六
 望月青鳳……………八五六
 故本居豐穎……………八五六
 故元田東野……………八六七
 靱山柑子……………八八九
 靱山庭後……………八八九
 百田宗治……………八九〇
 故森 鷗外……………八九二
 故森 鷗村……………八九三

[マ]

故森 槐南……………八二一
 故森川竹暎……………八四四
 故森川杜園……………八四五
 故森 寛齋……………八六六
 森 琴石……………八六六
 森口多里……………八六六
 森 廣陵……………八六六
 故森 春濤……………八六七
 故守住貫魚……………八六九
 故森田月瀨……………八六九
 故森田思軒……………八七〇
 森田草平……………八七一
 森田恒友……………八七三
 守田寶丹……………八七三
 森 鳳聲……………八七三
 森 無黃……………八七三
 故諸井春畦……………八七四
 故師岡正胤……………八七四

八木岡春山……………八五五
 矢口 達……………八五五
 矢崎千代治……………八五六
 矢澤弦月……………八五六
 故矢島立軒……………八五六
 矢代幸雄……………八五七
 安井小酒……………八五七
 安井曾太郎……………八五七
 安江不空……………八五八
 安川久流美……………八五九
 保田素堂……………八五九
 安田 稔……………八六〇
 安田 靱彦……………八六〇
 保田龍門……………八六四
 故安田老山……………八六四
 故安成貞雄……………八六四
 安成二郎……………八六四
 故夜雪庵金羅……………八六四
 矢田挿雲……………八六四
 故矢田部尙今……………八六四

故矢田部嘉信……………八四四
 故矢土錦山……………八四四
 彌富破魔雄……………八四六
 故柳川春葉……………八四七
 故柳 敬助……………八四八
 柳 澤 健……………八四八
 柳 完悦……………八四九
 故柳田正齋……………八四九
 柳田泰麓……………八四九
 柳原白蓮……………八五〇
 矢野橋村……………八五〇
 矢野龍溪……………八五二
 山内愚僊……………八五三
 山内秋生……………八五三
 山内多門……………八五三
 山内義雄……………八五三
 山内英夫……………八五三
 故山岡鐵舟……………八五四
 故山岡米華……………八五五

山縣適所……………八五五
 山岸光宣……………八五六
 山口花笠……………八五六
 山口松陵……………八五六
 山口半峯……………八五七
 山崎 斌……………八五七
 山崎樂堂……………八五八
 山崎紫紅……………八五九
 山崎朝雲……………八五九
 故山路愛山……………八六〇
 山下繁雄……………八六一
 山下新太郎……………八六一
 故山田介堂……………八六二
 故山田寒山……………八六二
 故山田鬼齋……………八六二
 山田邦子……………八六三
 山田敬中……………八六三
 山田三子……………八六四
 山田新川……………八六四
 故山田淳子……………八六五

故山田美妙齋……………八八五
 山田わか……………八七七
 山中古洞……………八七七
 故山名貫義……………八六八
 山名義海……………八六八
 山村耕花……………八六八
 山村暮鳥……………八六九
 山本鼎……………八七〇
 山本竟山……………八七一
 山元春舉……………八七一
 山本昇雲……………八七一
 山本梅莊……………八七二
 故山本芳翠……………八七二
 山本森之助……………八七三
 山本有三……………八七三
 山脇信德……………八七四

[一]

湯淺一耶……………八七四
 湯淺眞生……………八七四
 故結城正明……………八七四
 結城素明……………八七五
 故結城蕃堂……………八七五
 湯川松堂……………八七六
 行山探茶庵……………八七七
 柚木久太……………八七七
 故楊洲周延……………八七七
 橫井時敬……………八七八
 橫井時冬……………八七八
 橫井弘三……………八八九
 橫關愛造……………八八九
 橫瀨夜雨……………八八九
 橫山健堂……………八九〇
 橫山屋樓……………八九一
 橫山大觀……………八九二
 與謝野晶子……………八九二
 與謝野寛……………八九四
 吉井 勇……………八九七

[三]

吉植庄亮……………八八八
 吉江孤雁……………八八八
 吉川英次……………八八九
 吉田金重……………八八九
 吉田弦二郎……………八九〇
 吉田白嶺……………八九〇
 故吉田晚稼……………八九一
 吉田 博……………八九一
 故吉嗣拜山……………八九一
 吉野臥城……………八九二
 吉野左衛門……………八九三
 吉原雅風……………八九三
 吉屋信子……………八九四
 故依田學海……………八九四
 故四屋恒之……………八九五
 米川正夫……………八九六
 米澤順子……………八九六
 米原雲海……………八九七
 萬 鐵五郎……………八九八

[レ]

冷泉爲系……………八九八
 冷泉爲紀……………八九八

[口]

故老鼠堂永機……………八九九

[7]

若月紫蘭……………九〇〇
 故若松曉子……………九〇一
 若山牧水……………九〇二

和氣律次郎……………九〇三
 和田英作……………九〇四
 和田英松……………九〇四
 故和田垣謙三……………九〇五
 和田三造……………九〇五
 和田山蘭……………九〇六
 和田重太郎……………九〇七
 渡邊霞亭……………九〇七
 渡邊 清……………九〇八
 故渡邊金秋……………九〇八
 渡邊公觀……………九〇八
 渡邊湖畔……………九〇九

故渡邊沙鷗……………九〇九
 渡邊小華……………九一〇
 渡邊省亭……………九一〇
 渡邊審也……………九一〇
 渡邊水巴……………九一一
 渡邊桑月……………九一一
 渡邊長男……………九一一
 渡邊未灰……………九一二
 故渡邊與平……………九一二
 故渡 忠秋……………九一二
 渡 平民……………九一三
 和辻哲郎……………九一三

補遺

宗星 石	九二五
那珂梧樓	九二六
西村五雲	九二五
堂本印象	九二六
吉田三郎	九二六

明治 大正 文學美術人名辭書索引 (終)

明治 大正 文學美術人名辭書

アの部

故饗庭篁村 アエバコウソン(小)

安政二年八月東京下谷に生れ所謂當時の寺小屋教育を受けた。劇や淨瑠璃等の外徳川時代の文學に精通してゐる。竹の屋主人の號もあるが篁村の名を以て廣く知られてゐる。「篁村叢書」「巢林子撰註」「馬琴日記抄」「雀おどり」「むら竹」「堀り出し物」「狼狽」「勝鬨」等の著がある。東京朝日新聞記者。明治二十二年發行の「當世商人氣質」は其の題名を見ても逍遙博士の「書生氣質」の影響を示

松本龍之助著

したものであるが、書生氣質が新傾向の前驅であると同時にこれは舊文學の殿將であつて、元祿以來流行の町人ものを其のまゝ明治時代にあてはめたもので、文章は「小説神髓」の理想的具體ではない。しかし輕妙洒脫は大に稱すべきものがある。氏はあくまでも舊思想に甘んじ、元祿文學を巧妙に模倣し、輕妙なる諷刺諧謔の筆を用ひ、時世以外に超然とし、洒落、悠々たる態度、劇史に通じ俳優を眞に知悉せる劇評家の泰斗として一權威であつたが大正十二年遂に病氣の爲に歿した。

青木月斗 アオキゲット(俳)

名は新護、明治十二年十一月二十日大阪市東區道修町に生れ、正岡子規、安居不空、大谷句佛上人、河東碧梧桐諸氏と出入して其の指導又は影響を受け俳句に興味を感じるやうになつた。氏の句は「日本新聞」「ホト、ギス」「車百合」「俳星」「カラタチ」等の外諸雜誌新聞に投稿され、「新春夏秋冬」「明治句集」等に蒐録されてゐる。氏は前に月鬼と號し、その家は關西賣藥界に其の名ある「天眼水」及び「快通丸」の本舗である。

銚過ぎて女の扇拾ひけり

笥紙のシんに切りけり古毛布

青竹の戸樋を通りぬ冬の雨

鳥歸る頃兄弟のはしか病む

天龍寺兵火のあとを飛ぶ燕

現住所 大阪市東區道修町一ノ四

青木健作

アオキケンサク (評)

明治十六年十一月二十七日山口縣都濃郡富田町に生れ、明治四十一年東京帝大文科哲學科のうち美

學を専攻して卒業した。中學教師の職を奉ずる傍「お絹」若き教師の悩み「外數篇の創作と數篇の文藝評論を書いた。今は法政大學教師。

現住所 東京小石川區大塚坂下町七九

故青木

繁 アオキシゲル (畫)

福岡縣久留米市の人。明治三十一年上京して小山正太郎氏の不同舎に入り、三十三年美術學校に轉じ、三十七年西洋畫の選科を卒業した。三十六七年の間に傑作「海の幸」を初め「海景」等を描いて識者を驚かした。晩年は極度の窮迫と神身の衰弱を來したが、四十年には「わだつみのいろこの」宮を描いて博覽會に出品し四十四年三月肺患の爲福岡病院に於て逝いた。年僅かに三十。明治の洋畫界に異色ある作家として知られた一人である。

青野季吉

アオノスエキチ (評)

明治二十三年二月新潟縣佐渡郡澤根町に生れ、大正四年早稲田大學の英文科を出た。讀賣新聞大正

日日新聞を経て今日に至つた。現に國際通信記者として傍評論壇に筆を執つてゐるが、「心靈滅亡」「知識人の現實批判」「社會批判とその階級的立場」「文藝批評家の準備」「コムレードの藝術」等は最近のものである。翻譯に「蒼ざめたる馬」がある。

現住所 東京府下代々木山谷四〇二

青柳琴僊

アオヤギケンセン (畫)

幼名金之助、名は燦、字は子章、居を玉兎村莊と稱す。慶應三年五月一日群馬縣利根郡桃野村に生れ、幼より畫に志し林青山に就いて初歩を學び、長じて兒玉果亭の門に入つて専ら南宗派を修め、最も山水を以て長所とする。明治三十一年日本美術協會に青綠山水の圖を出品して二等褒状を得たる外、各所の展覽會に出品して受賞せしこと數回又明治三十五年日本美術協會に出品せし山水の圖は宮内省御用品たる光榮を得た。帝國繪畫協會の會員である。

青柳有美

アオヤギユウビ (評)

現住所 長野縣下高井郡平穩村澁温泉別莊

明治六年九月秋田市に生れ、同志社普通學校文學政治經濟科を卒業して明治女學校秋田中學校等に教鞭を執つたが、随分過激の言行があつたとかで職を辭するやうになつた。その後明治植民會社の社員扶桑新聞記者となつたこともある。「實業世界」に携はつて傍男女問題を主として書いてゐる。「戀愛文學」「有美臭」「女の話」「美と女」「最近結婚學」「性慾哲學」「男女和合の秘訣」等の外多くの著書がある。單に著書の標題を見る人又は如何はしい一方面的著書のみを讀む人は氏の人となりに疑を持つが親しく氏に接し又氏の家庭を熟知する人は豫想に正反する人格に驚くさうである。

奏樂堂地靜かなり雲の峯

夏芝居汗を流して流させる

七夕も望遠鏡で空に歸し

一夜落花雨、滿城流水香、古今無二一路、達者

共同途。

現住所 東京市外下落合林泉園

赤木格堂

アカギカクドウ(俳)

本名は龜一、明治十二年七月二十七日岡山縣兒島郡小串村に生れ、小學校卒業以來私學校に學んで遂に巴里に留學した。日露戰爭中補充兵として従軍し、後に衆議院議員に當選した。俳句は明治二十九年頃より作り始め、上京後専ら正岡子規に親炙してその薰陶を受け、子規居士の死後俳壇を退いたが作句は今も尙ほ繼續してゐる。氏は嘗て「日本」「青年日本」ホト、ギス「澁柿」等に投句したが、子規生前に編した「春夏秋冬」にも選ばれてゐる。

口切や窓明かに炭はねる

麥時の人皆往んで夕日かな

寒垢離の投げて去にたる釣瓶かな

竹植ゑて心閑なり月を待つ

潮あびて松原ありく浴衣かな

いふ逸話もある位で誰に向つても忌憚が無い。和歌についても作家ではないが思ひきつた批評を試みてゐる。

現住所 大阪東區南農人橋二ノ二池崎商店内

赤松麟作

アカマツリンサク(畫)

明治十一年十月岡山縣津山町に生れ、東京美術學校に入つて、三十二年西洋畫選科を卒業し、三十六年、第五回内國勸業博覽會に出品して褒状を得た。後、大阪朝日新聞に入社して大阪北梅田に移つた。文展へは第二回に「迷兒」第三回に「夕食」第五回に「午後三時」第七回に「おきな」第八回に「添乳」第九回に「萩」を出し幾度も褒状を得た。光風會會員であつて同會への出品も少くない。

現住所 大阪市北區北梅田町四二二

秋田雨雀

アキタウジヤク(劇)

明治十六年二月二日青森縣南津輕郡黒石町字前町に生れた。明治三十九年早大英文科卒業。夙に劇

四

蚊帳の外の月明らかに障子かな

夏川を越えて下駄はくうれしさよ

現住所 岡山縣兒島郡小串村

赤木桁平

アカギコウヘイ(評)

明治二十四年二月九日岡山縣阿哲郡萬歲村矢戸に生れた。本名は池崎忠孝岡山の第六高等學校を経て東大の獨法科を出た。大正五六年の頃新進の文藝評論家として一方に雄視し理想主義の旗幟を掲げて文壇を睥睨した。其直截明快の筆は力強く長を揚げ短を貶すに適して一讀痛快を覺ゆる。大正五年公にした遊蕩文學撲滅論は氏の所論を窺ふによい。著書に「文藝上の理想主義」「夏目漱石」「近代心の諸象」「鈴木三重吉論」「太子所行讚」等がある。一時萬朝報に入つたが今は退いて時々論評などを公にしてゐる。漱石の門人として例の木曜會に出席してゐる頃の話に氏が漱石に向つて先生は近頃タガが緩んでゐるとやつたら先生は己は初めからタガなどは無いのだと言つてやり返された

に筆を染めてメエテルリンク式の氣分劇の作が多く又小説をも作つた。夙に「幻影と夜曲」「埋れた春」を公にし次で劇曲「三つの魂」「佛陀と幼兒の死」「國境の夜」童話集「太陽と花園」等を出したがこの外翻譯數篇ある。嘗て藝術座の脚本部に在つて島村抱月氏を助けて居たことがある。劇團に關係して舞臺監督となつた事もあるが氏の才は寧ろ瞑想的な神秘的な傾向を有つた詩人的思想家乃至作家として珍重さるべきである。

大正七年十一月末旬川村花菱氏と共に藝術座常務幹事に擧げられた。氏は一面社會改良運動にも従事して小川未明、加藤一夫、藤森成吉等と親交がある。故有島武郎とも親交があつた。近時幼年少年の讀物にも筆を染めてゐるし、エスペラント學會の評議員として其の方面にも活動してゐる。

現住所 東京府下高田町雜司ヶ谷二二

故秋月天放

アキヅキテンボウ(漢詩)

舊豊後日田藩儒秋月橋門翁の男、天保十二年に生

五

れた。名は新、字は士新、通稱は新太郎、天放、七硯堂、瑞華、無何有、必山人等の號がある。幼より廣瀬淡窓翁の門に遊び長じて詩書漢文學を善くし文學の材幹がある。始め陸軍に出仕して佐官に進み、後文部省參事官、女子高等師範學校長等に歴任し、累進して従五位勳三等に叙せられ、明治三十二年貴族院議員に勅選せられた。著書に「天放存稿」がある。大正八年病死した。

墨堤賞花

櫻花滿地白央々。十里沙隄步夕陽。

恨殺驚鴻不留影。吟衣空帶舊時香。

北悲詞

賊胡爲者果何讐、飛信報兇予欲愁、

寒日失光窮髮北、滄浪有恨小淘汰、

指揮雖定隣邦策、兪佛誰分聖主憂、

血食祇應長不絕。英靈萬古護皇洲。

梅

肯學鉛華宮樣粧、槎枒鐵幹傲氷霜、

寒烟搖曳花如夢、微月黄昏影亦香、

君復有妻無奈冷、廣平爲賦不妨剛、
牡丹妖豔芙蓉媚、品位定評俱雁行。

秋庭俊彦

アキバトシヒコ(小)

明治十八年四月東京府花原郡北品川に生れた。氏幼年の頃僧侶にならうとして品川の東海寺に在つたが後還俗して早稻田大學に學び遂に明治四十三年英文科を卒業した。小説「小さき争闘」「海の鳥」「下層室」「窓帷」チエホフ全集中の「隣人」「祝宴」「三年間」その他二十數篇の翻譯があり、又他に童話にも筆をつけて數多の作品を公にしてゐる。最近の作としては小説「或る高利貸の失敗」「鹿島夫婦」「或る馭者の話」「迷へる者」「彼と彼女」感想文に「作品と人の問題」等を發表してゐる。「露西亞評論」編輯主事の外、精華書院編輯部を擔當をしたことがある。

現住所 東京府下駒澤村上馬引澤二三〇

秋山碧城

アキヤマヘキジヨウ(書)

た。これ本邦書道の速成法及通信教授の嚆矢である。其著に「楷書結體九十二法」及び習字速成獨修用書等がある。

現住所 東京市京橋區西紺屋町二一

芥川龍之介

アクタガワリウノスケ(小)

明治二十四年東京に生れ、東大文科大學の英文科を卒業した。新思潮同人であつて、處女作「鼻」をはじめとして「手巾」「芋粥」等の短篇いづれも世の好評を博し一躍新進作家中の異彩となつた。材を歴史にとり一種の哲學を背景として興味深い事件を叙するといふやうな作風であり、その上非常に技巧に優れ機智に長けてゐる。或人は氏を「新理智派」と呼び或者は氏を鷗外漱石の倂ある作家であると評してゐる。「羅生門」「煙草と惡魔」の外數多の作を發表してゐる。大正八年四月海軍機關學校教官を辭して大阪毎日新聞に入つた。漱石の門人中でも異彩を放つてゐる。氏が非常に多讀家で記憶がよく支那の小説にも精通し支那趣味の豊かな

氏は東京の書家であつて故秋山義隆の次男である。慶應元年二月二十一日舊田安藩邸に生れた。名は純、字は儉爲、通稱は隆通、碧城は其號である。別に雪堂、龍々齋雲烟の號がある。氏は性質書道を好み、幼時より卷鷗州及菱潭の門に入つて書法を研究し、師の歿後筆跡を嗣ぐの約あつたが辭して明治十八年書法及語學研究のため清國に遊學した。かの地の有名なる書家彼三庚に就いて漢魏篆隸の六朝書體を學び、又蒲作英及び趙之謙に從ひ其他の書體を研究した。三年研鑽の後業を卒へて免許證を得た。本邦人中支那に遊ぶものは多いが、書家の門に入つて實地に研究したものは氏の外にあまり無い。尙滯支七年内地を遊歴し、古碑を探り、或は舊家を訪ひ、古法帖を見て大に斯道に益した。歸朝當時我が國書道の衰頹其極に達したのを憂ひ、彼地に行はれる習字法と自己の意見に係るものとを折衷して一つの速成獨修法を工夫し、之をもつて弘書學院といふ書塾を設け、擴く全國に會員を募集して通信教授をなし數千の會員を得

ことは氏の書いてゐるものによつて感ぜられる外著書の装釘によつてもこれを窺知することが出来る。最近公にした「傀儡師」には十一篇の小説を収めたるが之を取扱ふ手法に於ても之を描寫する所の文體に於ても各篇各様一として同じいものは無い。作者の多能多才殆ど端倪することが出来ない。而も格調の端正高雅なる之を教科書に收めても差支ない。但し材は「奉教人の死」より「地獄變」に至る十一篇悉く奇事異聞であつて鬼が出るか佛が出るか「傀儡師」の名は名實相かなふものである。尙氏は菊池寛氏と編輯を分擔して春陽堂の新叢書「泰西名作選集」を大正八年六月から逐次發行してゐる。尙氏は創作の外俳句をよくすること久米正雄氏と同じであるが、漱石の影響かも知れぬ。

現住所 東京市外田端三五

故浅井 忠

アサイチュウ(畫)

幼名は忠之丞といひ、安政三年六月江戸京橋木挽町に生れ、明治八年英京ロンドンよりの新歸朝者

千獲、都鳥英喜、久保井翠等がある。

朝倉文夫

アサクラフミオ(彫)

明治十六年三月豊後國豊岡村字下木に生れ、中學校を中途退學して上京し、彫刻家たる長兄渡邊長男の家に寓し、東京美術學校彫刻選科に入り、傍ら太平洋畫會研究所に通ひ、四十年美術學校を卒業した。文展へは第二回に「闇」第三回に「山から來た男」第四回に「墓守」第五回に「土人の顔」第六回に「若き日の影」等を出して三等若しくは二等の賞を得、第七回、第八回に「含羞」「いづみ」等を出品するに及んで各二等賞首席となり、第十回より彫刻部審査員に擧げられた。第十回の出品は「加藤先生の像」第十一回は「時の流れ」である。明治四十四年中南洋に遊んだ。銅像の作品には「島津齋彬公銅像」「大隈侯壽像」「北島治房男壽像」「島津久光公」「島津忠義公」等がある。門下に木内克、相川善一郎がある。加藤首相が十二年八月二十五日薨去になつた時氏はそのデッドマスクを取つた、

國澤新九郎の彰技堂に洋畫を學び、翌年工部省美術學校に入り、伊國人フオンタネージに就いて益々深く研究した。後故あつて半途退學し、同志と神田今川小路に洋畫研究所を開き、又同門の山本芳翠等と明治美術會を起して不忍池畔に洋畫展覽會を開き、二十七年日清役に従軍し、三十一年東京美術學校教授となり、三十二年佛國に留學して三十四年歸朝し、京都高等工藝學校の首席教授となり、又關西美術院を開いた。四十年文展西洋畫部審査委員となつたが其年十二月十五日京都大學病院に於て病歿した。年五十二。現今洋畫界の盛運を來したのは國澤新九郎氏によつて先づ開拓され、更に氏及小山正太郎氏によつて培はれたもので氏に負ふ處が極めて多い。其作品は何れも逸品として重んぜられるが、京都に開催の内國勸業博覽會に出品した「戰爭畫」、及東宮御所の壁畫「古武士駿馬圖」及輕井澤ホテル「軍人乗馬の圖」等は廣く世に知られてゐる。門下に寺松國太郎、安井會太郎、澤邊清五郎、津田青楓、渡邊審也、小川

また同年十一月沼南島田三郎氏死去の時も同様デットマスクをとつた。氏は頭腦明晰議論精到腕も亦之に伴つて斯界第一人者として名聲をあげてゐる。同年大震災後開催の日本美術展覽會の審査員となり、十三年帝國美術院會員に擧げられた。氏は紅浪と號して俳句にも巧である。

水に浮くマユラの家や朧月

現住所 東京市下谷町谷中天王寺町三〇

浅田江村

アサダコウソン(評)

本名は彦一、曾て空花と號した。明治八年十一月長門國阿武郡萩町字江向村に生れ、神戸關西學院に於て五六年間自由な教育を受けた後記者生活をなし、地方及東京に於て二三の新聞社には入つた後博文館編輯部に入つて雑誌「太陽」の主幹となり時事問題に關する評論を出して思潮の先覺を以て自ら任じた。著作に「議會史」「交通發達史」其の他ある。爲藤五郎氏が太陽の編輯主任となつて以來氏の論説は見られなくなり、再び太陽主筆となつた

が大正十二年十一月同誌改革の結果大橋氏自ら陣頭に立つやうになり氏は辭して渡歐した。
現住所 東京牛込區矢來町一〇いノ一七

淺原六朗

アサハラロクロウ(小)

號は鏡村、明治二十八年二月二十二日長野縣北安曇郡池田町に生れた。東京牛込の私立東京學院を出て大正八年早稻田大學の英文科を卒業した。小説「馬籠」ある街の人々「子供は病んでゐる」の外少年少女小説集「美しき幸福」等の作がある。號は鏡村といふがこれは少年ものに多く用ゐてゐる。「少女の友」の編輯に従つてゐる。

現住所 東京府下東中野字小瀧一五二八。

蘆田正喜

アシダセイキ

(著)

明治三十年七月二十日京都府天田郡下豐富村荒河に生れ、京都第三中學校卒業後東京高等師範學校文科に入り更に同校専攻科を出た。嘗て「おはなし」と云ふ雑誌を主宰してゐたが、今は之をよし

息を詳にしない。

前住所 東京市日本橋區大傳馬町二ノ二

安宅安五郎

アタカヤスゴロウ(畫)

明治十六年四月新潟市に生れ、洋畫科を志望して上京し、東京美術學校西洋畫科に入り、同四十三年其の選科を優等の成績をもつて卒業した。文部省美術展覽會に於ては、第四回に「花壇」「靴屋」第五回に「日蔭棚」第六回に「花園」第七回に「縁の蔭」第九回に「肖像」第十回に「七媛」を出して褒賞を得て好評を博し、大正十二年大震災後の日本美術展覽會に「鮎」「乳を呑みて眠る子」「靜物」の三點を出して何れも入選の光榮を荷ひ、其の三點中の「靜物」は佛國より買つて來た波斯陶器とモデル人形とを基として描いたものであつたが、審査員藤島武二氏の推薦によつて入選し、銀牌並に賞金五百圓を贈與された。氏は高間惣七氏等と共に帝展の中堅作者として聲名を走せてゐる。
現住所 東京府下上戸塚稻荷前八九六〇

て「倫理教育研究」編輯主任をし、傍ら「明日の教育」「令女界」「倫理教育研究」等に執筆してゐる。

同人でやつてゐるものには「曉星會」「新生會」等があるが之も氏の主宰する處である。著書には「若溪閑話」「生蕃童話鬼のおひげ」「會我物語」「おしろい川」(馬場孤蝶氏と共著)「黄金の鍵」「世界奇聞叢書」童話集「魂のゆくへ」「人買船」「鐘つくり」其他では「最新國語副讀本」「新撰文化讀本」等であつて近く「教育的藝術學」「世界文學論」「國語教授の學理的根據」「暗黒時代」(日本中世文學史)等が刊行される筈である。

現住所 東京市小石川區大塚窪町一

蘆野楠山

アシノナンザン(畫)

氏は東京の鐵筆家。嘉永四年八月甲州甲府に生れた。最も和漢兩體の篆隸を能くし其妙技を得てゐる。従つて貴紳書畫家の依頼頗る多い。又印刷業を兼ねて日本美術協會々員となつた。近來その消

足立源一郎

アダチゲンイチロウ(畫)

明治二十二年七月大阪市船場に生れ、京都美術工藝學校、關西學院、太平洋畫會研究所等に學び、大正三年二月佛國に渡り巴里に滞留して洋畫を學び、後イギリス、イタリヤ諸國を歴遊して大正七年に歸朝した。

院展第六回に「青き眼の女」等二十點を出品し同人に推された。大正十二年農商務省の囑托によつて農民藝術研究のために渡歐した。

現住所 奈良市高畑、北大道

足立輝子

アダチテルコ(歌)

女史は十數年來金子薫園氏に師事して眞摯稀に見る人、數千首の舊作を棄て、作者の心境に新しき黎明來りし大正五年以後の作を集めて歌集「林影」を出した。金子薫園氏の推賞せる女流歌人であつて薫園氏は歌集「林影」について「平野の中に一本の龍膽の花を見出すとき情趣がある」と評して

なる。成るほど短歌研究會發行の歌集林影を繙いて見ると平野を渡る風收まりて静まり返れる一草一木に黎明の氣分流るゝ如き靜謐さが一卷を貫いて居り、温情優婉の情作者の玉の様な人格を偲ばしめるものがある。

現住所 南滿洲鞍山上臺町一

安達 半僊 アダチハンセン(畫)

名は盛保、字は如痴、通稱は仁平、居を花月庵、和君亭、吳竹園と稱し、明治三年二月二十七日大分縣北海部郡臼杵町に生れ、長じて兒玉蘆香、及び小栗布岳兩氏に就いて南宗派を修め、就中山水花鳥を能くし、帝國繪畫協會、日本南宗畫會等の會員で又九州書畫鑑定會の會長である。現今別府町に住し傍ら俳句を好み、豊後松岡の安東石友、同乙津の佐藤碩山等に學んで造詣深い。花竹幽牕小誌を著して世に公にした、亦盆栽を愛する事を無上の樂とし目今大分縣下に珍盆栽の流行を見るのは大に氏の力に據るのである。

現住所 大分縣別府町

阿出川 眞水 アデガワシンスイ(畫)

名は庄藏、字は子平、別に掬碧樓の號がある。明治十年十二月東京市日本橋區南茅場町に生れ、柴田是眞、久保田桃水、野村文學に師事して四條派を修め山水花鳥皆能くし、魚類に至つては其技眞に迫る。明治三十七年四月日本美術協會に鯉魚の圖を出品して銅賞を、同四十四年日英博覽會に鯉魚を出して銀牌を受けた外諸會に出品して受賞したる事十數回、第七回文展に出品したる鯉魚の圖は入選の榮を得其他宮内省御買上となつた事前後五回ある。帝國繪畫協會、日本美術協會、日本畫會選畫會の會員である。

震災前住所 東京市京橋區南八丁堀

跡見 花蹊 アトミカケイ(書)

天保十一年四月九日攝津西成郡木津村に生れた。其先祖は跡見赤鑄より出で、世々郷士であつた。

父は重敬と言つて女史はその次女である。名は瀧野、花溪はその號である。木花及び西成の別號がある。幼より文學を好み父に従つてその懇切なる指導をうけて己に大に進境が見えた。十二歳の時石垣東山及楨野楚山の門に入つて畫を學び、漢籍を後藤松陰について修めた。後京都に出で、富原節庵に詩文漢籍書法を學び、繪畫を圓山應舉の後なる圓山應立の門に學び、のち明治三年東京に出でた。同五年朝廷より召されて陛下の御前に書畫揮毫の光榮を得、「春の來て谷の鶯けふよりは雲井にちかく名のりそめけり」の詠歌によつて天皇の忝なさと身の光榮とを感謝し且つ歡喜した。後屢々召されて同様の光榮に浴した。八年神田仲猿樂町に女學校を建設したが皇族華族の貴女が續々入塾した。閑院宮家では特にこの學校を信用して華族女學校、學習院女學部へ入學させられないでこゝに學ばしめられた。貴族の入塾入學は珍らしいものであつた。二十年今の小石川柳町に移つてよりは校運益隆々として發展し、都下有數の高等

女學校となつた。女史は氏の口づから言はれたものを門人藤井瑞枝によつて筆記させられたものによつて見るに、女史は幼より自己の容貌の美ならざるの故を以て一生獨身生活をしようと決心し、思を藝術によせるやうになつたとある。世間には往々かゝる決心をするものがある。しかし八十の老齡に達するまで其の素志を翻さず初一念を守つた。獨身生活をするこの是非は別問題として、兎に角初一念を老齡に至るまで變更せぬといふことは現代輕薄な人々のまさに受けるべき一大教訓である。一婦人にしに一大教育と書畫の大家となり得た女史は、現代の人々に教へるところのものが少く無い。閑院宮智恵子女王殿下はよく女史の書を學ばれたので、その筆法は殆んど女史のものを見るやうである。兎に角女史の筆蹟は一目瞭然に類なき風體を備へてゐる。學校は元學習院教授や豊島師範學校長等の經歷があり、人格高く趣味廣い大東重善氏が其の教務を司つてゐる。四十五年七月其功を賞せられ勳六等に叙し寶冠章を授け

られた。人これを異数なこととして大祝賀會を開いた。

現住所 東京市小石川區柳町二七

跡見玉枝

アトミギヨクシ(畫)

東京の畫家、舊紀州新宮藩士跡見勝三の女、安政六年四月二十八日江戸市ヶ谷に生れた。名は勝、玉枝はその號である。別に不言庵の號がある。幼より畫を好み萬延元年京都に赴き、長谷川玉峯に就き四條派の畫を學び、傍ら宮崎玉緒に櫻花種類を研究し、後頼山陽門下の宮原易安を師とし、讀書習字を修めた。明治十一年望月玉泉について望仙の畫を修め京都府女學校寫生畫教員となり、十三年京都府畫學校出仕を兼勤し、十九年八月東京に歸り、共立女子職業學校の創立に與り、其の圖畫科教員となつた。二十二年皇后陛下日本美術協會美術展覽會へ行啓の際御前に於て席畫を仰付けられた。二十三年宮城縣知事松平氏の依囑をうけて「小學毛筆畫」全部八冊を編成し、二十四年二十

六年等引續き皇后陛下の御前揮毫の光榮を有した二十七年皇女富美宮殿下麻布御用邸御造營に際して御襖揮毫を仰付けられた。十年以來内外各種の博覽會、展覽會、繪畫共進會等に出品して屢々受賞した。現に日本美術協會々員であつて門下に松波玉嶺、西川玉華、秋田玉花、清水玉桂、加藤玉瑛等がある。

現住所 東京市神田區今川小路三の六

跡見 泰

アトミタイ(畫)

明治十七年五月東京市神田區猿樂町に生れ、洋畫家黒田清輝に學び、後東京美術學校に入つて西洋畫選科を卒業し、四十五年中澤弘光、山本森之助、三宅克己等と光風會を起した。文展へは第一回に「夕岬」第二回に「晚煙」第三回に「低石切」を出して忽ち何れも三等賞を得、次いで第四回に「霧のたまま」第六回に「野跡ゆく人」第七回に「あみほし場」夏の午後」第八回に「瓜畑」村へ行く路」半島の漁村」第九回に「真似まなび」等を出品した。此

の外光風會等にも出品が多い。舊白馬會會員である。

現住所 埼玉縣浦和町鹿島臺一九一九

姉崎嘲風

アネザキチヨウフウ(評)

名は正治、明治六年京都に生れ、二十九年東大哲學科を卒業した。高山樗牛と莫逆の交りがあつて樗牛の歿後其遺稿の出版にも多大の力を盡した。歐洲に遊んで宗教哲學を研究し歸來「復活の曙光」を著して名聲を馳せた。宗教哲學者として蘊蓄頗る深く、斯界の權威として尊重せられてゐる。先年渡米して彼の地の大學で日本の國情並文學を講演した。「花つみ日記」「停雲集」等の旅行配及美文集及び「切支丹宗門の迫害と潜伏」

聯合國の學者に對し名譽學位を贈る事となつたが我國に於ては東京帝國大學文學部教授文學博士なる氏に對して名譽博士の學位を贈つて來たのである。因に同大學はもと佛國に於て設立し、其後ストラスブルグ市が獨逸領となると共に獨逸の經營するところとなつたが、大戰の結果再び佛國に復歸せしもので同大學より名譽學位を受けたる邦人は姉崎博士を以て嚆矢とする。現に東京帝國大學文學部教授の外同大學圖書館長を兼ねてゐる。文學博士。

先帝陛下を痛み奉りて

神に通ふこゝろ誠の現つ神天つ宮居にかへりましけり

現住所 東京小石川區白山御殿町二一七

故安部 井 磐根

アベイバンコン(詩)

舊二本松藩士で天保三年三月同城下に生れた。弘化の初年父又之丞に従つて江戸に移り、嘉永年中奏者番に任ぜられた。明治二年以降若松縣調、役

補監察方、若松縣少屬、若松縣少參事、若松縣九等出仕、同縣典事等を歴任し、五年官を辭して七年家祿及士族の稱を奉還し、爾來田園生活をやつて陶淵明の人格を欽慕した。十一年福島縣會議員に選ばれ、次いで同會議長となつた。十二年一時安達郡長となつたが十五年に之を辭した。十九年更に縣會議員に當選して同議長及常置委員に舉げられた。二十三年帝國議會開設に際して其の第二區より推されて衆議院議員となり、第五議會の時副議長に擧げられた。一度議會の解散にあつて之を罷めたが、専ら國家問題に奔走し、第十一議會解散後又選舉されて國事に盡力した。氏は政治家として奮闘の餘暇詩文を研修して當時の諸大家と應酬した。又書に巧であつて人これを得れば大に珍重した。

阿部次郎

アベジロウ

(評)

明治十六年山形縣飽海郡上鄉村山寺に生れた。東大文科哲學科卒業。夏目漱石に師事して文學の研

究をなし、東京朝日新聞の文藝欄によつて評論を試みた。思想態度は安部能成氏と似て宗教的内觀的であつて世に鮮かな活動を示してゐる。その古聖賢のあとを趁ふたゆみなき精進とその明晰の頭腦とその篤學と、而してその精嚴一糸みだれず、論理のあくまで緻密にしてしかも情熱の中に空涌する高調の文章とに、論壇得易からざる人として世の推重するところである。著述に「阿部次郎論集」「三太郎の日記」「三太郎の日記第二」「倫理學の根本問題」翻譯にトルストイの「クローイツェル、ソナタ」「家庭の幸福」「光ある中に光の中を歩め」及びストリンドベルヒの「赤い部屋」等がある。丹近獨創の見を以て「美學」を著し又「北郊雜記」「人格主義」等の著を公にした。氏の倫理觀や審美觀については獨逸のリツプス氏の説を多大に取り入れてゐることは氏の著書によつて明にわかる。一九二二年渡歐したが大正十二年歸朝し東北大學法文學部に教授となつた。讀賣新聞の客員もと慶大講師、女子大學講師をした。

阿部天風

アベテンブウ(小)

豫備海軍少尉、名は信一、明治十五年九月山口縣阿武郡三見村に生れ、少時より頭腦の明晰を以て知られ、また文筆をよくしたが、遂に軍人を志して海軍兵學校に入り優等の成績で卒業した。爾來時々筆を執つて海を主題としたる多くの傳奇小説を書いてゐる。

現住所 東京牛込區山吹町

安倍能成

アベヨシシゲ

(評)

明治十六年十二月二十三日伊豫國松山市に生れた東大文科の哲學科出身。夏目漱石門人。宗教的内觀的な思想と華々しくはないが底力のある筆を揮つて眞摯な誠實な評論を試みてゐる。曾つて阿部次郎森田草平等と共に夏目漱石によつて主宰された「東京朝日新聞」の文藝欄に時評の筆を執つたことがある。著述「オイケン」の外オイケンの「大

思想家の人生觀」「メレジュコフスキーの「人及び藝術家としてのトルストイ」等の翻譯がある。嘗つて數年間湘南の地に卜居して思索の生活をなしてゐたこともある。どこかケーベル先生を思はせるやうな人である。文章素朴、卒直な書き方の中に一種の味を持つてゐる。「人生不可解」の言を残して華嚴の瀑に投じた藤村操は氏の莫逆の友で夫人は藤村操の愛妹である。日蓮宗大學法政大學、一高の講師。大正十三年朝鮮大學の教授となる内定で文部省海外研究員となる噂があつた。

現住所 東京小石川區小日向水道町九二一

天岡均一

アマオカキンイチ(彫)

明治八年十月兵庫縣三田町に生れ、後東京美術學校に入つて三十年彫刻科を卒業し、三十六年第五回内國勸業博覽會に三等賞を得、文展へは第三回に「彫刻師」第七回に「現身」第八回に「昔を語りつゝ」第九回に「信念」第十一回に「むつかしきふし」を出した。現在の東大寺大佛殿の鴟尾は氏の作で

ある。

現住所 大阪市南區天王寺眞法院町五六九五

新井 完

アライカン(畫)

明治十八年六月姫路市に生れ、畫家を志望して上京し、東京美術學校に入學して、四十三年同校西洋畫科を優等の成績をもつて卒業した。文部省美術展覽會へは第五回に「青ききもの」第八回に「泥の家」第九回に「厄日過ぎ」蝸壺第十回に「豚と豚の仔」第十一回に「猫と仙人掌」を出し、大正十二年の大震災後大阪朝日新聞主催にかゝる日本美術展覽會には「讀書」花の二點を出して何れも入選し、更に審査員金山平三氏の推薦によつて入賞の光榮を荷ひ、銀牌と賞金五百圓を贈與された。この二點は何れも大正十一年巴里で描いたもので「讀書」は素朴な田舎娘が小泉八雲の日本印象記を讀んでゐるところを一週間ばかりで仕上げたものである。氏は漫畫で有名な近藤浩一路、岡本一平氏等と同期生である。

を示してゐた。

現住所 東京市下谷區中根岸町一〇八

新井紀一

アライキイチ(畫)ト

明治二十三年二月二十二日群馬縣多野郡吉井町大字池に生れた。明治三十七年砲兵工廠に入つて見習職工となり労働生活の體驗をもつてゐる。大正七年二月春陽堂に入つて「中央文學」の編輯に従ひ大正八年再び労働生活に入り、大正九年時事新報社に這入つて今日に至つた。「友を賣る」「二人の文學青年」「惧れ」「煽動」「試験とコーヒー」「營倉」「失業者」「復讐」等の作がある。社會問題を取扱ふ作家として其のもつてゐる體驗は他の空想に近い理論作家と異つて將來何ものかを持來すであらうと期待されてゐる。

現住所 東京市外千住中組一〇〇三

新井 洸

アライコウ(歌)

氏は夙に歌道に興味を有して竹柏園の門下となり

現住所 奈良市法蓮町

荒井寛方

アライカンボウ(畫)

名は寛次郎、美術院同人の日本畫家、明治十一年八月栃木縣氏家町に生れて、繪畫に志して初め浮世繪の大家、水野年方に學び、三十二年安田靱彦、今村紫紅等と「紅兒會」を起し異畫會々員となり、「國華社」に入り、四十年東京勸業博覽會に名作を出品して褒狀を得、文展へは第一回に「菩提樹下」第二回に「出陣」第三回に「射戲」を出して三等賞を克ち得又第四回に「車争ひ」第六回に「竹林の聽法」第七回に「阿彌陀」を出して何れも好評を博した。下村觀山、横山大觀等の努力によつて日本美術院が再興した時其第一回に「暮れ行く秋」第二回に「乳糜供養」を出し、其の天才を認められて終にその同人に推された。後印度に渡りかの地の風物を研究して得るところすくなくなかつた。大正七年歸朝後も同院のために大に力を盡し、同じく十二年大震災後の院展に「涅槃」を出して西遊後の進展

心の花同人となつて一時は盛に作歌して同誌に掲載してあつたが、近時健康を害してゐるために、その作歌も發表すること甚だ稀になつたのは惜しい。心の花叢書第八編として出した歌集「微明」は大正五年十月刊行したもので、非常になつかしいまた靜かな氣分の漲つてゐるよい歌集である。うつゝなく流れたゞよふ夕明り佛足石を見せたまひけり

月讀のあかり露けき中空に鷓尾の蔓のまさやかに見ゆ
しづかなる南圓堂の初更の灯たもとにまきて持ちかへらなむ
紅のたすき紅のまへだれ寒國のいろ白き子に似つけるあはれさ
もの思ふおうなのやうにさめぐとひさめに濡るゝ古き郵船

現住所 東京市牛込區市谷田町一ノ一

新井洞巖

アライドウガン(畫)

名は信。字は子本、通稱を信吉と言ひ、洞巖の外白雲の別號がある。慶應二年四月十日群馬縣吾妻郡原町に生れ幼時漢學を貫名海雲に學び、南宗畫を永井雲坪に學んだ。明治十八年上京して菅原白龍の門に入り、二十四年遊歴の途に就き全國を周遊し、更に朝鮮、臺灣、支那に渡り、三十一年白龍の病歿によつて高森碎巖の指導を受けた。作品は明治二十三年の博覽會に「雪景」を出してより長く公表しなかつたが、大正六年南畫會に「松壑雲泉」を出し同七年「雪江勝賞」同八年「高士觀瀑」同九年「山居深趣」山中不知曆日を出した。著書に「南畫の描き方」があり、青年洋畫家等の就いて學ぶものが多く南畫會協賛員である。氏の父の名は廣吉、秋水と號して木村卓堂の門下であり、氏は實に其の二男であつた。

現住所 東京市小石川區原町一六
荒江 啓 アラエケイ 小
本名は啓次郎、明治二十一年三月五日群馬縣山田

郡休泊村大字沖之郷に生れ、群馬縣立太田中學を卒業の上早稻田大學に入り、大正五年七月同英文科を卒業し、同六年六月より東京日々新聞に入社し、目下引續き在勤してゐる。氏は恒星同人として雜誌「恒星」を主宰する外「令女界」「心の花」「中央文學」等に發表してゐるが、創作十數篇、評論數篇、少女小説十數篇その他詩歌等がある。
現住所 東京市外西巢鴨町宮仲二五〇三

故荒木寬畝

アラキカンボ(畫)

本姓は田中、天保二年六月江戸芝赤羽に生れた。八歳の時より谷文晁派の荒木寬快に就いて學び、擢んでられて其後を嗣いだ。又當時の大家岡本秋聲について花鳥を學び、次いで諸大家の畫法を學びて支那南北派を折衷し、安政三年二十三歳で土佐藩の繪所となり、維新後獨立して畫塾を開いた。明治五年、塙國大博覽會に「菊花の圖」を出したのを初めとして、内外の展覽會に出品して受賞すること數十回、三十四年、帝室技藝員となり、又長

回ある。日本美術協會 讀畫會の會員である。
現住所 東京市本郷區彌生町三

荒木十畝

アラキジツボ(畫)

く東京美術學校教授となり、文展第一回より第七回迄日本畫部審査員となつた。一時洋畫に志して五姓田芳松、高橋由一と洋畫三名家と數へられ、英照皇太后御尊影を謹寫したことがある。畫は花鳥を最も得意とし大作を残してゐる。大正四年八十五の高齡を以て病歿した。養嗣子に十畝があり門下に池上秋畝、倉石松畝、五島耕畝、木村廣畝、廣瀬東畝等の名家が多く出た。

荒木月畝

アラキゲツボ(畫)

名は光子、明治五年二月栃木縣足利町に生れ、古川竹雲に學び、更に東京に出でて荒木寬畝の門に入つて南北合派を研究し、最も花鳥を能くし、明治三十四年日本女子美術協會に「芙蓉鳴の圖」を出品して銅牌を受け、同年日本美術協會育英會に水邊草花の圖を出品して一等褒状を受け、同四十年日本美術協會に茄子の圖を出品して二等褒状を受け、同四十一年東海繪畫協會に菊花の圖を出して一等褒状を受けた。宮内省御用品となつたこと一

名悌二郎。明治五年九月長崎縣大村に生れ、明治二十四年上京して南北合派の大家、荒木寬畝に學び殊に花鳥をよくして同社中その右に出るものがなかつた。後その養子となり、三十七年米國聖路易萬國博覽會、三十八年日本美術協會に於て各銀賞、四十三年日英博覽會で金牌を受け、日本畫會、及び國華俱樂部の幹事となり、讀畫會顧問となり、三十七年東京女子師範學校の教師となり、四十年高島北海、望月金鳳、佐久間鐵園、山岡米華、小室翠雲、田中頼嶂、益頭峻南等と文展對抗の正派同志會を起した。文展では第二回第三回、及び第九回以來日本畫部審査員となり、作品は第二回に「溪流」第三回に「雨後」夏景山水「第四回に「歲寒三友」第六回に「園の秋」葡萄「第七回に「蘇鐵」棕櫚」第八回に「雨後」第九回に「四季花鳥」第十回に

「清妍」第十一回に「四季花鳥」を出した。後文展に改革行はれて帝展と改稱された時選ばれて其審査員となつた。また大正十二年大震災後開催の日本美術展覧會審査員となり。大正十三年會員に擧げられた。

現住所 東京市本郷區彌生町三

荒波煙崖

アラナミエンガイ(詩)

名は坦、駿河の人、雅文會員にして其編輯の實際に當つて居り、其の作詩文は「大正詩文」「日本及日本人」等に發表してゐる。

聽潮

八月寒濤湧復崩、

響如鯨吼勢憑凌、

誰描活水今蒲叟、

咫尺高堂現廣陵。

神龍捧水厲潮音、

橫送銀山逼祇林、

不是成連當日曲、

瑟瑟打出古禪心。

和置鹽菜園君卜居

青山那處叱吟驢、

去訪堰東亭長廬、

仙骨峻嶒將鶴瘦、

道心間濤與雲居、

提撕鄉學童時記、談笑神都客夢餘、
邂逅樽前羨清福、琳琅萬卷擁奇書。

送田碧堂赴燕都

男兒不可老蒿萊、

萬里此行何壯哉、

秦漢英雄多寂寞、

幽燕城闕尙崔嵬、

已將冰雪潔吟骨、

須挽江山健賦才、

海島如過田氏墓、

蘋蘩先薦義人來。

氏の詩は勺水の評の如く曠懷逸思にして風雲を吞吐するの概があつて、他の輕佻にして技巧を弄ぶ者とは眞に別である。

有島生馬

アリシマイクマ(畫)

明治十五年十一月横濱に生れて、東京外國語學校卒業後羅馬、巴里の兩美術學校に洋畫を學んだ。二科會同人中の重鎮として畫界に名聲を博すると共に一方文壇に於ても作家として「鏡中影」「死ぬほど」「嘘の果」「美術の秋」「回想のセザンヌ」等の作も相當の愛讀者を有してゐる。文章纖細にして豊潤、紙幅の間に柔かにして暖かな地中海岸の

明るい空氣を漂はして、芳醇掬すべき藝術味を有してゐる。「白樺」の同人ではあるが武者小路氏一派とは著しく色彩を異にし、より藝術的であり客觀的である。學者として思想家として又藝術家として第一流の名聲を博した有島武郎氏は氏の實兄であり、新進作家中心心理描寫の雄たる里見淳氏は氏の令弟である。二科會々員。
現住所 東京市麴町區下六番町九

故有島武郎

アリシマタケロウ(小)

明治十一年三月四日東京小石川區水道町に生れ、學習院を経て明治三十四年札幌農學校卒業。在校中は學校の學課は怠り勝であつたが圖書館の文學書類は全部讀了したと言はれてゐる。在學中森本厚吉と共にリビングストン傳を共著した。その後三年間米國に遊學し歐洲の各地にも遊んで歸朝した。四十一年より母校で英文學の講師をしてゐたが大正四年退職して専ら創作に従つた。氏は夙に文筆に親しんで白樺派の搖籃時代既に同人中異彩

を放つ一人であつたのに不思議にも生馬、彈の二弟文名を擅にするに係らず氏は暫く埋れてゐた。併し一度文壇に乗り出すや世間では漱石の代償をこの人に得たやうに思ふほど斯壇の寵兒となつた氏の文はあるものは線が太くてぐんぐんと押し迫るものあるかと思ふと又どこかにセンチメンタルな氣分が流れてゐるやうなものもある。劇曲「死とその前後」は夫人の死を脚色したもので松井須磨子一座によつて帝劇に上演された。中央公論所載の乃木將軍をモデルにした「凱戰」の如きは短篇であるが博大な愛を持つてゐる將軍の心持、物質的肉體的の慾望しか持つてゐない馬車別當、器械的に驅使されてあてがひ扶持に一生を終る馬車馬などの描寫にその底の底には餘程暗示されるものが潜んでゐる。「實驗室」のごときも現代の個人主義や智的萬能乃至功利主義を諷刺してゐるやうに見える。氏の最も力を入れた長篇小説「宣言」は悲愴な戀の物語であつて殉情の氏をこゝに見ることが出来る。文體の全篇書信から成つてゐるのも注

意すべきである。この外前記「實驗室」「凱旋」及び「クラ、の出家」等の傑作を集めたカインの末裔や氏獨得の感想文を集めた「反逆者」肉の呻きと靈の喘ぎに悶ゆる男子と妖艶淫蕩なる一夫との情生活の記録「迷路」(以上新潮社發行)一畫家の藝術的苦心を描いた「生れ出づる悩み」「幻想」「小さきものへ」等六篇の小説と戯曲「老船長の幻覺」等を收めた「小さき者へ」氏の人生觀を語る長篇論文と言はれてゐる「惜しみなく愛は奪ふ」氏の感想藝術論評傳婦人問題日記等を收めた「小さな灯」若い生命がいかに生れいかに萎みいかに育ちいかに實るかを探らうとした様な「星座」子供の實感を子供に代つて書いたものと言はれてゐる童話「一房の葡萄」西詩を翻譯した「ホピットマン詩集」等の外澤山の著書がある。後個人雜誌「泉」を發行し又講演に依て氏の文藝並に社會觀人生觀戀愛觀等を主張し宣傳して居たが婦人公論女記者波多野あき子と戀愛に陥り大正十二年六月八日信州輕井澤の別墅淨月庵に於て縊死を遂げ七月八日これを發見される

に及んで大問題となつた。「泉」は八月終刊號に記念號として諸家の感想等を載せたが一般の新聞雜誌も競うてこの材料を載せる事に力めた。氏の狩太地面の處分邸宅の賣却母や子に對する態度等書くべきことは澤山あるが詳細の事はこゝに略する。尙ほ最後に一つ書き加へて置きたいことは、氏が新渡戸稻造博士や佐藤札幌農科大學長等に次いで日米交換教授として渡米し、「日本文藝の近代的傾向」について米國諸大學で講演する筈であつたのが實現されずじまつたことである。何となれば日本の創作家中にはかゝる講演にも立派な講師として堂々と壇上に立つことの出来る學識あり抱負あるものも居ることを知らしめれば、ひいては我が文壇の世界的尊貴の地位を克ち獲ることもなるからである。

最後の住所 東京麹町區下六番町

有友 蘭溪

アットモリケンケイ(畫)

名は一郎、字は富行、別號を臥雲閣又は愛竹と云

ふ。嘉永五年四月十六日岡山縣津山町に生る。幼時狩野如林宗信に就いて狩野派を脩め、後塘雲田に師事して南宗派を學び山水人物動物を能くし特に眞景山水に長ずる。明治三十五年以來日本千景會を起し到る所名山大川を跋涉し實景の探寫に勉め、第四第五の兩内國勸業博覽會に出品し共に受賞したる外各地の博覽會に賞を得ること七十餘回に及び宮内省、皇后職及び東宮職の御買上を受けること前後五回に及んだ。帝國繪畫協會、日本美術會、美術研精會の會員である。最近の消息は詳にわからぬ。

以前住所 東京本郷千駄木町二三八

有馬 素岳

アリマソガク(畫)

名は善太郎、字は君徳、自在將軍、春岳の別號がある。明治元年二月二日鹿兒島縣鹿兒島市新町十六番地に生れ、幼い時畫を好み長ずるに及んで高瀬梅堂、平山東岳、天野方壺、鈴木百年、後藤碩田の諸師に就いて南宗派を修め、山水を最も長所

とする。現に麻布區竹谷町二番地に住して畫道の外書道、漢詩篆刻等をやつてゐる。そして其の最も特筆すべきは左右兩手自在に揮毫し得ることで曾て韓人故金玉均より自在將軍の稱を贈られた。現住所 東京市麻布區竹谷町二番地

在原 古玩

アリワラコガン(畫)

名は重壽、一ツ橋藩士久藏の男。本姓は古屋、別に鳩杖翁、昔男軒と號す。文政十二年八月江戸小石川小日向水道端に生れ、荒井尙春に就いて土佐派を研究し、殊に人物を能くする。内國博覽會、繪畫共進會、日本美術協會等に出品して三等銅賞を受けること數回、日本畫會、日本美術協會に於て御用品となること數回、明治三十六年宮内省諸陵寮の命によつて御陵畫帖を揮毫した。日本美術協會の審査員で帝國繪畫協會、日本畫會の會員である。畫道の外に俳諧を嗜む。門下に伊藤古仙女史等がある。

震災前住所 東京市神田區今川小路一丁目一

粟津水棹 アワヅスイトウ (俳)

名は操、明治十三年五月二十五日山城京都東六條に生れ、小中學校を卒業したる外山本章夫翁について漢籍を研究し、また當代畫壇の巨擘四條派の大家竹内栖鳳氏に就いて繪畫を學んだ。そして父祖の業を繼いで明治三十三年句佛上人太谷光演師に近侍することになった。氏はこの上人に近侍することによつて多くその指導を受け且つまた河東碧梧桐、高濱虛子、松根東洋城、中川四明諸家の教示を受けたが、中でも四明翁は郷里の先輩といふ關係によつて特別に其の接近も多く影響も大きかつた。氏の句は「國民新聞」「京都日新新聞」「京都新聞」「ホト、ギス」「アラシ」「俳星」「懸葵」等に投句したが「新春夏秋冬」「明治一萬句」の諸書に蒐録されてゐる。餘技としては繪畫の外謡曲を好むさうだ。

短夜の夢の末かな舟よばい
木枕の痺るゝ耳に水鶏かな

「續春夏秋冬」「日本俳句抄」「海紅句集」等に見ることが出来る。「閩門の草」は其の著書である。

沖荒れて鹽田の上や飛ぶ千鳥
葺きあへぬ萱の穂風や鶴鶴
茶の木圍ふ下に小草の緑かな
冬の田に三日月落ちて寒い風
現住所 宮城縣登米郡登米町

故安藤忠太郎 アンドウチユウタロウ (畫)

江戸八重洲川岸に生れ、西洋畫家高橋由一の門に入つて洋畫を學び明治初期の洋畫家として盛名あつた。明治二十年の工藝品共進會に出品して銀牌を得、二十二年巴里萬國博覽會に於ては名譽のマンシオン、オノラーブル章を得た。二十九年、黒田清輝、久米桂一郎等と洋畫團體白馬會を起した。門下に帝展審査員小林萬吾等がある。大正元年十二月年五十二歳で病歿した。

故安藤橡面坊 アンドウトチメンボウ (俳)

潮風や蚊帳にゆる見ゆ淡路島
春雨の洲に据る舟燕見ぬ
野路讀みし歸る子に愛宕時雨して
京都市松原通岩上西入ル

安齋櫻魂子 アンザイオウカイシ (俳)

本名は千里、明治十九年二月陸前國登米町字金澤に生れ、登米小學校卒業後三十四年頃より家祖の機業を繼承して今日に至つた。氏は三十六年の春より俳誌「ホト、ギス」を読み傍ら獨り句作に精進し、後藤原師竹と交るに及んで當時の日本俳句を掲出しつゝあつた日本新聞へ投句した。そして三十七年より三十四年の間は句作に最も熱中した時であつた。のち河東碧梧桐の來遊によつてその説を聴き、その新傾向に共鳴するところ少くなかつた。爾來中絶することなく句作を繼續して今日に至つた。蓋し句作は氏の生命とするところである。氏は新聞時代の「日本俳句」雜誌「日本及日本人」「層雲」「海紅」等に投句したものであるが、その句は

氏は小田郡新山村の人で名は鏗三郎と言ひ、少い時から閑谷堂に學び、業を卒へて後明治三十年九月大阪毎日新聞社に入り新聞編輯に従つた。夙に俳句を好み正岡子規に私淑して其の流を汲んだ。後河東碧梧桐の新傾向を喜び關西俳壇に盡すところがあつたが、大正三年九月二十五日病に罹つて阪神沿線蘆屋の僑居に歿した。年四十六。氏の句に押しいたゞく手よりこぼるゝ施米かな

菖蒲湯や都の人の朝粧ひ
通し矢の桁をすりゆく羽鳴かな
南蠻の鉢に染めつく牡丹かな
紫陽花や方除したる假の宿
箒木や涼しさ動く庭の闇
等があり。その最後の作句として妹に執筆せしめたものは、碧梧桐の新傾向を十分學んだものゝやうだ。
昔繁華の花火なき納涼場の柳
早田の汐入田の秋近き色
の二句これである。

故安藤 廣重 アンドウヒロシゲ (畫)

名は徳兵衛。一世安藤廣重の門人で重政と稱し、錦繪山水を畫いて二世を稱したが、實は三世である。氏の版畫は一世廣重に比して色彩並に筆力に於て重厚を缺き格段相違があるから、一見して其區別がわかる。明治二十七年三月年五十三で病歿した。

安藤 和風 アンドウワフウ (俳)

蝶々子と號し、秋田の俳人である。慶應二年一月十二日秋田市の久保田城下に生れ、中學校半途退學の後私立東京商業學校に入つて卒業し、東京御法川工場及大阪支店、秋田第四十八銀行員となり又「秋田日報」に記者となつた。氏は俳句に於て別に師傳なく獨立獨歩と自ら稱してゐる。氏の現に主筆たる「秋田魁新報」を本城として新風を宣傳してゐる。嘗て「鳴子吟社」を起し又「露すとの俳詩」「イブキ」等の俳諧雜誌を刊行したが中絶して今は

専ら「魁俳壇」に據つて鼓吹してゐる。氏は明治二十一年の頃内藤湖南博士の縁によつて「日本人」に俳句雜文を、又明治三十年頃後藤宙外の關係によつて「新小説」に隨筆を載せたことがある。著書に「戀愛俳句選」「閨秀俳句選」「俳家逸話」「俳諧奇書珍書」「五明集」「俳諧新研究等」がある。性頗る旅行を好み讀書も嗜好の一つである。草も木も金色堂の風光る

現住所 秋田縣檜山三枚橋

イの部

故飯田 武郷 イイダタケサト (國)

舊信州高島藩士、裏安の子、蓬室と號し、文政十年十二月六日江戸金杉に生れた。天保八年正月赤羽服部元濟の門に入り漢學を修め弘化三年始めて古學に志し皇典を攻習し尙海野遊翁の門に入つて和歌を修めた。明治元年京都皇學所御用掛を命ぜ

だ以來眞劍の研究に這入つた。「ホト、ギス」國民新聞」等に投句したが其句は「ホト、ギス雜詠集」「明治句集」其他に蒐録されてゐる。著書に「雲母句集」がある。

島の温泉の障子羽ばたく千鳥かな

藁積むや冬大峰は雲の中

落葉踏んで人道念を完うす

水仙や暮色漂うて鯉うごく

鶯や人遠ければ窓に戀ふ

春風の峰にも面天女かな

平家蟹干されし屋根や春の霜

はぐれ蟻さがす我巢や砂あつし

現住所 山梨縣東八代郡境川

故飯田 綠處 イイダリヨクシヨ (俳)

名は良作もと幕臣であつて、明治六年報知新聞の創立と同時に其の社員となり、庶務及會計事務を擔當し、爾來三十年間一日の如く職務に勵精した。三十五年六十四歳に達したので、社より公債

飯田 蛇笏 イイダヂャコツ (俳)

られ、更に高島藩皇學教授となつた。六年氣比神社宮司に補し後轉じて貫前神社宮司、諏訪神社權宮司、淺間神社權宮司等に歴補した。十年修史館御用掛となり、十四年東京大學助教に任じ、十九年二月非職となつた。これより先嘉永五年始めて日本書紀通釋の著に志し爾來着々其歩を進め遂に完成して國學研究者の爲にした。嘗て國學院慶應大學等の講師として大に後進を誘導し、又大八洲學會の主任として深く斯學の普及に務めた。後再び東京文科大學講師の任を囑托され、三十年九月病の故を以て退職して専ら著述に力を用ゐた。明治三十三年八月二十六日年七十四にて歿した。生前の住所 東京市牛込區東椋町一九。

名は武治、明治十八年四月二十六日山梨縣東八代郡境川に生れ、甲府中學、京北中學を経て早稻田大學に入り、文學科に學んだ。幼時より俳句に興味を有し、三十七八年頃高瀨虛子氏に就いて學ん

證券を贈り老後の資となさしめ隨意出社を許した。氏は俳諧をよくして斯道の宗匠であつた。「綠處」は其俳號であつて又別に柳外とも稱した。四十二年十二月五日歿す。享年七十一。

飯塚友一郎

イイツカトモイチロウ(劇)

明治二十七年十一月東京神田區須田町に生れ成城中學第一高等學校を経て、大正八年東京帝大フランス法科を卒業し同年辯護士の登録を得て東京驛前丸の内ビルデング四三七區に事務所を設けて居る。氏は「東京小劇場」の名によつて既に小劇場運動に關係し、其試演の結果その他については新聞や雜誌を通じてよく知られてゐる。氏は劇の外邦樂にも趣味を有してゐるから、一代の文豪坪内逍遙博士を岳父に持つ氏の夫人くに子女史とも趣味の上より一致點を見出してゐる。夫人は岳父の力入れて舞踊は幼時より稽古の結果殆んど黒人の域に達してゐる。飯塚氏は大正八年「歌舞伎狂言細見」大正十二年「室内劇の理論と實際」等を

著して芝居ディレクターとしてよく知られてゐるが、氏の態度はディレクターとして處ではなく、實に眞剣なものであるし、何を言うても夫人に舞踊の名人があり、岳父に斯道の大家坪内逍遙博士を有してゐるから、氏の熱烈なるこの運動はわが劇界に對して何ものかを齎らさないではゐまいと期待されてゐる。

現住所 自宅東京市牛込區若松町一〇二。

飯野忠一

イイノチウイチ(連)

舊幕士岡田親平の次男、天保七年二月二十七日東京に生れて連歌の大家となつた。夙に漢學國學を修め、初舊幕府御貽酒役を勤め、後撤兵左圖役下役となつた。維新後静岡藩沼津兵學校資業生となり、卒業後上京して下谷徒町に家塾を開き、英學數學等を教授した。明治六年岐阜縣に聘せられ、中學師範學校等の教職にあること數年、同十一年同縣御用掛に出仕し史誌編纂に従事した。其後縣會、農商務等幾多の公職についてゐたが二十二年

退職して世塵を避け、吟詠自ら娛み桃の屋鶴聲と號した。時に上野東照宮法樂連歌會の擴張を計り或は蜀山人以來に於ける狂歌の復興を畫り専ら斯道の永續に勉めた。晩年文學を事とし又連頭執筆及狂歌判者を業とした。氏曾て岐阜町盡しを著して内務省より木杯一個を賜つたことがある。其他「鶴のあし跡」等數種の著作がある。

以前ノ住所 東京市神田區淡路町二ノ四

猪飼嘯谷

イカイシヨウコク(畫)

名は卯吉、明治十四年四月京都市に生れ、四條派の大家谷口香嶠に學び、後京都市立美術工藝學校に入つて、明治三十三年圖案科を卒業し、後同市立繪畫專門學校助教諭となつた。京都美術協會等で受賞すること數回、文展へは第二回に「閨愁」第三回に「大佛國師圖」第五回に「近江の國祚」第八回に「畫僧」第九回に「拾君」第十回に「六昆世伐」を出し大に名聲を博した。

現住所 京都市出水烏丸西。

笹井竹の門

イカダイタケノモン(俳)

名は虎次郎、明治四年十月金澤に生れ、私塾に研學の後北陸新報社に入り、二十五年冬高岡に移り北一合資會社の創立に際して入社した。氏の俳句は高岡に移つて「日本新聞」を愛讀するうち、正岡子規の俳句俳論に動かされ遂に投吟するやうになつた。同三十年碧梧桐氏の同地へ行脚の折守水老竹竹濤花笠諸氏と謀つて「越友會」を起した。三十一年頃佐藤紅綠氏が富山に滞在した頃より四十二年河東碧梧桐氏の句行脚の頃は最も三昧境に在つて多作をした。三十四五年の頃孤島、牧羊句鬼、彬々の諸氏と俳句雜誌「葦附」を發行し、四十一年頃より高岡新報の俳句欄を擔當してその選者となつてゐる。氏の句は「日本新聞」「日本及日本人」「ホト、ギス」「層雲」「懸葵」等に投稿され、「新俳句」「明治俳句」「春夏秋冬」續春夏秋冬「日本俳句鈔」等に蒐録されてゐる。

冬ばらの紅摧け落つ霞かな

鶯やよべの運座の忘れ本
青簾涼爐の煙白き飛ぶ
水飯や萩ほつくと花になり
現住所 高岡市桐木町

五十嵐 力

イガラシチカラ (文)

明治七年十一月二十二日山形縣米澤市館山口町に生れた。明治二十七年七月早稲田大學の前身東京專門學校第三回の文科出身で島村抱月氏より一回後の卒業である。夙に巴千の號を以て文名をばせた人だが今は創作よりも作文教授の著書が多い。「新文章講話」「新國文學史」「趣味の傳説」「半農生活」「我書翰」「八重むぐら」「作文三十講」「高等女子作文」「國家の胎生及び發達」等の著書は廣く行はれてゐる。十四年六月六日文學博士となつた。早大教授。

現住所 東京府下巢鴨町宮下一六一六

猪狩史山

イカリシザン (文)

明治六年十二月福島縣田村郡瀧根村神俣に生れて

に入つた。自然主義の勃興當時に於て盛に肉慾描寫の筆を揮つて、世の視聽を集めたものだが自然主義をはちがへたものだといふ批評を受け文學の邪道として排斥された。大正二年四月獨逸に遊び更に英瑞露の諸國を経て歸朝した。「富美子姫」「虛榮」「謎の女」「結婚前」「黄昏」等の著書を出し更に近く小説「若草の歌」舞踊劇「燒津の日本武尊」等の作を公にしたが未だ大に認められるほどには立至らない。氏はまた詠歌吟句にも趣味をもつて時々其詩的情懷をこれによつて表現する。沼津から小汽船で古宇に遊び若山牧水氏と落ち合つた時に詠んだ歌に次のやうなのがある。
月に青き古宇の島の夕蟬の鳴きこもりつゝ富士
ははろけし
ろすれゆく島山かけゆともり出でて漁火はしも
數まさりたり
見の遠き海のはたてにうすうすと夕べ消ぬがに
淡き山かけ
種蒔や鳥かあ／＼向ふの木

佐々木高美を院長とし杉浦重剛を教頭とせる私立東京文學院に學んだ。父傳内漢籍を修め書道の允可を得たる人であるから、それらの關係で氏も漢籍には造詣が深い。明治二十七年より私立日本中學に勤務し三十九年より大正六年まで國學院大學講師を兼ねて東洋史を教授した。高謙堂池田蘆洲等の漢學者と往復し十七八年來「日本及日本人」に近くは更に大正公論に寄稿し「東洋史通」「東洋の人象」「諸葛亮傳」「成吉思汗傳」を書き小説「亡び行く文明」「老子の面」「天の莊子」「杉浦重剛傳」等を著したが「老子の面」は氏の力作である。この作は石丸梧平の人間親鸞のごとく聖者と崇められた一道士老子を解剖して人間的方面よりもこれを眺めてその眞面目を表したものである。
現住所 東京府下西大久保九一。

生田 葵

イクタキ (小、劇)

名は益五郎明治九年四月十四日京都市に生れた。京都東洋英學塾に學んで後上京して巖谷小波の門

大鐘にひびき入りたる野分かな
青柳や家鴨の漁る川淺し
娘賣りて歸る繩手や霜白し
原三里一つ家の灯に野分かな
鶯や興入れ近き姫の庭
紅梅の家婿迎ふ噂かな
現住所 東京牛込區天神町五三

生田 春月

イクタシユンゲツ (詩)

明治二十五年三月十六日鳥取縣米子町道笑町に生れた。名は清平春月はその號、生田花世女史の夫君である。學歷は殆どないが詩的天分は豊かな方だ。少時南鮮地方を流浪し、のち大阪に出で、次いで上京して生田長江氏の提撕を受け、記者生活をなしつゝ語學を學び翻譯家となり、苦學奮闘の結果今日の地位を克ち得た。長篇小説「相寄る魂」「靈魂の秋」「海の嘆き」プラトンの「饗宴」一名「戀愛論」散文集「漂泊と夢想」「ハイネ全集」藝術の價値高きものを厳選した「日本民謡集」、歐米十八國の名

詩人百五十名の代表作四百餘篇を譯した。日本名詩人代表作數百篇を蒐集した「日本近代名詩集」等の詩集翻譯等數多くある。最近の「純愛詩集」はハイン、ゲエテ、バアンス、ペトラルカ、シヤミンオ、プシキン、ロセツチ始め泰西高名詩人天才の名篇より特に戀愛と人間愛との雅歌を選び、之に泰西民謡の粹を加へたものである。氏は口語譯によつて極めて自由に素直に原著の心持を出さうとして苦心してゐるさうである。近來は小説に筆を染めて「母を慕ひて」「火中の花」「若き日の苑」等があり其他詩歌評論等も數多く發表してゐる。現に詩歌中心雜誌「文藝通報」編輯の任に當つてゐる。

智慧

裏切りて
裏切られて
かつ惑ひ、かつ疑へば
心は濁り、黒ずめども
時たてば濁れる水も

いつしか澄みて
清らけき流れとならん
すさまじぎ時の飾は
やむことなく
ふるひ落す、悪と汚れを。
悪しき友と悪しき心は
選り分けられ、吹きすてられる
のこれるは眞珠、眞實、
はなさじと胸に抱かん。

いくたびも裏切られ
いくたびも欺かれて
心はかたく、かたく石となるも
その底より水は湧きいで、
つらぬきて泉は流る。

鞭たれ、打たれ、痛められ、
裂けし胸より血は迸る。
息もたえだえ、手足もふるひ、

地にふして、地に頷げけど
なほ打てる生命の鼓動。

この智慧に、この信仰に、
數ならぬ身にも慰めあり、
迷妄の心にも悟りはあり、
神はあり、天國はあり、不滅あり評、
うらゝかに春の日は昭る。

現住所 東京市牛込區天神町五三

生田長江

イクタチヨウコウ (評)

本名は弘治。明治十五年三月二十七日島根縣日野郡根雨村に生れ、大阪桃山中學東京青山學院及第一高等學校を経て三十九年東大文科哲學科を卒業した。大學在學中既に上田敏氏等の「藝苑」に執筆し、卒業後は成美女學校の英語教師たること二箇年。後「萬朝報」の記者となつたが間もなく止めて今日に至つた。評論家として一方に重んじられてゐると同時に翻譯家としてニイチエの「ツア

ラトウストラ」をはじめダヌンツイオの「死の勝利」フロオベルの「サラムボオ」ツルゲネフの「獵人日記」カール・マルクス著「資本論」等の譯を出した。氏は「自己をよりよくする事によりてのみ社會をよりよくする事が出來、社會をよりよくする事によりてのみ自己をよりよくする事が出來」といふ言葉を標語として社會改良の聲をあげつゝある。文壇人としては珍らしいほど志士の氣概に充ちた論客である。文章は驚句的で筆鋒の鋭さ他にその比を見ない。白樺派を自然主義前派と評して武者小路氏と爭論したときもその一例である。現代の小説家「最近思潮及文藝」等の著がある。

尙白樺派と爭論の後「圓光大師」(脚本)を著したが、帝國劇場に於て之を上演して、舞臺上の効果も十分あり、劇として成功したものであつたから忽ち創作家としての名聲を博して。爾來脚本の創作や翻譯ものに全力を注いでゐる。氏の脚本「決闘」は大正七年十一月の末文藝座の手によつて帝

劇で上演された。氏の第一脚本集「圓光以後」は會て文壇に大喝采を博したる脚本圓光を初め青い花温室の三篇を収録してゐる。第二脚本集は之も帝劇で上演されたが地方では上演を禁ぜられた「長澤菊子」は千葉心中で名高い鎌子夫人をモデルにしたものであつて、描寫深刻精密社會劇の名篇である。

世界叢書の第一編ホオマア原作オデイーの翻譯は文語體を以つて譯してあるが凄美にして平明な語彙や語脈を選ぶことに法意を拂つてゐる。その他「最近の文藝及思潮」「徹底人道主義」等の論文集も世の注意をひいた。

現住所 東京市外瀧野川町五四六

生田 蝶介

イクタチヨウスケ (歌小)

名は調介。蝶介はその雅號である。明治二十二年五月二十六日山口縣豊浦郡長府町に生れた。早稲田大學を中途で退學して一時時事新報記者となつたが僅か五ヶ月の後これを辭して博文館に這入つ

て「講談雜誌」の編輯主任となつた。歌集「寶玉」「渦潮」創作集「歩み」等の著書がある。歌人として聲名ある氏は創作家としても既に知られてゐた「歩み」は氏が過去十餘年間の創作の中より十餘篇を抜き出したものである。

階樓にものを思へば遠つ人に氷雨ぞすらし暗し海の面

まくろくろ山のみくれて湖は光つめたし暮惜しむかな

山またく暮れてもしほし湖はくれを惜しみて光りやまずも

現住所 東京市外中野町打越二二三九

生田 花世

イクタハナヨ (文)

明治二十一年十月十五日徳島縣板野郡松島村泉谷に生れ同縣立高等女學校を卒業後小學校教師となり更に婦人雜誌文藝雜誌新聞等の記者となつたことがある。大正二年生田春月氏と結婚し夫の編輯してゐる「文藝通報」の記者となり傍著書に従つて

答 朱襄廷 見 懷

海色暝 高樓、青林斷 塵躑、陰々 帷幕深、華堂思 燈燭、美人遠 何許、傳驛投 素束、導言懷 靈芬、襟袖散 珠玉、援琴一 徘徊、從和 郢中曲、再彈不 成聲、技拙淚 傾屬、無 由致 殷勤、辰參漫 綜鬪、所思亮 不遠、短景日 以促、夕陽秋 草根、萬里生 寒綠、槐南博士は、五言古詩に於て、中華の茂奇高最も優秀であるが、年最も少なる曼陀は風格矜鍊の才力は正に其副たるべきものと評したことがある。

夜歸

揮 手出門去、四顧心含悲、疎星照 古屋、明河淡 高秋、天地自悠久、美人易淹遲、踟躕中道散、相聚復何時、現住所 東京小石川區中富坂町七

井汲 清治

イクミセイジ (評)

明治二十五年十月十四日岡山縣苫田郡苫田村小田

郁 曼陀

イクマンダ (詩)

「情熱の女」「戀愛順禮」等は可なり歡迎されたものだが、尙「處女地」に發表した「抒情詩」「ある主婦の詩」婦人公論に出した「情熱地獄について」の外「婦人と貧富の問題」「新婦人協會と私」等の詩、感想、論文等によつて各種の方面に活動してゐる女性の一闘士たることがわかる。現住所 東京牛込區天神町五三

名は華、字は慶雲といひ、東京の詩人である。隨鸚吟社客員として詩壇に重きをなし、其作は「隨鸚集」「太陽」其他に發表された。

臘日送 華裳古

時鳥懷 好音、聞 聲苦 哀慕、交 酬惜 分飛、遐 舉一 瞻顧、人生多 別離、蹇 懷寡 良遇、讌 游及 清夜、杯 几慳 未曙、詰 朝戒 車徒、踟 躕出 門去、日 月亦 已徂、雨 雪載 征路、丈夫重 遠游、去 去庸 足數、期 子行 役心、風塵傷 歲暮、

中二七四に生れ、同縣立津山中學校を経て、慶應義塾大學文學科に入り大正六年に卒業し、同大學佛蘭西語の教師となり、傍ら文藝批評に従つてゐる。「三田文學」連載の批評「プロムナード」は主なる作であつて、「南部の湖水の上」「最近フランス文學」「童話に就いて」「豊島與志雄の反抗」「批評家としてのルメトル」「里見溥論」「森林太郎論」「文學上の言葉の變遷」「野口米次郎の林檎一つ落つ」等大なる努力を示して居る。
現住所 東京市麴町區三番町二森氏方

池上秀畝

イケガミシユウホ(畫)

名は國次郎、四條派秀華の男、其居に題して傳神洞と名づけてゐる。明治七年十月十一日長野縣高遠町に生れ夙に荒木寛畝の門に入り、南北合派を研究し、殊に花鳥を能くする。明治二十二年以降日本美術協會其他諸會に出品して銀銅牌を受けること二十餘回文部省美術展覽會に初冬、梢の秋、五月雨の圖を出品して三等賞を得、晴潭、谿間の

と云つた。明治十九年六月三十日歿した。年六十
三、男桂仙其業を繼いだ。

池田永治

イケダエイジ(畫)

號は牛歩。明治二十二年十月京都木屋町に生れ、これと言ふ學歴はないが天才あつて、よく油繪、水彩、俳畫を描き、文展へは第四回に「牧場」第七回に「冷香」第八回に「春光」「イソツブ」第九回に「近郊から」を出して褒状を得た。太平洋畫會等にも出品がある。

現住所 東京市下谷區北稻荷町三十四

池田桂仙

イケダケイセン(畫)

明治元年九月伊勢國津市西町に生れた。父、池田雲樵に學び、後京都府立畫學校に入つて明治十九年優等の成績をもつて卒業し、第四回内國勸業博覽會に受賞して以來屢々受賞し、文展へは第一回に「倭忽光陰」第二回に「梅溪訪友」「日暖風柔」第四回に「松林高士」等を出して褒賞を得、第五回に

圖を出品して褒状を受け、宮内省御用品及び御前揮毫の榮を負ふこと前後數回ある。帝國繪畫協會の會員で、美術協會委員、日本畫會並に讀畫會幹事である。夫人縁畝も寛畝門の閨秀作家大正八年美術院推薦となつた。大正十三年六月氏の傳神洞畫塾展覽會を開いて大に好評を博し三傑作に授賞した。

現住所 東京市下谷區谷中清水町十二番地

故池田雲樵

イケダウンシヨウ(畫)

名は政敬字に公惟、伊賀の人前田暢堂中西耕石に従遊し又文を齋藤拙堂に學び、畫を以て藤堂侯に仕へた。維新の後京師に住し畫學校の教員となり屢内國共進會等に出品して銅章等を受けた。雲樵飲を嗜み、嘗つて侯の宴に侍し、侯酔ふこと甚しく、杯洗に筆を洗ひ、其上に酒を盛り、戯れて「汝酒を好めるが此酒を飲むことは出来まい」と言つた。雲樵一飲これを盡した。侯又「汝の臍は鱧の臍の如く黒色とならう依て豊齊の號を授ける」

「溪山春曉圖」「疎林秋晚圖」第六回に「竹溪細雨圖」「儂客圍碁圖」第七回に「四時清娛」第八回に「山高水清」第九回に「光抄生芽圖」「雪後寒林圖」等を出して三等賞を得、第十一回に「武陵桃源」を出して特選となつた。

現住所 京都市富小路御池北

故池田蕉園

イケダシヨウエン(畫)

名は百合子、榊原浩逸の女。東京に生れて十六才の時、浮世繪の大家水野年方の門に入り、復狩野派川合玉堂に就いた。十八歳の時、研精會へ「我が鳩」を出して一等賞を得、其後東京府の展覽會等に出して受賞し、後同門の浮世繪師池田輝方に嫁して、夫妻共に畫名を東都に馳せた。文展へは第一回以來第十回まで毎回出品して其の度毎に受賞した。尤も美人畫を得意とし、代表作には、東京府博覽會出品の「桃の酔ひ」文展第三回の「宴の暇」第十回の「こぞのけふ」等がある。中でも「こぞのけふ」は好評を博し名譽の特選に入つた。大

に未來を期待された關秀畫家であるが、大正六年十二月一日病歿した。松本華羊、石川涼園、鈴木華蕉、吉田華丹等の門人がある。

池田大伍 イクダダイゴ(劇)

明治十八年九月六日東京市銀座に生れた。名は銀次郎大伍は雅名である。明治四十年早稻田大學英文科を卒業して戯曲の創作や批評に従つてゐる。數ある劇曲の中で「瀧口時頼」「茨木屋幸齋」「名月八幡祭」等は幾度も上演されて其の舞臺上の功果があつたので好評を博した。

震災前住所東京市橋區築地三ノ十五

故池田輝方 イクダテルカタ(畫)

名は正四郎。明治十六年三月東京市橋區木挽町に生れ、水野年方、川合玉堂に就いて學び、三十六年四月日本美術院展覽會で賞を得た外、諸所で受賞し、文展へは第六回に「都の人」「お七」等を出して褒状を受け、第八回に「兩國」を出して三等

の彫刻である。太平洋畫會會員。大正八年帝國美術院推薦となつた。

現住所東京府下田端五二一

故池邊義象 イクベギシヨウ(國)

熊本の人、大學古典科出身の英才で故落合直文及宮内省御用係文學博士荻野由之等と親交あつた。三氏合著の日本文學全書は我國古典文學研究の勃興にどの位功あつたか想像以上のものであつた。文筆に長じてゐる氏は右のやうな古書の整理編纂の外現代文への翻譯や少年文學の讀物も書いた。氏は恩師小中村清矩博士の令嬢と結婚して小中村姓を長く冒してゐたが故あつて破鏡の嘆をせざるを得ぬことになつて舊姓に歸つた。眞野九州大學長及故福本日南氏等と共に佛國に留學し、歸朝後大正三年十二月初め帝室編輯局が出來ると其の編輯官として宮内省に入つた。又第一高等學校京都帝國大學奈良女子高等師範學校等に教鞭を執つたこともある。氏は歌と書とを善くして其の達吟達

賞、第九回に「木挽町の今昔」を出して二等賞を得、第十回に「夕立」第十一回に「涼宵」を出して特選となり、曙畫塾を開いて後進を教へた。夫人蕉園、關秀日本畫家として知られたが大正六年十二月歿した。氏は同八年帝展の推薦となつたが大正十年五月六日病歿した。

生前住所東京市麴町區下六番町十

池田勇八 イクダユウハチ(彫)

明治十九年八月香川縣綾歌郡瀧宮村に生れ、後東京美術學校に入つて明治四十年彫刻選科を卒業し四十三年東京府美術及美術工藝展覽會に出品して賞を受けた外、諸所の展覽會で屢々受賞し、文展へは、第三回に「馬」第四回に「ぼんやりした馬」第五回に「うさぎ馬」第六回に「山羊」第七回に「神山詣り」「こゝろいき」第八回に「豚」第九回に「みづかい」等を出して褒状を得、第十回に「川べいで」第十一回に「目かくし」等を出して特選となつた。其の得意とするところは動物、特に馬

筆は同人の敬服するところであつたが果して大正六年御歌所の寄人となつた。大正十二年三月十九日宮内省の編修局に於て執務中腦溢血で卒倒した。年六十三。氏一度病んで、回春に赴いた時

玉の緒をつなぎとめけり諸人のあつきまことこのもる力に

と詠じて看護の任にあたつた人々に謝し、又或人より梅の花を贈られた時

とりあへず小瓶にさせば贈りたるひとのこゝろも薫る梅かな

と詠んで全快を期してゐたのに惜しいことである。

故池邊三山 イクベサンザン(文)

熊本の人、池邊吉十郎の長子、名は吉太郎、三山はその號であつて又別に鐵崑崙とも號した。父は學者であつたから幼い時から家學を受けて漢籍を研究した。父吉十郎は明治十年の西郷隆盛に黨して戦死したので、氏は爾來國友昌の門に入り大に

間肉を絶つた。これより病漸く激しくなつて二月二十八日同年四十九歳で歿した。

井澤蘇水 イザワスイ(畫)

東京の人、折衷派の大家川合玉堂に學んで選畫會等で受賞し、文展へは第八回に「鶴」第九回に「水郷」第十回に「驕樂」を出し何れも好評があり、未來を囑望されてゐる。

現住所 東京市牛込區市ヶ谷柳町二十五

石井金陵 イシキンリョウ(畫)

上道郡西大寺の産、天保年中に生れ七歳の時より畫筆を放さない。市川東壑、岡本秋暉について繪を學んだが、兩帥の歿後は各地を漫遊して腕を磨いた。中年以後岡山岩田町に卜居していろ／＼の逸話を残したが明治三十六年大阪に出て天王寺に移り住んだ。日本畫壇に於て南畫に其の人乏しき折氏のごときは重鎮なのであるが、老齡繪筆を執らずして餘技として彫刻などを弄してゐた。曾て

勉強し遂に文章に於て頭角をあらはすやうになつた。十七の時慶應義塾に學んだが中途で退學して佐賀縣學務課に奉職した。三年の後大阪に行つて柴四郎等と共に經世評論に筆を執り大に文名を馳せた。二十五年日本新聞社の客員となり、旁交親會を組織して外交上の秘密、消息、時事問題等を同志の間に通信した。二十六年舊藩主細川氏と共に佛國に留學して鐵崑崙の名をもつて巴里通信を日本新聞に寄稿し大好評を以て長く連載した。二十九年朝日新聞の主筆となり、三十年東京朝日新聞の主筆となつた。當時新聞記者として錚々たるものに陸羯南、朝比奈知泉、三宅雪嶺、徳富蘇峯等あつたが、氏は羯南知泉と共に三大家と稱せられて東都文壇に文名籍甚した。氏は學止老成人の風があり、學は漢洋に通じ、文才あり兼ねて書畫に巧みであつた。書は特に同人の推し處であつた。身體肥胖年遂に心臟病に罹つて苦しんだ。明治四十五年一月母を喪つたが平素より母に事へて孝行な氏は、哀しみ度に過ぎて五十日の喪に服する

岩田町にゐた頃、裏の小川に出で顔を洗はうとして齒磨楊子を使つてゐる處へ、上り列車が岩田町の踏切までやつて來たので急に大阪へ行きたくなり、齒磨楊子にタオルを下けたまゝ其の汽車に飛び乗つて大阪まで出かけたといふやうな、文人畫や南畫家の天性を豊かに具へてゐる。氏と同じく岡山縣より出てゐる畫家には満谷國四郎、兒島虎次郎、竹久夢二のやうな人々の外に、氏のやうな畫家は結城蕃堂や僧木印位であらうか。氏は確かに日本畫壇の元老であり大家であると言つても決して過賞では無い。

現住所

石井鶴三 イシイツルゾウ(彫)

明治二十年六月東京に生れた。美術院同人の彫刻家洋畫家二科會々員として有名な石井柏亭の弟で父は日本畫の名家石井鼎湖である。夙に洋畫に志して小山正太郎氏の不同舎に入つて學び、又高村光雲門下の逸足加藤景雲に就いて彫刻を學び、四

十三年東京美術學校彫刻撰科を卒業した。文展へは第五回に彫刻「荒川嶽」を出して褒状を得、大正五年美術院彫刻部の同人となり、畫は第三回の二科會に「行路病者」第四回の同會に「競争」を出し、特色ある作風を示し世の視聽をひいた。大正九年一月兜屋に七十點を展觀し、大正十二年大震災後の秋季展覽會には彫刻「松澤氏の像」こと「等」等の作を出して好評を博した。

現住所 東京府下田端二八二

故石井鼎湖 イシイテイコ(畫)

名は重賢、本姓は鈴木、後石井氏を繼いだ。東京に生れ初め其父鈴木鷲湖の手ほどきを受け、後横濱に行き、維新後は大藏省記録局に出仕し、又紙幣寮に轉じ、二十七年まで其石版課彫刻課に勤め早くから洋畫に興味を有し、又日本に於けるクロモ石版の創始者の一人である。其日本畫は南北合派の系統を引き洋畫趣味をも取入れたのは面白い所である。三十年東京に逝いた。年五十。其息、

柏亭、鶴三の二人は何れも有名な藝術家である。

石井天風

イシイテンブウ(畫)

名は林響、別に天風、星華堂、大和子等の號がある。明治十七年千葉縣山武郡士氣本郷町に生れ、夙に畫を好み中學課程を卒へて橋本雅邦に師事し専ら狩野派の法格を修め殊に花鳥、山水、人物の描寫に妙を得た。明治三十八年二葉會に出品して一等賞を得、文部省美術展覽會に出品して入選二回、褒狀一回を受け、其他諸種の展覽會に出品して優賞を授けられたことが頗る多く、且つ宮内省の御用品となること數回に及んだ。帝國繪畫協會紅兒會の會員で二葉會、美術研精會、大同繪畫會玉成會の幹事である。門下に荒井紫雨がある。大正八年號を林響と改めた。次の帝展審査委員に擬せられた。

現住所東京府下南品川五五七

石井柏亭

イシイハクテイ(畫)

跡」第三回に「熊野河口」「紀の海」第五回に「サン・ミシエル橋畔」「ローマの遺跡」第六回に「獨逸の女」「オランダの子供」等を出して褒狀を得第七回に「滯船」「並藏」「N氏とその一家」を出して二等賞を得た。二科會には第一回に「早春」「猪苗代湖」第二回に「木柵によるメノコ」「餅倉」第三回に「鱒網の支度」「松樹下」第四回に「道灌山」等を出し、大正七年三月津田青楓と共に日本畫作品約四十點を展觀した。著書には「新日本畫譜」二卷、「歐洲美術通歴」二卷、「我が水彩」結城素明、黒田鵬心との共著「美術辭典」「名畫のロマンス」山村耕花と合作の「當世婦人百態」「日本風景版畫」等がある。大正七年五月鮮、滿に遊んだ。太平洋畫會會員。中央美術編輯同人。弟に彫刻家石井鶴三がある。大正八年支那に遊んだ。

石川確治

イシカワカクジ(彫)

彫刻家。明治十四年八月山形縣山邊町に生れ、後東京美術學校に入つて明治二十八年彫刻科を卒業

名は滿吉。明治十五年三月東京下谷仲徒町に生れ日本畫家石井鼎湖の長男である。幼時から日本畫を父に學び、二十八年から三十七年まで印刷局に出仕して彫刻及び圖案に従事したが、眼を病んで辭した。又之より先、三十年に父を失ひ三十一年淺井忠について洋畫を學び、後中村不折の指導を受け、三十四年結城素明、平福百穂等の无聲會に入會した。印刷局辭職の後は中央新聞に入り、傍ら東京美術學校西洋畫選科に入學したが一年にして辭し大阪に移り、後京歸して内外印刷會社、雜誌「サンデー」等に關係し、四十年五月森田恒友、山本鼎、小杉未醒、坂本繁二郎、平福百穂、織田一磨等と雜誌「方寸」を起し、四十三年歐洲に遊び、埃及、土耳其及歐洲の諸國を歴遊して大正元年十月歸朝した。大正二年國民美術協會の設立に奔走し、又此年丸山晚霞、中澤弘光、南薫造、白瀧幾之助等と日本水彩畫會を起し、三年には有島生馬、藤島武二等と二科會の設立に盡した。文展へは第一回に「姉妹」「千曲川」第二回に「火の

し、文展へは第二回に「花の雫」第三回に「くもり」第四回に「化粧」第五回に「さめたる女」第六回に「石屋さん」第七回に「木蓮」第八回に「醜膚」「追分」第九回に「はなちる音」第十回に「女」「梳る女」第十一回に「追想」等を出品して多く褒狀を得てゐる。関秀日本畫家石川丹麗はその夫人である。

現住所東京府下日暮里渡邊町中通り

石川幹明

イシカワカンメイ(彫)

舊水戸藩士石川竹之助の三男で安政六回十月十七日水戸の城下に生れ大正四年十月分家して一家を創めた。夙に慶應義塾を卒業して時事新報社に入り主筆となつた。其の筆穩健着實でしかも文名がある。嘗て歐洲を視察して歸り彼の長を學んで新聞經營に施すところあつた。又慶應義塾理事であつて徳川家の評議員を囑托せられてゐる。

現住所東京麻布富士見町九

石川欽一郎

イシカワキンイチロウ(畫)

洋畫家。明治四年八月靜岡に生れ、小代爲重に學び、又曾てアルフレッド・イーストについて作品の批評を受けた。三十七八年役に從軍し、永らく臺灣總督府陸軍部に勤務したが、大正五年東京に歸つた。文展へは第一回に「森の道」第二回に「小流」第四回に「市街」第七回に「臺北の郊外」等を出し、「寫生新説」を著してゐる。

現住所 神奈川縣鎌倉町小町三八三

故石川鴻齋

イシカワコウサイ(儒)

文章家で又南畫が巧だ。字は君華別に芝山外史、雪泥處士等の號があつた三河の國豊橋の人、幼にして穎悟西岡翠園の門に學んだ。年十九郷關を出でて四方に漫遊した。安政戊午郷里に歸り、帷を下し經史を講じて諸生に授けた。後横濱に來て清客と交り欽差大使何如璋等と常に往來して、大使の從官の沈氏黃氏のやうな徒と尤も親善であつ

た。彼又鴻齋の文詞に敬服して先生と稱した。氏の著書「明治玉篇」は明治の學生に廣く用ゐられたものである。大正七年病歿す。

過那須野原

百里郊原幾陌阡。

栽桑穗粟賑炊煙。

妖狐事蹟元妖語。

只看耕牛柳蔭眠。

故石川光明

イシカワコウミョウ(彫)

嘉永五年八月江戸淺草松山町に生れ、文久元年親戚なる石川氏に就いて木彫を學び、同じく二年狩野素川に就いて日本畫を習ひ、慶應二年根付師菊川正光の門に入つて牙角彫刻を學び終に斯道の名家となり、二十三年東京美術學校教授、同年帝室技藝員に任じ、文展第一回より六回まで彫刻部の審査委員となつた。各種の展覽會に出品して受賞甚だ多い。大正二年七月年六十二で病歿した。その子に閨秀日本畫家石川丹麗がある。氏の家は代々宮大工であつて有名な淺草の雷門の作者は氏の祖父藤吉であつた。

故石川啄木

イシカワタクボク(歌)

氏は盛岡中學校の出身で明治四十五年四月十三日二十八歳で死んだ。詩人として思想家としてその二十八年の短生涯に不朽の足跡を我が文壇に遺せる薄幸の天才である。啄木歌集には明治四十一年夏以來の作千餘首の中より五百五十一首を收めてゐるが、何れも舊套に捉はれた短歌を廣き人間性に解放して、生活に即せる實感味を歌つた所謂生活派の新派歌風である。土岐哀果氏の歌は啄木の歌風を紹いだものである。「啄木遺稿」は唯一の思想的文集で社會主義詩や社會革命家としての思索感想を輯めてゐる。言論熱烈直情眞摯、觀察精緻論鋒銳利、不平に満ちてゐる。金田一氏の啄木傳を附録としてゐる。

大正八年新潮社より發行された啄木全集は氏の全生活を知るに都合がよい。第一巻には遺稿中の小説を收めてあるが、こゝにも鋭き觀察と天才的な著者の止み難い熱情の迸つてゐるのを見ることが

出来る。

氏の歌の特徴は、實生活の寫生であること、過去の經驗現在の不滿或は諷刺告白を多く歌にしてゐる。又表現形式の方ではき、けり、ぬ等の語を多く用ゐ又思ひ切つて俗語をも用ゐ、引用法もし、文法の破格も一向かまはぬ。彼が新詩社で死ぬ前の頃詠んだ「新調の靴に入れたる鳴革を踏みし蛙の音と思ひき」を幹子は不眞面目と評した。併し彼は決して文字を弄ぶ人ではないと評した人か多かつた。

氏の歌をしみじくとよんでゐると氏の人生が眞剣であつたが、その實生活の眞垢美醜強弱をいかに赤裸々に表現するほどの純眞な人であつたか、氏の生活に物的心的兩面に如何に壓迫が多かつたかよくわかるばかりでなく、我々の心をよく言つてくれたと思ふやうな所も随分多い。實に人に仄迫する歌を多く讀んだものだ。

尙氏は歌を三行に書く習慣だつた。土岐哀果も同じ形式を踏襲してゐる。

東海の小島の磯の白砂に
われ泣きぬれて

蟹とたはむる。

高きより飛び下りるとき心もて

この一生を

終るべきなきか。

非凡なる人のごとくにふるまへる

後のさびしさは

何にかたぐへむ。

とある日に

酒のみたくなるごとく

今日われ切に金を欲りせり。

目の前の菓子皿などを

かりかりと噛みてみたくなりぬ

もどかしきかな。

大正十一年郷里の人によつて、北上川沿岸に氏の
記念碑が建てられた。

石川丹麗

イシカワタンレイ(畫)

を出して二等賞を克ち得て名聲を博し、第八回に
「最上川」「西日さす濱邊」第九回に「深潭」「野
うるし咲く頃」第十回に「水郷の黄昏」第十一回
に「驟雨の徴」を出して其の確かな手腕を認めら
れて、遂に推薦となつた。この外太平洋畫會展覽
會等にも出品は多く、現に太平洋畫會理事。東京
高等師範學校教授となり、遂に帝展審査員になつ
た。尙氏は臺灣總督府から明治神宮に寄納する壁
畫を描くことになり、北白川宮殿下臺北御入城の
偉觀を寫す爲め其調査の必要から渡臺したことも
ある。

現住所 東京府下瀧野川町字中里四二五

石川柳城

イシカワリユウシヨウ(畫)

南宗畫家。名は戈足、弘化四年十月尾州佐屋驛に
生れ、文學を辰巳某に、經書を吉田文淵、淺田白
三、都築忍齋等に、詩を森春濤、清人陳曼壽に、
書法を日下部鳴鶴に受け、畫は初め名古屋の人中
野水竹に學び後吉田稼雲に従ひ又京都の諸家に

閨秀日本畫家。名はてる子。元玉溪、又精華と號
し、明治十五年六月東京に生れた。父は彫刻の大
家石川光明であつて、夫君は彫刻家石川確治氏で
ある。畫は川端玉章、橋本雅邦に學び、後下村觀
山に就き、寺崎廣業に學んだ。諸所の展覽會に出
品して受賞し、文展へは第三回に「對月」を出し
た。日本美術院研究會員である。

現住所 東京府下日暮里渡邊町中通り

石川寅治

イシカワトラジ(畫)

明治八年高知市鐵砲町に生れ、洋畫家を志望して
上京し、二十四年小山正太郎氏の「不同舎」に入り
三十四年中村不折、吉田博、滿谷國四郎等と太平
洋畫會を起し、三十八年より二年間大下藤次郎等
と歐米に遊び四十年、東京勸業博覽會に出品して
三等賞を得た。文展には第一回に「秋雨」「乙女」
第二回に「菊」第三回に「桃の節句」第五回に「雨の
日」「靜物」第六回に「輛の津」「窓のそば」等
を出して三等賞其他を得、第七回に「港の午後」

入した。後岐阜縣に仕官し又臺灣に轉任し、明治
三十三年支那に遊び各地を巡遊し、四十二年臺灣
支那に遊び歸朝後名古屋に住し、中央南宗畫會監
事となり、兼て東京南畫會の顧問となつた。大正
四年御即位の大典に松竹梅の詩畫百幅を作つて市
の圖書館費に寄附し、又大正六年楠公夫人遺蹟保
存の爲に百幅の詩書畫を描いて之れを東京上野常
磐華壇に展覽した。門下に小川鴻城、渡邊福堂等
の名手がある。

現住所 愛知縣千種町元古井六〇

石樽千亦

イシクレチマタ(歌)

愛媛縣の人、名は辻五郎、千亦はその號である。
東京に出でて石樽氏の養子となつた人で、幼より
和歌の嗜み深く佐々木信綱博士の門に學んだ。雜
誌「心の花」は竹柏園主佐々木博士の發行されるも
のだが、其の實博士は和歌史や歌學の研究に專日
がないので編輯や多くの作歌批評や訂正は石樽氏
に任してあることは多くの人の知つて居る處であ

る。氏は實務方面に於ては帝國水難救濟會本部で庶務課長救難課長又東京救難所長として勤続三十年に及んでゐる。同會本部幹事長其の他職員は大正八年三月感謝の意を表すべく「正續群書類從」「萬葉集古義」「加茂眞洲全集」其他文學に關する古典數種を書架に藏めたものであるといふ。氏の作歌は職務上海に關するものが多く、その家集さへ「潮鳴」及「鷗」と題してゐる。今その作風の二三を擧げれば

萱草のさき下りたる山裾に

路傍樹の若葉すがくし天そゝる

枯木立高き煉瓦家ほのかなる

みちのくの津輕のせとの早潮に

夕べの月は空にかゝれり

のりて東す初秋の風

せとにます大海神にうま酒の

初穂捧けて杯をとる

眞蒼の海の白くくづる、

煙突未だ烟をはかず

夕べの月は空にかゝれり

のりて東す初秋の風

せとにます大海神にうま酒の

初穂捧けて杯をとる

眞蒼の海の白くくづる、

煙突未だ烟をはかず

みちのくの津輕のせとの早潮に

夕べの月は空にかゝれり

のりて東す初秋の風

せとにます大海神にうま酒の

初穂捧けて杯をとる

眞蒼の海の白くくづる、

煙突未だ烟をはかず

みちのくの津輕のせとの早潮に

夕べの月は空にかゝれり

のりて東す初秋の風

せとにます大海神にうま酒の

初穂捧けて杯をとる

眞蒼の海の白くくづる、

煙突未だ烟をはかず

みちのくの津輕のせとの早潮に

夕べの月は空にかゝれり

のりて東す初秋の風

せとにます大海神にうま酒の

初穂捧けて杯をとる

眞蒼の海の白くくづる、

煙突未だ烟をはかず

みちのくの津輕のせとの早潮に

夕べの月は空にかゝれり

石崎光瑤

イシザキコウヨウ(畫)

議員として地方自治の要職に力を盡してゐる。現住所 埼玉縣大里郡奈良村中奈良二〇五五

竹内栖鳳に學び、文展へは第六回に「薰風」第七回に「暖き冬」第八回に「寛」「春の畫」第九回に「森の藤」第十回に「山村二題」を出した。氏はよく色彩の南國的なもの、畫面の大きいものを好んで描く。

石島雉子郎

イシジマキジヲ(俳)

名は龜次郎、明治二十年八月二十二日埼玉縣北埼玉郡忍町大字行田に生れ、中學中途退學後救世軍士官學校に入り、四十三年卒業後救世軍病院及び山室大佐秘書官など勤めた後、大正二年十一月朝鮮に派遣されて救世軍朝鮮本營に勤務してゐる。

とのぐもる大河口の潮煙り

船を蔽へり恙あらずな

令息も亦歌をよくし文學を好んで「心の花」に出してゐる。

現住所 東京市下谷區上野櫻木町四五

石坂養平

イシザカヨウヘイ(評)

明治十八年十一月二十六日埼玉縣大里郡奈良村中奈良二〇五五に生れた。大正二年東京帝國大學文科に這入つて哲學科を卒業した。二年間ばかり東京に放浪して以後故郷に定住し文筆に従つた。文藝評論家としてその堅實の思想と文章とは文壇の一權威であつたが、今は熊谷銀行副頭取及び村長等にあけられて多忙なため、忙中僅かに餘暇を見出して詩評を書いてゐる。

「藝術と哲學との間」の外數多の作がある。氏は地主の富豪であるが新しい教育を受けた人だけに、小作人との折合も大層よく常に尊敬の的となり村長にもあけられたのであるが、更に今は埼玉縣會

氏は幼時「ホト、ギス」誌によつて俳趣味を覺え郷先輩川島奇北氏の指導を受けたが、三十七年の頃俳誌「浮城」の發行せられるやうになつてその主筆となり四十一年まで續刊した。最初は岡本癖三醉に後には高濱虚子氏の影響があると言はれてゐる。「氏の句は「ホト、ギス」「國民新聞」「浮城」等に投稿せられ「雉子郎句集」「雜詠集」等に收められてゐる。「雉子郎句集」は氏の著書である。

雪女郎去年見しかゝを月夜かな

谷底の家に雪落つ響きかな

雷に草刈り捨てゝ去る子かな

夏の月江尻の蘆に風わたる

雨後の濱月の出汐の風薫る

花桐や白木の宮の御拜殿

現住所 朝鮮京城永樂町二丁目

石橋雲來

イシハシウンライ(詩)

大阪の詩人名は教、雲來は其號である。弘化四年

六月播州姫路に生れ、幼時より紀州高野山に登つて法道を修めた。後大阪の高津境内某寺の住職となつたが後に還俗した。爾來小野湖山巖谷修等其他の詩客と徴逐して吟懐を恣にした。近來その消息が聞えぬ。

蟾蜍巖

居然大腹似蟾蜍、一見始知名不虛、
啣々疑他相喚去、斷梅時節方晴初、
以前住所 大阪市北區西寺町赤門前

石橋 思案

イシバシアン(小)

名は助三郎、思案外史は其號、石橋政方の男、慶應三年七月神奈川縣横濱に生れた。幼より文學を愛好し作文を事とした。會て山田美妙齋、尾崎紅葉等と硯友社を組織し小説の著作に従事すること數年其名漸く著れた。著書に「乙女心」「寧馨兒」「落語全集」其他數種ある。近來は本町志といふやうなものを書くのみで所謂創作には全く遠ざかつてゐるので、氏の名を見ても嘗つて硯友社の一員

として活動したことを知つてゐるものは少いであらう。氏得意の小唄を次にあけて置く。

立つた浮名と世間の口がたゞの二人にして置かぬ。

やさしい氣心知らせておいて切れてくれるもすさまじう。

私の心を知らぬじやないに嘘にして聞く憎らしさ。

積る恨みの言へぬがづらい逢へば笑顔が邪魔をして。

紅の濃いのを笑ふが憎いたりや逆上せて此の始末。

偶にや邪慳な仕打も欲しい實で固めた罪人。末にやかうなる覺悟で居ても立つた浮名が恨めしい。

現住所 東京小石川區金富町五〇

石橋 忍月

イシバシニンゲツ(小)

慶應元年九月筑後國上妻郡福島町に生れた。名は

名古屋の東山に歸り、後末森入舟山に隱栖して終生世に出でなかつた。逸話甚多い。明治三十三年四月年八十七で歿した。學統は植松茂岳、本間游清、前田夏蔭等に出でゐるやうである。遺詠の中に毎夜見月といふ題で

見れど／＼あかぬ月哉あるは野邊

あるは山邊と處かへして

などいふのがある。門人三浦義住、尾崎忠功、小菅草月宮崎知全等世に知られてゐる。知全は師の跡を襲いで頗る師の傳へ且つ最も逸話に富んでゐる。

石橋 和訓

イシバシワクン(畫)

明治九年島根縣飯石郡須佐村に生れ、初め南畫の大家瀧和亭について日本畫を學んだが、三十六年英國に留學し四十年、倫敦のロイヤル・アカデミーを卒業し、大正七年一月始めて歸國した。文展へは第二回に「ものおもひ」第三回に「美人讀詩」を出して三等賞を得、第四回に「肖像」第五回に

故石橋 蘿窓

イシバシラソウ(歌)

友吉忍月はその號である。明治二十四年七月帝國大學法科を卒業して法學士となつたが文學好きの氏は在學中より既に國民の友に執筆し批評小説家を以て鳴つた。二十五年内務省縣治局に出仕し幾もなくして北國新聞社に這入つた。尋いで辯護士となり三十二年春夏の交判事に任ぜられて長崎區裁判所に赴任したが翌年冠を掛けて辭職した。著書に民法觀屬編通解、捨小舟、露子姫、惟任日向守其他數種ある。

現住所

名は知空と言つて尾張名古屋に生れた。家は世々尾藩の金用達を業としてゐたが、知空は性奇矯にして産を治めるを好まないで業を弟に譲つて高野山に入り僧となつた。一體其の人風流の道を楽しんで家道を顧みない人は尠くないが、徳川時代の歌人文人村田春郷や現今の歌人書家岡山高蔭のやうに家業を弟に譲つたのである。二十一歳のとき

「ドクトル植原氏肖像」第六回に「織手消閑」「彫刻家」第十回に「肖像」等を出し、大正七年文展の推薦となつた。氏は英國に於ても相當の地位を占めてゐる畫家である。

現住所 東京市赤坂區高樹町十二ノ五

石原 純

イシワラジュン（歌）

アインシュタインの相對性原律を世に紹介して一世の注目を惹いた氏は、アララギ派の歌人としても傑出した作家である。併し東北大學の教授であり理學博士であるといふ點より其の方には既に名高くとも、詩人としての氏はアラ、ギ同人位のものに知られてゐたのであつたが、愛人原阿佐緒女史との同棲問題によつて文壇上の氏としても一般に知られて來た。そして短歌集「^{アイン}鑿鑿」を出すに及んで其の天才は益々認められた。感想集「人間相愛」は學界の世界的權威であつて一面純眞至情の歌人である。著者が敬虔なる態度と不斷の努力とを以て、藝術、宗教、哲學、科學の極致を究め

得たる崇高博大なる生命の發現である。苦惱の體驗をもつて自らを懺悔し自らを淨めつゝ究竟の理想に近づくことを専念する深奥なる心の叫である。「まがななき我が世にしあれや相愛の心たちちて度しく生きむ」一首よく博士の心持をあらはしてゐる。東北大學教授としては大正十年八月休職となり、同十二年八月休職満期になつたので全く學界を去ることになり、在職中の功績によつて正四位に陞叙された。アインシュタイン來邦の頃其の通譯となり、その通俗圖書頗る歡迎されて物質的には非常に裕福となり、房州保田の鑿日莊といふすばらしい西洋館が何萬圓もかけて作られるやうになつた。

みちのくは春の陽淡し野路を來て雪しろくてる山の條みる

春淺くみどり芽ごもる樹肌さむし雪やまとほく

空にひかれる

春日でるこの村に入りて連翹の黄なる花みぬみちへ明るく

枯草原冬のまゝ黄なる丘のうへ日はぬくみぬるともひとと來ぬれば

日のぬくみ枯草原にしみとほる丘の頂ゆあをき空みる

岩くゆるふるさと道に春くさのむれさく花を我がためつみし

ひかり薄れ夕山のくろさせまり來ぬ野を焼くけぶり空にあをみて

現住所 千葉縣房州程田字本郷

石丸 梧平

イシマルゴヘイ（小）

明治十九年四月五日大阪府豊能郡熊野田村に生れた。號は梅外、名は五平。早稻田大學史學科卒業後京阪の宗教學校、中學校、女學校等に約七年の間教員をしてゐたが大正六年上京以來創作に従つてゐる。「船場のぼんち」「母」「淡潮」「故郷」「嫩草」「母なき兒」「美少年」「お霜の若い頃」「初戀」「結婚生活へ」「夫婦の中」「人間親鸞」及び戯曲「人間親鸞」「受難の親鸞」「藝術と生活

創造」等の著作がある。中でも「船場のぼんち」「人間親鸞」「受難の親鸞」等は氏の作者としての地位を世間に認めしめた名作である。人間親鸞は佛聖親鸞を人間性の方面より見たものであつて、隨分思ひ切つて書いたと思はれるところもあるが、個性尊重の大正時代には時代の傾向といふべきか大に歡迎された。この書の前に倉田百三氏の「出家と其の弟子」が出て素張らしい受けであり、一燈園西田天香氏の「懺悔の生活」が大なる人氣となり親鸞の六百年祭が目睫の間に迫つて來てゐるといふ時で宗教物に人々が目をつける時であつたといふこともこの書の歡迎された一動機を作つた。江原小彌太氏の「新約」や「舊約」なども皆この潮流に棹さして出た際物である。氏は創作小説戯曲の外近時盛に筆を執つて評論「藝術に對する私の態度」「劇的人物としての親鸞」「宗教的感激と人生の充實」「苦悶時代の親鸞」等多くあるが淨土眞宗の僧院生活に經驗ある人のことゝて、宗教もの、殊に親鸞ものはお手のものである。氏は

また近時一種の流行をしてゐる文士の講演等などにも時々出演するやうである。

尙古今未曾有の大慘禍、悲壯なる最期の東京に面接した氏がその悲痛なる體驗を通して得たる人生觀、社會觀、藝術觀、宗教觀等を織り込んで燒野原の文壇に築いた地震小説「最期の東京」も多く讀者を得、氏の自叙傳と言はれる「小説家志願」も評判高い。大正十三年個人雜誌「人生創造」を創刊した。

現住所 東京市外巢鴨町上駒込染井八四七

泉 鏡花

イズミキヨウカ(小)

明治六年金澤市に生れ、謡曲加賀寶生の血を受けた母と、金屬彫刻の藝術的天才のある父の子としての氏は、遺傳的に幼より藝術上の嗜好欲があつた。上京して尾崎紅葉の門に入つて「義血俠血」「豫備兵」「夜行巡查」等を書いて認められ、紅葉の歿後風葉春葉等と共に文壇の重鎮であつたが、自然主義の勃興によつて、氏等の親友社一派は一

しいことであると評判された。尙氏は純粹の日本趣味者と見えていつも和服のみを用ゐてゐるやうである。最近の小説「妖魔の辻占」「黒髪」「身延の鶯」等を見ても氏獨得の天地が感知される。

西園寺陶庵侯の雨聲會にて

花二つ紫陽花青き月夜かな

現住所 東京麴町區下六番町一一

岩 動炎 天

イスルギエンテン(俳)

名は康治、明治十六年九月九日岩手縣紫波郡赤石村に生れ、同三十六年盛岡中學校卒業後京都醫學專門學校に入學して四十一年卒業、直ちに東京日本赤十字社病院に奉職して専ら外科を研究し、四十三年新瀉柿崎病院に轉じ、大正二年山口縣田宇町に移り、同四年郷里岩手縣に開業して今日に至つた。氏は中學生の頃原抱琴の指導によつて句作を始め、秋田の俳人五工、露月諸氏を訪うて俳三昧に入り、更に松根東洋城氏の勧誘によつて句作を楽しんでゐる。氏の句は「日本」「國民」「俳

時大打撃を蒙つた。春葉などはやくもその流行の方に鞍替したが、氏は十年一日の如くその特異の文境を守つて時流に超然としてゐた。「辰巳巷談」「湯島詣」「照葉狂言」「風流線」「高野聖」「白鷺」「草迷宮」「龍蜂集」等は多くの著作中에서도有名なものだ。氏は紅葉門下であるが獨得の文體で世間的ならぬことを材にするので、一部の讀者には熱愛を受けてゐる。作はいづれも妖艶幽怪のもので、その神秘的傾向に於ては、米國のボーや白國のメエテルリンクに肖てゐると稱されてゐる。氏は潤一郎氏とは別の意味に於て他人の追隨模倣を許さぬものがあると言はれてゐる。この種の文を鏡花式などと言つて一時青年の崇拜を受けたものだ。今日でも一部の人に感興を引いてゐる。現代の文士は筆戦だけでは満足しないで盛んに公開の講演をやつてゐるが、氏の如きは時流に超然としてゐたけれども、大正十二年五月五日慶大ホールに開かれた三田文學主催の文藝講演會に出席して水上瀧太郎氏の紹介で登壇したのは珍ら

星「寶船」「濫柿」「懸葵」等に投稿し「春夏秋冬」「新春夏秋冬」「明治五萬句集」「大正一萬句」集等に蒐録されてゐる。

蝸牛の角の上なる虚空かな

行列を囁す青田の蛙かな

提灯に螢も交り飛びにけり

夏川を容れて尙澄む潮かな

風鈴や空ろの心鳴らし打く

天の川平和の空を流れけり

現住所 岩手縣矢幅驛前

故猪 瀨 東 寧

イセトウネイ(畫)

東京の畫家、光容の子、天保九年十月五日下午總國豐田郡三坂新田に生れた。名は恕、字は如心、幼名忠五郎、初專齋と號し、後に東寧と改め、又別に晚香堂、超光騰霧樓等の號がある。氏は性質謹愿で畫を好み、重誓の頃から善く山水を畫いた。初は贊を執つて布治損堂の門に入り漢學を修め、十九歳の時西京に遊び、日根對山翁の門に入り南

宗畫法を學び、二十四歳の時東歸し、後關左の諸州を歴遊して偏く其奇勝を探り、居を下谷區御徒町に定めて世の需めに應じた。時に氏の郷里實兄没して嗣子猶幼いため家道大に衰へた。氏深く之を憂へて恢復をはかつた。西京に在るの日唐宋以下諸名家の眞蹟を臨模して倦むを知らぬ。それで對山翁感嘆して秘訣を授けたといふことである。氏會て官命を奉じて山水圖一幅を描き佛國博覽會に出品し白銀若干を賜はつた。又内國勸業博覽會繪畫共進會、東洋繪畫共進會、工藝品共進會、美術展覽會等に出品して褒狀、賞牌を受けたこと數回ある。三十二年九月巴里世界萬國博覽會出品鑑査會に於て採用され、尋いで日本畫會、懸賞展覽會より一等賞金を得、後又日本美術協會審査委員を托せられ、且つ數年繪畫功勞賞として特別賞狀を贈與せられ、三十三年一月更に又其審査功勞賞として銀盃一個を贈與された。其著に「名蹟撮要」がある。明治三十六年病歿した。

磯田長秋

イソダチヨウシユウ(畫)

名は孫三郎、東京の人、本姓は内田、明治二十二年磯田家に養なはれて其姓を冒した。初め狩野派芝永章に就き、後小堀鞆音に師事して土佐派の畫法を修め、殊に歴史人物及び風俗畫に長ず。第一回文部省美術展覽會に楠公の圖を出品し其後第六回及第七回に褒狀、第八回に入選し、第九回に三等賞を受け、其他各展覽會に於て受賞すること甚だ多い。帝國繪畫協會の會員で舊紅兒會員である。明治三十一年安田靱彦、今村紫紅と紅兒會を起した。

現住所 東京市赤阪區丹後町四〇

磯野秋渚

イソノシユウシヨ(詩)

名は惟秋、字は秋卿、秋渚は其の號であるが、又少白山人、碧雲仙館、玉水廬、杏華齋等の別號がある。文久二年八月二十日三重縣阿山郡上野に生れ、十歳の時始めて藩校崇廣堂に入り、後藩儒

町井台水に従つて學び、十六歳浪華に従つて一家の顛覆に遭ひ、貧中苦學して爾來師承するところ無い。氏ははやくより文筆を嗜み「都の花」「柵草紙」「浪華がた」「浪華文學」「書勢」「書畫海」「書道及畫道」「詩林」「詩苑」「隨鷗集」「雅聲」「文字禪」等に寄稿し、「詩社」「華城吟社」「成春詩社」「桂社」「精華吟社」「玉水吟社」「碧社」「黃梅吟社」等の社中に入出し、野口寧齋、本田種竹、北條鷗處、圓山大迂、西村碩園、内藤湖南、長尾雨山、田邊碧堂、佐藤六石、國分青厓、横川唐陽の諸大家と交り、「浪華草」「五花載詠」「五華留影集」「桂社詩」「玉水題襟集」等の著書を公にしてゐる。

華城僑籍幾年、老卜棲遲獨自憐、

蹤跡不離江上碧、我于春水若爲緣、

乙字丁字鴨頭水、雙松孤松踪一空、

樹薰澁蘭人不見、只堪慰藉是春風。

これは氏が華甲の祝の時に作つたものであつて、之に詩友が大勢寄せたる詩藻を集めて「玉水題襟

集」と題したものの、卷頭に掲げたものである。

今日大阪市に於て多くの書家があるけれども、書風頗穩健で漢字と假名の調和も宜しいところから氏の門に入るもの尠くなく、殊に婦人に於て就學するものが多い。

現住所 大阪市土佐堀通二ノ一

磯萍水

イツヒヨウスイ(戲)

本名は清、明治十三年一月高崎市に生れ、郷里の中學を出で後江見水蔭の門に學び創作に従事し、著作を出したが、脚本「太郎冠者」「二十五座」「栗芋水芋」等はその主なるものである。現に三井銀行深川支店預金係を勤めて居る。

現住所 東京府下南品川東廣町五六五

井田絃聲

イダゲンセイ(小)

本名秀明、明治十九年二月東京に生れ、東京府立第一中學校を出て後に巖谷小波の門に遊び、創作に志して脚本小説の研究に力を用ひ、戯曲「最後

の「小町」小説「京郎」「妻」「姉と妹」等の著がある。現に専ら新聞小説に執筆して居る。

祇園會やまだ晝前を日傘づれ

木枕の堅さや虫の忍び啼き

引抜いたやうに新らしき秋刀魚かな

宿かれば布團短かき夜明かな

そよと吹いてかさりとなるよ竹の秋

落雁や湖畔の夢のあわたし

棟上げや枳殻の花に日の暮るゝ

現住所 東京府下大井町北濱川一〇九二

一氏義良

イチウヂヨシナガ(評)

明治三十一年六月十一日島根縣に生れ早稻田大學英文科に入學し、卒業後美術批評に従事し、「作品の現代的意義」「新創造の歐洲美術」の外、紀行文「香港紀行」等を「解放」「旅行と文藝」及び「東京朝日新聞」等に發表した。尙新著「立體派、未來派、表現派」は現代新興藝術の精密な解説と其代表的作品について説示したもので藝術愛好者

十三年八月歿した。年三十四。

故市村水香

イチムラスイコウ(儒)

儒者、名は謙字は子牧、一に梅軒と號し高槻の人、學を好み藤澤東咳宮原節菴に従遊し、經史に通じ文章を能くし、又詩を藤井竹外に問ひ、京師に住し世に名聲があつた。明治三十二年六月十一日歿す。年五十八。

伊藤鷗二

イトウオウジ(俳)

名は秀次、明治二十四年東京市日本橋區濱町に生れ、早稻田實業學校卒業後一時勸業銀行に勤務したことがある。氏は幼時明治の小説大家尾崎紅葉に接近したことがあつて、當時俳壇一方の宗匠たる紅葉山人の影響感化によつて句作に興味を持つやうになつたといふことである。

盆小鉢秋の日に影を引きにけり

秋の日の木賊より出し蝶々かな

夕戸出や霧こむる山見えぬ山

にとつて必讀の書である。
現住所 東京市外日暮里渡邊町一〇四〇

市川又彦

イチカワマタヒコ(譯)

明治十九年十二月東京に生れ、早稻田大學英文科を出で、外字雜誌「英語世界」記者となり、傍ら脚本の翻譯に従事し、バーナードショーの「武器と人」「男は女にどう嘘ついたか」ガルスウオーシイの「鳩」等を出して居る。

現住所 東京市牛込區北町三

故一條成美

イチジヨウセイビ(畫)

挿繪畫家、信州松本の人、畫は獨學に由り、光琳風に洋畫を折衷したものである。高等師範學校の囑託となつて生徒に教授し、後之を罷め雜誌「明星」等の紙上に得意の筆を揮ひ名を揚げた。某學校の依頼を受けて源氏五十四帖の屏風六雙を畫いた。又硯友社に對抗して起つた雜誌「新聲」の挿繪などを書いて、一時挿繪界の寵兒となつたが明治四

現住所 東京市日本橋區濱町二丁目

伊藤貴麿

イトウキマロ(小)

明治二十六年九月五日神戸市上筒井通六丁目に生れ、大正九年早稻田大學英文科を卒業し、創作界に入つて「獨り占ひ」「天邪鬼」「小町」「鮎」「伊豆より信州へ」「戀愛小話」「カステラ」等の作品を書いた外に評論文「日本文學に現れたる支那文説一瞥」等を發表して居る。また早稲田文學編輯同人として力を盡して居る。氏の作品を早稲田文學に出した「戀愛小話」等によつて見るになかなかの才筆である。妹の美津子が夜の海岸に座り込むあたりなどその光景が頗る印象的で手際よく取扱つて居る。併し幾分才が働き過ぎて居るやうに見える。

現住所 東京小石川區雜司ヶ谷町七番地

伊藤銀月

イトウギンゲツ(文)

明治四年秋田市に生れた。新聞記者として著述家

として暢達透徹の文を書いてゐる。文藝の方面は言ふ迄もなく健康術や靜座法に於ても相當の讀者を有して居る。著書は「詩的東京」「新日本風景論」以下無數にある。詩歌俳句も亦多くあるが知らぬ人が多からう。

玄海漫々望欲迷、潮搖樓下月高低、笑儂踪跡似風鶴、昨在帝京今鎮西。

火の山の火を噴く口の上に立つ

凹める岩に氷らんとする水

明星の沈みたる後みんまみに

明星よりも大きな星

夕暮の悲しき海の靄の底

血を燃やすごと赤きいさり火

虫干や焼け残りたる魔術の書

現住所 東京市四谷區永住町三

井東 憲 イトウケン(小)

本姓は伊藤、明治二十八年八月二十七日東京市牛込區神樂町二丁目に生れ、幼少の時は静岡に於て

過した。後上京して東京正則英語學校を経て、明治大學法科を卒業し、雑誌「變態心理」の記者となり、「鬼の足跡」「放れた生命」「監獄の庭」「亂舞」「豫覺」「父を捨てる」「淋しき母親」等の小説戯曲の外、評論「文壇豫想評」「天文臺より見たる文壇」「現文壇文章評」「女流作家論」「新人出でたるの記」「プロレタリア作家論」「新人の意義」等を雑誌「種蒔く人」「秀才文壇」「小説俱樂部」「熱風」「文章俱樂部」「文明の日」に「新興文學」「女性日本人」等に發表した。

現住所 東京府下北蒲田八四六

故伊藤左千夫 イトウサチオ(歌)

歌人で通稱幸次郎、初春國と號し、四壁居四壁道人は其の前號である。下總成東の人、良作の四男である。漢籍を佐瀬春圃に學び東京に出て明治法律學校に入つたが眼疾のために退學し歸國した。

明治十八年再び上京し、二十二年まで牛乳店に勞役し、二十二年本所茅場町に牛乳搾取業を開き頗

に鳴くきりくす

天地の四方の寄り合ひを垣にせる九十九里の濱

に玉拾ひ居り

春雨のふた日ふりしき背戸畑の葱の青銚並み立ちにけり

今のわれに偽ることを許さずばわが靈の緒はすぐにも絶ゆべし

に鳴くきりくす

伊藤松宇 イトウショウウ(俳)

安政六年十月十八日信州小縣郡丸子町に生れた。名は半次郎、松宇はその號である。氏の父洗耳、俳諧に遊んでゐたので氏も自然俳句をやるやうになつた。洗耳は天保の大家と言はれる田喜庵護物、小菘庵確嶺等を始として、一具、由誓、短草、松什、西馬、逸淵、卓郎など、折々詠草を送つて添削をうけたと言ふから、當時は田舎に於ける一かどの宗匠株であつたものと見える。氏は十四歳の頃より家學をうけ又加部琴堂について學んだが舊派の月並派俳句が纖弱平凡であるのを飽き足ら

る勤勉の聞えがあつた。伊藤並根に就いて茶道を學び又和歌を修めた。時に正岡子規和歌を日本新聞紙上に募集したので左千夫の名を以て應募し、常に選に入つた。依て子規と交り、又歌論を心の花に投じ、自ら馬酔木、アラ、ギ等の編輯を監し晩年小説を綴り、東京日々新聞ホト、ギス等に寄せた。大正二年七月三十日腦溢血に罹つて歿した。年五十。左千夫體軀長大、重さ二十貫に達し眼頗る近視、而も茶道を好み、茶室を建て唯眞閣と云ひ、推敲の間に苦茗を啜るを娛とした。

世に薄きえにし悲しみ相嘆き一夜泣かんと雨の日を來し

此の水にいづこの鶏と夜を見やれば我家の方にうべやおきし鶏

世にあらむ生きのたづきのひまをもとめ雨の青葉にひと日こもれり

元の使者すでに切られて鎌倉の山の草木も鳴り震ひけん

うからやから皆にがしやりて獨り居る水づく庵

なく思つて、革新運動を始めた。それは二十三年まだ子規居士一派の目が覺めぬ頃であつて、森猿男、片山桃雨、石井得中、石山桂山等と共に「椎の友」といふ團體を結び、二十五年十月始めて子規と會合し、相提携して斯道の復興に力めた。氏は實業の餘暇にやつてゐるので子規のやうに専心之にかゝることが出来なかつた。遂に子規の名を撞にせるに反し、氏は秋聲會の一客星となり終つたのは惜しい。即ち中心勢力は子規ほどなかつたが、東京毎日新聞、文藝俱樂部、俳聲、卯杖、高潮、初冠、俳味、俳諧雜誌、印刷世界、ニコニコ俱樂部の選者として活動し、四十四年六月より雜誌「にひはり」を發行して主幹となり、現に全力を注いでゐる。氏は松宇の外操居、歳寒子、榻琴書屋主人と號し、又深川では巽叟、牛込では牛門隱士と稱してゐる。著書には「時雨記念」「中興五傑集」「附合作法全集」「蕪村几董付合全集」「春鴻句集」「保吉句集」「闌更句集」「類題七部集」「あがたの落穂」等數多い。氏の句に

春雨やあひく傘に小提灯
陽關を出づる記念やさし柳
武藏野に横はりけり天の川
弦月や木賊の風のそゞろ寒
新そばや月の更科江戸の汁
半弓に草ふり分つ露時雨
焼石にまじる浅間のあられかな
冬の梅ぬくや江南第一枝
などいふのがある。氏はその藏書三千を帝國圖書館に寄贈して明治俳壇のために盡すところまた少くなかつた。
氏はまたその他の嗜好として松花堂昭乘の書風を慕ひ、南畫文人畫をも學んでよく描き、書畫の鑑定についても一隻眼を有してゐる。現に澁澤倉庫の支配人、生秀館及株式會社東京館の重役である。
現住所 東京市牛込區東五軒町三〇

故伊藤小坡 イトウシヨウハ(畫)

京都の有名なる關秀日本畫家。四條派の大家谷口香嶠の門に學び、文展へは第九回に「製作の前」を出して三等賞を得、第十回に「つゞきもの」を出して大に名聲を揚げた。爾來上村松園に次いで關秀畫壇中に鳴つたものである。

伊藤深水 イトウシンスイ(畫)

日本畫家、名は一、明治三十一年東京深川に生れた。十四五歳の時より錦木清方の門に入つて現代浮世繪を學び、院展第一回に「棧敷の女」第三回に「乳しぼる家」を出し、文展へは第九回に「十六の女」を出した。其他選畫會、郷土會等にも出品があり、新聞、雜誌の挿畫家として今や第一流の名を得てゐる。郷土會評議員。
現住所 東京府下大井町南濱川一七八二

伊東忠太 イトウチユウタ(畫)

慶應三年十月二十六日山形縣米澤市坐頭町に生れ
明治二十五年東京帝國大學工科大学建築學科を卒

業し、大學院に入つて研究を続け、明治三十四年二月工學博士の學位を受けた。三十二年東京帝大の助教となり、三十九年教授に任ぜられ今日に至つた。その間三ヶ年間支那。印度、土耳其に留學し、外國に留學研究せしこと前後七回の多きに及んでゐる。氏は本職に於て我が邦の權威なばかりでなく、漫畫の妙は實に他に其の類を見ない。著書に「法隆寺建築論」「北京紫禁城の建築」「阿修羅帖」「余の漫畫帖から」等があり、目下帝室博物館學藝委員、古社寺保存會委員、議院建築局顧問等を兼ね斯界の權威である。氏の専門作品として有名なるものに東京不忍辨天の天龍門、明治神宮社殿、新瀉縣彌彦神社、山形縣上杉神社、名古屋日蓮寺拂塔等數十の多きに達してゐる。内大臣法學博士平田東助は叔父、醫學博士伊藤祐彦は實兄、畫伯平田松堂氏は實に其の從弟である。
現住所 東京市本郷區西片町一〇とノ八號

故伊藤聽秋 イトウチヨウシユウ(詩)

氏は淡路の人、星巖翁晩年の門弟であつて、性頗る豪放豁達、酒に耽り物に拘泥しない。詩は尤も七絶に長じて氣格風韻の頗る奇偉なものがある。明治二十五年物故した。今その詩集「聽秋書閣集」(上下二卷)より數首を次にあけて置く。

入紀

一道芳川流向西、 殘山剩水路高低、
南朝王氣依然在、 處々春風野雉啼。

出都留別賴三樹諸門人、

白髮天涯人倚闥、 此身不可老江湖、

小雨殘楓冬十月、 蕭然行李出皇都、

寫懷

來鴻去燕自悠々、 病骨支離帶帝州、

午夜霜鐘魂欲斷、 西風三十六峰秋。

同竹外翁雨中鳴門觀濤

丈大何魚躍有聲、 阿山岬立淡山橫、

好奇男子寧辭險、 風雨鳴門載酒行。

伊藤鐵女

イトウテツシヨ(畫)

の戯曲作品及び有樂座子供日のために上演用とせる童話劇數十篇ある。目下舞臺協會の舞臺監督としてその演出に従事してゐる。

現住所 京都市聖護院川原よしのや

故伊藤轡軒

イトウユウケン(儒)

儒者、名は重光、字は德藏、東峯の三男、家學を繼いで名があつた。維新後は宮内省に出仕し、晩年に辭して家居し、育英を以て娛となした。又和歌を好み、時に秀句があつた。明治四十年七月二日歿した。年七十七。

伊藤快彦

イトウヨシヒコ(畫)

洋畫家、號は若翁、家は代々若王寺神社の神官である。慶應三年京都に生れ、明治十八年京都府立畫學校に入り、二十一年卒業し、同年上京して畫伯小山正太郎の門に學び、後、原田直次郎の鍾美館に入學して二十五年十二月に至つた。二十三年第三回内國勸業博覽會に出品して褒狀を得てより諸

文久三年八月小石川に生れた。古仙と號し伊藤利量の女である。幼より畫を好み慶應二年土佐派を學び古法を慕掌した。明治七年以來京濱及水戸地方に遊び二十二年女子成立學校畫學教員となり後淺草成工學校に轉じた。二十六年米國コロンプス萬國博覽會に音樂學校の大幅を揮毫し又共進會其他へ出品して屢々褒賞を受けた。又月並御歌題の雨中櫻の圖を美術協會へ出品して御用品の榮を擔つた。

現住所 東京市小石川區水道端町一ノ四四

伊藤松雄

イトウマツオ(戯)

明治二十八年一月長野縣松本市に生れ、東京富士見小學校、東京開成中學校を経て早稻田大學英文科に學び劇の研究をなして嘗て有樂座御伽演劇部國民座、新文藝協會等に舞臺監督となつた事がある。郷土戯曲集「危急」翻譯戯曲「夜」「カラマーズ兄弟」の著、外に「萬花鏡」「歳のなごり」「風流の義政」「天國にゆけぬ一群」其の他十數篇

所の展覽會に受賞すること十數回、又屢宮内省御用を拜命した。三十九年より關西美術院教授に任じて今日に至る。文展へは第一回に「應匠」第二回に「大奥の女中」を出し、四十五年、二樂莊の壁畫を描いた。門下に中林儂、淺野快泉等がある。

現住所 京都市上京區冷泉若王子町五一

伊東六郎

イトウロクロウ(譯)

明治二十一年七月東京麴町區富士見町に生れ、第六高等學校を経て東京文科大學英文科に五年間在學して専ら翻譯に従事し「アナテマ」(アンドレイエフ)「女天下」(チエホフ)「バツドボーイ日記」等の翻譯を出して居る。

現住所 東京市下谷區西黒門町二三

故稻垣碧峯

イナガキヘキホウ(畫)

名は克、字は子復、通稱藤兵衛、碧峯は其號である。文化十年富山舟橋今町に生れた。人となり間

靜寡言常に忠信篤敬の方であつた。書を海屋翁に學び、古法帖及古人の眞蹟を集め、研精懈らず、天保元年八月京都に上り歳十八の時浦上春琴の門に入り畫を學んだ。翌年三月春琴に北游に随つて歸國し、三十歳の時町年寄役に擧げられた。けれども感ずるところあつて固く之を辭して隱遁した。ある日田能村竹田が春琴に向つて其高弟を尋ねたら、二三人よい門人が居るけれども、中でも碧峯こそ將來新機軸を開いて大に名を成す器であると賞し、海屋も亦氏を推賞して措かなかつた。

氏隱遁後は専ら讀書及書畫の臨摹に耽り、書畫共に高雅其堂に達して殆んど和臭がない。この腕をもちながら都に出でて大にその後技を振はないのを人は惜しんだ。後屢々京師に遊んで竹田、梅逸春琴、百谷及日野鼎哉、小石櫻園等の間に交り厚うした。氏はまた書畫の鑑識に長じ貫名海屋は常に之を稱した。一日春琴を訪問した時古畫の羅漢渡水の圖を掛けて置いたら、氏は一見してその名蹟を激賞して措かなかつた。春琴もその眼識に

敬服したといふことである。元治元年長崎に遊び清人王克三、徐雨亭及び逸雲、鍊翁、五岳等と翰墨の交りを結んだ。明治六年京阪を歴遊し、次いで東京に出て名聲益高く、明治十二年八月十二日病歿した。碧峯夙に勤王の志を抱いて高桑菊陀等と勤王論を唱道して藩儒の蒙を破つた。頼三樹三郎北遊の途次相見て大に歡び、遂に數月の長い間こゝに淹留したといふことである。

稻毛詛風

イナケソフウ(評)

名は金七、明治二十年六月山形縣東置賜郡漆山村に生れた。十四歳の時から小學教師を奉職したが二十歳の時上京して早稻田大學に入り、毎日大抵二食にして苦學を続け四十五年英文科を卒業したと言はれるほどの篤學者である。特に半途で入學したのであるが遂に素志を達してその哲學科を出た。卒業論文として出したのは四百枚の長篇で「人格研究」といふのであつたが、其の着想、見識表現等に於て教授を驚かすものがあつた。のち

「若き教育者の自覺と告白」を出して名をあげ、つゞいて「オイケンの哲學」「現代教育者の眞生活」「生の創造と教育」「愛し得ざる悲哀」等を出し、「批評論」「人生と教育」及「教育者の哲學」「西洋哲學史」「哲學入門」等を著した。もと「教育實驗界」の主筆として文藝界以上教育界に認められてゐたが、今は「創造」を主宰して氏の卓越せる創造の哲學觀、人生觀、社會觀等を發表してゐる。

現住所 東京小石川區小日向臺町三丁目七七

故稻葉

鯤 イナバコン(書)

女書家、越後岩船郡山邊里村の人、通稱は愛子後鯤と呼んだ。父名は覺世通稱を行衛と云ひ醫を業とした。行衛故あつて居を武州八王子に移した。鯤幼より女子の嬉戯をなさず日夕毫を舐り字を書いて遊ぶので父母之を奇とし試に古法帖を示したら、喜んで之を模した。年五歳の時神通方便力の五大字を書し産土神高屋權現に奉納した。文政五

年父母鯤を連れて江戸に出で、東海女史と號し、人の需めに應じて揮毫せしめた。偶々京都東山の道本和尚江戸に到つたので鯤父母に伴はれて之に會つた。道本其書を見て感嘆し父の請を入れ門下に加へ臨本を與へた。文政八年鯤京都に上つた。諸王攝籙往々召して觀遂に光格上皇の覽に入り禁密酒杯等を贈つた。時に山陽居を京都三本木に卜し名けて山西莊と云つた。父行衛鯤の書を以て山陽を訪うた。山陽乃ち七絶を作つて之に與へた。鯤後諸方を歴遊し大阪に抵り父の病に苦しむに會ひ看護到らぬなかつた。尋で秋田藩の用達商岡村與七郎に嫁し、夫を扶け家政を理めた。廢藩の後家道頗る困難となり鯤復書を賣りて家計を助けた。明治二十一年一月十一日病んで大阪安治川雜賀氏の家に歿した。年七十二。

犬養健

イヌカケン(イ劇)

明治二十九年七月東京牛込に生れた。遞信大臣犬養木堂氏の長子で、白樺派の詩人である。學習院

を経て東京帝國大學文科大學に學んだ。新しき村電化事業後援の爲十一年十月二十日有樂座に現代劇を上演して氏自身も舞臺にたつた。脚本「家鴨の出世」等の外あまり多くのものを發表してゐないが、將來に大なる望を囑されてゐる新進作家である。

現住所 東京市外東中野一七〇〇

犬養 毅 イヌカイツヨシ(書)

安政二年四月二十日岡山縣平民犬養源左衛門の二男として生れた。父は水莊と號し板倉藩の郷士である。毅幼い時森田月瀬翁の門に遊び、長じて犬養杉窓に就いて學んだ。明治七年上京して藤田茂吉の知遇を得、慶應義塾に學んで卒業の後報知社員となり西南の役に通信員として其の名漸く顯れた。時に年僅かに二十二歳であつた。同十四年擢んでられて統計院權少書記官に任じ正七位に叙せられたが大隈侯冠を掛けるに及んで連袂職を辭し再び報知社に入り立憲改進黨の組織に従事した。

後東京府會議員に選ばれ十八年朝野新聞に入り更に轉じて尾崎行雄等と報知社に執筆した。二十三年國會開設以來選ばれて衆議院議員となつて初期以來の代議士である。三十一年憲政黨内閣成るに及んで文部大臣に任ぜられ、正三位に叙せられた。幾くもなく辭職して憲政本黨總務委員として専ら黨務に執掌したが立憲國民黨を創立して其の領袖となり大正二年桂内閣に反對して憲政擁護を唱へて尾崎行雄と共に憲政の神とまで崇められた。爾來政友會と運衡して所謂友黨關係を結んで大隈内閣に極力反對した。大正五年寺内内閣の起つた時之を彈劾して議會の解散を招いたが、六年外交調査委員會の設けられた時國論統一の主張の下に其の一員となつて政界の一角に端脱した。後思ふ所あつて國民黨を解黨して革新俱樂部を組織し其中心となつて在野政治家中重きをなしてゐる。氏は政治家として既に不朽の名を成してゐるが入木道に於て實に其堂に達してゐる。其の政論に於て氣骨稜々鋭利人を刺すやうな辛辣味は其筆鋒に

あめつちの分れし時ゆ初日の出

大晦日曆が無いと秋の暮

造作を楯に店子の去かばこそ

議事堂を出ると浮世の高利貸

繩暖簾鍋は鮪に鱈汁

辻相撲青天井の國技館

南洋へ兎が跳ねる春になり

現住所 現住所 東京市外杉並町馬橋原五四七

故井上 毅 イノウヘコウシ(文)

幼名は多久馬、熊本の人、梧陰と號し、幼少より學を好み木下犀潭の門に入り俊才の名早く藩中に高かつた。明治三年東京に出て大學少舎長となり後司法省に奉職し、江藤新平に隨つて歐洲に航し又臺灣談判のために大久保利通辨理大臣に隨つて清國に航し、諸官を歴任し法制局長に任じ、法律の起草に功勞が多い。又臨時帝國議會事務局總裁より樞密顧問官文部大臣に進み、正三位勳一等に陞り、二十七年八月病のため辭職し、二十八年子

も現れ、和氣なく意氣頗る軒昂なるものがある。世人は氏の斷簡零墨を得ても珍とするのは尤もである。氏の筆論硯論に於て聽くべき多くのものがあるのは、寸暇なき政客の餘技としてよく之ほど迄に通じたものだと思はせる。圍碁に於ても政治家中恐らく其右に出る者がなさうである。長女操は支那全權公使芳澤謙吉氏の夫人として令名があり二男健氏は白樺派の文章家として將來に望みを囑せられてゐる。

現住所 東京牛込區馬場下町三五

井上劍花坊 イノウヘケンカボウ(川)

現代の新川柳が、江戸時代の前句附や狂句の約束から起越して、獨立の詩となつたのは、明治三十七年頃氏が「日本」新國誌上新題柳樽欄を設けて、川柳改革の曉饒を鳴らした結果である。氏は旅行癖があり至る處で得意の川柳を作つてゐる。書も亦極めて達筆雄勁で大いに見えるべきものがある。

爵を授けられ、同年三月十三日肺患にて薨去した。年五十二、氏は能く文章を綴り、又能書の聞えも高かつた。教育勅語を始め勅令憲章の草按審査その力によつたもの尠くない。見聞するところ常に之を筆記分類して抽斗に投じ備忘に供する等其用意の周到實に驚くべきものがある。著書「梧陰存稿」世に益するところ多い。

偶成

春寒料峭夢易驚、 耿々心兼燈火明、

舉世舟中學大學、 幾人老去負平生、

風來蒲柳難堪弱、 水到溝渠朱告成、

俯仰豈無求友感、 還聞窗外曉鶯聲。

同

人負於花々負人、 夢迷嵐峽又芳津、

人生第一不平事、 苦雨凄風過一春、

辭官作

人事看來新又新、 花開花落五十春、

殘生好向江湖托、 一半功名附後人。

井上巽軒

イノウヘンケン(文)

名は哲次郎、安政二年十二月二十七日福岡縣平民富田俊達の三男に生れ、明治四年十月長崎廣運館に入り、米人に就いて英學を學び、八年上京して開成學校に入學し、後東大文科大學に入つて哲學政治學を修めて十三年卒業し、十五年同大學の助教に任じ、十七年獨逸に留學して二十三年八月歸朝し教授となつた。翌二十四年文學博士の學位を授けられ學習院囑託教授を兼ね、三十年五月萬國東洋學會參列の爲佛國へ差遣せられ此時文科大學長に補せられた。大正十二年停職年齢に達したので大學を退いたが名譽大學教授の榮譽を荷つた。長女ユキは文學博士吉田熊次に嫁した。氏は幼時法學博士添田壽一氏と共に福岡の二麒麟兒と言はれた程の天才で詩歌哲學文學宗教等行くとして可ならざるなしである。明治十五年の頃外山博士等と新體詩を作つてその模範を示したり落合直文の孝女白菊を長漢詩に翻譯したりしてゐる外

眞理

眞理 聲明若夜光

東西同照共煌煌、

不容昧者漫標異、

一貫人天道有常

謁華盛頓墓

獨立謀成不伐功、

行藏自在是英雄、

于今赫赫存餘烈、

豈比蹉跎奈破翁

氏は「雅文會」の編纂員の一人であるから、其の詩は「大正詩文」に寄稿されてあるが、「斯文」にも發表することがある。

現住所 東京小石川區表町一〇九

井上通泰

イノウエミチヤス(歌)

慶應二年十二月二十一日兵庫縣平民松岡操の三男に生れ、明治十一年井上碩平の養子となつた。二十三年東大醫科大學を卒業して同大學眼科助手を命ぜられ、二十六年兵庫縣立姫路病院副院長となり、二十八年第三高等中學校教授に任じたが後官を辭して井上眼科病院を設立し其院長となつた。三十七年九月醫學博士の學位を授けられたが氏は

孔子の研究や日本倫理國民道德に關する著書がある。獨逸語の辭書も廣く行はれてゐる。近來社會思想の勃興せる時に於てどこまでも家族主義國民主義を押し通さうとして新道德を説いてゐるが、其の説明は牽強に思はれるほど傳統を重んずるものだから、新しい書物を読み新しい思想に多少觸れてゐるものはあまり喜ばない。晩年の人氣が青壯年の如くでなくなつたのはこゝにある。併し新歸朝者が老博士を訪問するとチヨイサー、マコーレイ、カーライル等の諸文豪に就いて滔々まくし立てるのを見ても文學に造詩深いことも雄辯に於て建部遜吾博士高橋月山博士と共に評判のよい方であつた。著書に「内地雜居論」「哲學辭彙」「勅語衍義」「巽軒詩鈔」「獨逸語辭書」「國民道德」等數多い。

倫敦卽事

鴻爪無痕萬感生、

尋思年月不分明、

一天仍舊帶微黯、

春日雨多龍動城

眼科醫の博士としてよりも御歌所の寄人として一般によく知られてゐる。門人頗る多く出藍の才ある者亦少くない。書は歌人につきものゝやうに思はれてゐるが氏は獨り悪筆と稱して色紙短冊に書かぬことになつてゐる。政治家に於ける大隈侯と同じく其書を見た者は稀なさうだ。御宸翰や國寶的稀本の藍紙萬葉の斷簡を初め名家自筆の稿本や罕觀の古版歌書凡そ五千卷及歴代巨匠の懷紙詠草短冊等を収めた南天歌莊文庫が大震災火災のために皆焼いてしまつたのは松の家文庫の焼失と共に一般から惜しく思はれてあつた。尙前貴族院書記官長柳田國男、海軍大佐松岡靜雄、東京美術學校教授松岡映丘は博士の實弟であり。柳田氏は田山花袋等と共に文學界の同人であつた。

曉山雲

國原はかけもからすもなくらめど雲靜なり峰のかみがき

社頭曉

世のゆめをさます使と群鴉かきのもりより四方

外、評論「新らしき民謡の時代へ」「詩壇雜感」散文詩「情慾」等を雑誌「大觀」「新詩人」「日本詩人」「新詩潮」等に出し、外に「かなりや」「淑女畫報」「文華」「金の船」「金の星」「サンデー毎日」等に詩及び童話を發表して盛んにその活動振りを示して居る。

現住所 東京市外池袋一〇三三

井上頼國

イノウヘヨリクニ(國)

三河國碧海郡宇頭村の郷士江上民部頼正の長子、天保十年四月一日江戸神田松下町代地に生れた。幼名は次郎、後に大學と改めた。嘉永三年通稱を肥後と改め、名を頼國と稱した。高崎藩儒犬塚義章に就いて漢學を修め、伯隨又厚載と號した。又更に劍柔術及兵學を修め安政元年相川景見、香川景樹の門人に就いて和歌を學び、大窪一風に一節切を學び一賀と號した。文久二年平田鐵胤翁について皇典を攷め、家の名を神習舎と號した。元治元年權田直助翁に就いて皇國醫道を修め、明治二

にちりゆく

現住所 東京市麴町區内幸町一ノ三

井上康文

イノウヘヤスフミ(諱)

本名は康治、明治三十年六月二十日神奈川縣小田原幸町一ノ一に生れ、幼少の時より病弱であつたが爲に勉強することを禁ぜられたので、學校も文藝方面に出ようとするには普通選びさうもない方面即ち東京藥學校を出で、新聞記者、職工、技師放浪生活を経て大正八年作家小川未明氏の紹介により文藝書店春陽堂に入つて「新小説」の編輯に従つてあつたが、同九年五月記者生活をやめて専ら時の創作を事として現在に至つた。詩集「土に祈る」童話集「銀の小鈴」福田正夫氏との共著童話、民謡、詩、選集等の著書があり「新詩人」の編輯に従つて居る。

尙最近の作としては詩「天上へ」「スタヂオ」「病める子の爲に」「深夜」「薄暮に燃える情熱」「天上警告者」「憧憬に生きる」「都會の畸形兒」の

年通稱を鐵直と改め、七月大學中助教を拜し次で皇漢醫道御用掛を拜命し、後教部權大錄大神神社少宮司大講義等に補せられ、明治十年權少教正となり、修史館に出仕し、爾來宮内省御用掛、圖書寮御用掛、御系譜課長等に歴官した。氏幼より學を好み、賦性強記専ら書冊の蒐集に力を盡した。安政二年の震災に遭遇したが銳意集藏に力めて四萬餘卷の多きに及んだ。氏曾て皇典講究所の創立に力を盡し、國學院、大八洲學校等に講師となり家塾神習社を設けて教育した。古事類苑の編纂に與つて力を盡し、後宮内省圖書寮に奉職した。伊勢神宮皇學館教授の國學者井上頼文は翁の長子である。頼文古書の講義書を著し、また歌も巧である。新らしきひと節そはむ竹もなほ年の暮るゝはをしげなりけり

市に賣る梅や桃やのかすみてもなること多き御代の夏かな

(學統)

本居宜長—平田篤胤—平田鐵胤—井上頼國—井上頼文
權田直助

故猪熊夏樹 イノクマナツキ(國)

讃州大川郡白鳥神社神官の息、國學者である。幼時から弱いので舊臣の家に養はれ傍ら藩の碩儒友安三冬友部方秀等に就て學問した。氏は人となり極めて樸訥であるから、一見愚人のやうであつたが、其實諸學に通じ且つ雜藝をよくした。しかも一日として讀書を廢しない。ある時佛敎の書物を讀んで大に悟るところがあつたものと見え、爾來遊藝を廢し専心國學を研究した。のち上書して白峯神社の造營が出来上り遂にその神官となつた。明治五年伊勢太廟神樂の改正取調を命ぜられ、立案するところ頗るよろしかつたので採用された。今日行はれてゐる祭典の儀式はこれである。後滋賀縣知事籠手田安定は縣人に國學を勸めようとして夏樹を聘した。十八年京都府師範學校二十三年同

と新日本畫協會を起した。太平洋畫會々員である。

現住所 東京府下世田ヶ谷下町二三

伊原青々園 イハラセイセイエン(劇)

本名は敏郎、明治三年四月二十四日松江市に生れた。松江尋常中學校卒業後第一高等學校に這入つたが中途で退學して都新聞記者になつた。演劇上の智識では生字引の稱があるほど精通してゐる。「日本演劇史」「近世日本演劇史」「市川團十郎の代々」の外數多の小説脚本を著した。新演藝や演藝畫報には始終氏の文を見る。文士劇とか劇評家芝居とかいふものが可なり流行したのだが、森鷗外博士の弟で劇通であつた故三木竹二氏とは二人共淫するほど觀劇を好み、本職の役者達が煙たがるほどの辛辣な劇評家でありながらついで自身舞臺に乗り出したことはないといふので其側の人々には評判高かつたものである。都新聞調査部長現住所 東京赤坂區青山南町五丁目三七〇

七六

第一高等女學校に奉職して終に病歿した。これより先三十九年一月宮中御開講の時、七十二歳の老軀を以て御召に應じて御前に古事記を講じ、爾後年々進講の榮を蒙つた。又賀陽宮久邇宮に伺候して進講の榮を得た。四十五年七月先帝の御不豫を聞き、恐懼措くところを知らない。宅中に齋壇を築いて、七十八歳の高齡に拘はらず日に五回の水垢離を取つて御平癒を祈つた。これがため遂に感冒にかゝつて肺炎となり、治療中御崩御の悲報に接し、病俄に革つて八月二日逝いた。翁は源氏物語の研究最も深くその湖月抄評注の如き後人を益すること甚大である。息淺磨家學を繼いで居る。

茨木不仙 イバラキフセン(畫)

名は猪之吉、明治二十年十月靜岡縣富士郡に生れ、大家淺井忠に就いて洋畫を學び、四十年東京博覽會に出品して受賞し、文展へは第一回に「深山の夏」第五回に「北國街道」院展第二回に「雷鳥境」を出した。大正七年二月、下村爲山、丸山晚霞等

伊福部隆輝 イフクベタカテル(評)

明治三十一年五月鳥取縣八頭郡智頭町に生れ、文藝に志して専ら評論壇に活躍し、「佐藤春夫論」「芥川龍之介論」「豊島佐藤二作家」「創作批評私議」「反抗を通じて見た豊島氏の藝術」「シヨール藝術の流行」「根津權現裏と其の作者」「詩人論」「最近批評壇の人々」「新興文學の美とその要素」等を雜誌「新潮」の外數多の新聞に發表して居る。

現住所 東京市外瀧野川町字西ヶ原五五三

故菱 文 イブン(俳)

通稱は渡邊太餘文と言ひ園亭五世又は何論亭等の別號がある。俳匠卓文の門人であつて、嘗て外國貿易其の他の事業を目論んで數回アメリカに渡航したが、のち俳道に遊んで、連句の妙を得た。性旅行の癖があつたので暇あれば東行西往し、遂にその足跡は殆んど全國に洽しと言はれた。「俳諧

七七

新題林」「俳諧正式鑑」「俳諧手ほどき」「梅香集」等俳句に關する著書多く、又滑稽文を善くし狂歌都々逸をも作り、號を南猫房戀阿彌と言つてこの方面に於ても大に活動しつゝあつたが、大正三年五月二十八日年七十四歳で病歿した。

今泉定介

イマイズミテイスケ(國)

奥州白石藩士今泉傳の三男で文久三年二月生れた。竹の舎主人また西江釣徒と號した。夙に和漢の學を好んで明治十二年東京に出で神道大教院に入つて國學を研究し明年丸山作樂について國書を學び十五年帝國大學古典講習科に入學して十九年に卒業した。後文部省の囑托を受けて古事類苑の編纂に従事したが人材教育の任に當らうとして斷然職を辭し、私立中學校を麹町に創設し經營慘憺終に二十七年に至つて東京府の公立中學校となした。今の城北中學校が即ちこれである。氏自ら其校長となつて基礎立つた後三十一年去つて専ら國學院の成立を企畫して遂にその學監となり傍ら著

七八

述に従事した。其著に「勅語衍義」「百家說林」「日本歴史」「中學國文」「平家物語講義」「故實叢書」等あるが明治時代の學生がこれらの著作を通じて開發されたことは少くない。大正十三年の春より全國各地を講演して國民精神の養成や國體の精華とを説いてゐる。

先帝陛下の神去りたまへるをいたみ奉りてほかにまたすべもあらねば大前にたゞぬかづきて泣きに泣きけり

現住所 東京市小石川區西江戸川町一

今泉雄作

イマイズミユウサク(畫)

嘉永三年六月十九日江戸に生れた。父は今泉元長といふ幕臣であつた。畫を市川其融、南畫を坂田鷗客に學び明治十年佛國に留學し、里昂博物館に五年間聘せられた。其間に梵語を修め好古學等を研究して十六年歸朝した。爾來文部省御用係、専門學務局に勤務し、二十二年十二月東京美術學校教授を兼ね美術工藝學校長兼教授等を拜命し、尋

現住所 東京市本郷區天神町一六

今井彦三郎

イマイヒコサブロウ(國)

號は斐己、元治元年二月九日宮城縣平民良英の長男として生れた。明治十年上京して武を學び次で學を芳野金陵、島田篁邨等に修めて熊本紫雲學舎の學監に選ばれた。十九年東大文科大學古典科を卒業して直に秋田師範學校教諭に任じ千葉宮城の師範學校並に中學校等の教諭を経て二十九年第一高等學校教授に轉じ傍ら宗教大學教授を兼ねて今日に至つた。氏は孜孜として研究し他の學者のやうにブックメーカーをやらぬから博士論文でも書いたら學位を得ること難くあるまい。同じく古典科を出た人で萩野由之や松井簡治等は既に博士號を克ち得てゐる。

現住所 東京本郷區駒込淺嘉町九九

今尾景年

イマオケイネン(畫)

名は景年、別に聊自樂居の號がある。弘化二年八

いで東京帝室博物館美術部長、美術審査員となり、古社寺保存會委員、美術協會特別會員、國華俱樂部幹事、大倉集古館長等を兼ねてゐる。其著にかゝる「書畫骨董集」は數奇者の好參考資料である。

現住所 東京下谷區中根岸町八

今井爽邦

イマイソウホウ(畫)

名は和一郎、醫師玄周の孫で南宗畫家翠湖の男、號を六合庵と稱す、明治五年六月十二日新潟縣南蒲原郡飯士山下に生れ、橋本雅邦、下條桂谷に師事し其畫法を研究して人物山水花鳥を能くし、明治三十二年以降青年繪畫展覽會、東京博覽會、第五回大阪博覽會、其他諸會に出品して褒狀銅牌を受けたことが數回である。明治四十五年美術研精會に雲水を出して御用品となつた、美術研精會、明治繪畫會の委員、帝國繪畫協會、二葉會の會員の外日本美術協會の日本畫部の幹部格で協會派十二組の一人であつて、東京大震災後は芳川寛治伯の後援を得て多くの作をする事になつた。

七九

故今戸蝸牛

イマドカギエウ(彫)

名は精司。明治十四年六月大分縣宇佐郡柳ヶ浦に生れ、田中主水、山田鬼齋、高村光雲の諸大家に就いて學び、後東京美術學校に入つて明治三十五年彫刻選科木彫科を卒業した。三十三年、日本美術協會で褒状を得、三十四年東京彫工會で褒状を得た。大正八年十一月年三十九で歿した。

今西吉雄

イマニシヨシオ(記)

明治二十四年十一月二日大阪市東區高麗橋詰町十三番地に生れ、大正七年早稻田大學英文科を卒業して直ちに「報知新聞」に這入り社會部記者となつた。大正十一年の末東京朝日新聞社に轉じ現にアサヒ・グラフ演藝記者をしてゐる。最初實業之日本社後に博文館發行の諸雜誌に寄稿したが今は博文館以外のものには執筆しない。嘗て報知新聞の社會部編輯主任たること三年、文壇及劇壇の交友甚多く餘技として繪畫を玩んでゐる。

月十二日京都衣柵川上ル町に生れ、天資畫才に富み、夙に鈴木派を修め、殊に花鳥の描寫に妙を得た。爾來内外諸種の展覽會、博覽會等に出品して金銀銅牌、褒賞状を受くること實に擧げて數へること出來ぬ。明治三十七年帝室技藝員に、同四十年文部省美術審査員に擧げられた。帝國繪畫協會の名譽會員で、京都後素協會委員となつた。現に京都市六角新町西入に住む。「景年」「花鳥」「畫譜」「養素齋」「畫譜」等の著があり、門下に木島櫻谷、上田萬秋、松村梅叟、梅村景山、小林吳嶠、芝景川等多く秀才を出してゐる。明治四十四年伊太利萬國博覽會に出品して賞金を得、大正八年帝國美術院會員となつた。大正十三年四月高島屋美術部主催の翁八十歳展覽會には二十餘點を出品して老いて益々矍鑠たる意氣を示し「溪山初夏」「新緑懸泉」「燕子花」「青楓懸瀑」といふごとき諸題に例の巧妙なる松や波を描いてゐる。

現住所 京都市六角新町二八

現住所 東京市芝區車町八三

故今村紫紅

イマムラシヨウ(畫)

名は壽三郎、神奈川縣の人、明治十三年十二月横濱尾上町に生れ、十八歳の時上京して容齋派の大家松本楓湖の門に入り、三十一年、安田靫彦等と紅兒會を起し、四十四年、第五回文展に「護化鈴」を出し、第六回には「近江八景」を出して二等賞を得た。大正三年日本美術院の再興と同時に其の同人となり、印度に渡つて「熱國の卷」を第一回院展に出品した。氏は又歴史畫を描き、中頃依宗達に私淑した。「近江八景」に至つて俄に特種な新手法を發揮し、新南畫の境域を拓かんとし、第二回院展に「入る日、出る月」を出したが、大正五年二月二十八日市外目黒の居に歿し東京下谷玉林寺に葬つた。年三十七。右に擧げたるものの外彼の代表作には、大觀、觀山、未醒と合作の「東海道五十三次繪卷」及「桃源」等がある。又死の前年、彼は赤燿會を起して牛耳を執り、速水御舟

牛田雞村、富取風堂、小茂田青樹、小山大月、黒田古郷、岡田壺中等の少壯作家を誘導した。

入江爲守

イリエタメモリ(歌)

明治元年四月二十日實は伯爵冷泉爲系の叔父であるが入江爲福の養子となり八年家督を相続した。十六年殿掌を拜命し、十七年子爵を授けられ、貴族院に數回選ばれた。又二回御歌所の參候となつたが後東宮侍從長に任ぜられた。男爵高崎正風氏の後をうけて御歌所長を兼ねて現に其職に居る。子の生家は所謂歌道師範家の名流であるから短歌は二條家と共に家のものである。それ故に堂上派歌人に其の人乏しき今日子を措いて御歌所の長となり得る資格のあるものは先づ無いと言つてよからう。夫人信子は伯爵柳原義光の妹であつて銅御殿の夫人として問題を惹起した白蓮伊藤樺子は夫人の令妹に當るのである。

曉山雲

ふじの根にはや横雲のみえそめぬ世はまだくら

き曉のそら

社頭の曉

すぎむらはまだ夜ぶかきにみづがきの御門のと
びらしらみそめたり

現住所 東京牛込區余丁町七八

入澤 晰江

イリサワセキコウ(書)

名は賢、字は子和、別に江東碧梧翠竹居主人等の
號がある。明治十二年十月岡山市に生れ、幼より
石井潭香の高足難波香城に就いて書を學び、爾來
碑碣法帖に親しみ大正博覽會東京勸業展覽會日本
書道會健筆會其の他諸會に出品して好評を博し、
また岡山談書會を組織して所謂書家の俗書を排し
て斯道の爲に盡した。詩は高野竹隱の門下となり
後長尾雨山、落合東廓、田邊碧堂、勝島仙坡、谷
村映雪、松林桂月、横川唐陽、上夢香、磯野秋堵
永坂石埭等に就いた。氏は書道に於て鶴派は最も
喜ばないから、現今に於ては書家に交友無しと言
つてよい位である。たゞ長尾雨山、犬養木堂、滑

川澹如等は氏の敬服する處であつて「書學階梯」
「女子習字教科書」「女子習字帖」「女子新文かき
ぶり」「習字兼用日用文」「女子消息文の手なら
ひ」等を著した、尙氏は餘技として南畫を善くし。
歌は井上通泰氏の南天莊の門人となつてゐる。

書法難於畫法難、方圓轉折費心肝、
今人漫做殘碑字、晉帖唐臨冷眼看、

東宮冊立慶典恭賦

鳳凰殿上宴群臣、美酒千鍾隘八珍、
擊壤歌成紀鴻典、野人籬落菊花新。

現住所 岡山市門田屋敷

入山 れき子

イリヤマレキコ(歌)

明治六年一月愛知縣知多郡東浦村に生れ幼より和
歌を好んで椎園社中に入つて海上胤平の指導をう
けた。後東京市會議員辯護士入山祐治郎の妻とな
つて多忙なる家庭の仕事に従つてゐる間に詠み集
めたものが東京黎明社發行の歌集「椎の落葉」で
ある。標題は云ふまでもなく師翁胤平の椎園より

來たものである。中に

いさゝ川水かふ駒のたて髪もかくるゝまでに繁
る夏草。

なつ山の若葉にまじる若楓くれなゐにほふ色も
めづらし。

池殿のおばしま近きかへる手の若葉さしそふ影
の涼しさ。

等の短歌數百首の外長歌數十首を添へてゐる。長
歌もよく先師の作風を傳へて誦すべきものが多
い。翁門下の天才にして椎園會主となつた関秀歌
人海上龍子と共に舊派歌壇中の才人である。
現住所 東京市赤坂區表町一ノ一

岩木 躑躅

イワキツツジ(俳)

本名は喜市、明治十四年七月二十六日兵庫縣津名
郡生穂村摩耶に生れ中學校を卒業したる後に東京
の私立醫學校濟生學舎に學んだことがある。氏は
三十六年高濱虛子の門に入り其の指導を受けたが
號躑躅はその命名によつたものである。氏の句は

「ホト、ギス」「國民新聞」「大阪毎日新聞」等に
多く投稿されたが、氏の著書「虛子選躑躅句集」
を見れば氏の句風を知ることが出来る。

夕船に着く師むかへぬ避暑の濱

梅雨雲にとざされ暮す山家かな

石榻に蘭を移すや花芙蓉

風呂の下焚く手に夜の盃かな

宮荒れて鳥居から草茂りけり

現住所 神戸市楠町六ノ一

岩溪 裳川

イワタニシヨウセン(詩)

巖谷とも書いてゐる。名は晉、字は子讓、丹波福
知山の人である。幼より學んで漢籍を多く涉讀し
後森春濤の門に入つて作詩を學んだ。初め文部省
に出仕した後日本新聞其他諸雜誌の詩欄に寄稿して
詩名都下に高くなつた。隨鷗吟社の補助擔當客員
として同社の爲に盡し萬朝報社の選者として今日
に至つた。

三又

春風畫舫夢依稀、一碧三叉載月歸、
太守豪遊留恨事、桃花血染美人衣、

夜漁

蘋末生風魚氣醒、兩岸樹色泥新涼、
欲邀明月初回棹、人語中流倚野航、

不忍池

憶到昔遊過眼雲、池頭不忽滑云々、
奮麟一失龍門躍、落花苔荒廢鯉墳、

聞岡崎蘭馨先生列博士賦贈

蘭馨先生布衣士、三折其肱善方技、
醫海溯源三千年、金簡玉籤皆驅使、
細論病理分毫釐、濟世一部米食史、
我自締交知先生、深知神方精日精、
先生恬澹輕富貴、雲煙過眼金紫榮、
不隱山林隱于市、先生售術不售名、
未可無媒稱逕路、碧霄猶有知已遇、
月中仙桂馨萬年、花能結實心不蠹、
近班博士亦偶然、敢望吹嘘自獻賦、
此日南至初回陽、群鵲報喜巡高堂、

設壇朝祭神農像、緒鞭百草慕餘香、
此時弟子皆相慶、親朋聞者又起敬、
偉哉先生高世行、享斯恩寵帝所命、
岡崎春石氏これを評して「條叙法有り、敷揚體有
り、事昭にして核、詞雅にして鑿云々」と確に結
構雄大の傑作である。
現住所 東京市麴町區三番町二〇

故岩野泡鳴

イワノホウメイ

(小)

明治六年淡路國洲本に生れた。本名は美衛、號は
阿波の鳴門から來たものである。十九年大阪に遊
學し、クリスチャンとなり、翌年上京して明治學
院に學び更に仙臺の東北學院專修學校等に學ん
だ。けれども少しもクリスチャンらしい處のない
人だつた。果して文學に筆を染めキリスト教を脱
した。青年の頃から文を好んで獨歩氏と共に「文
壇」といふ雜誌を發行した事もある。詩集「露じ
も」について三十八年神祕的半獸主義を主張し傳
習思想打破につとめて哲學宗教並に藝術に對する

な手法の故に僅かに通俗小説と伍するを得る低級
文學に過ぎないと論斷して久米氏並に生田氏等と
論争した。

大正八年十二月中央公論に出した「實子の放逐」
は著者の藝術の圓熟と共に岩野氏人生觀の最鮮か
にせる大傑作である。又氏の博士論文として書い
たものだといふ新體詩の研究などはなか／＼精密
を極めたもので氏が行くとして可ならざるなき才
能を持つてゐた事がわかる。如何なる會合に於て
も自己の信するところを忌憚なく論じ盡す處は氏
の持つ男子らしい痛快な一面であつた。大正九年
病歿した。年四十八。

磯姫の曲

岩にあら波音ぞ高く
朝日のぼりてこゝろ寂し。
われはいづこの果を來り
われはいづこの果に行くや。
かぎり知られぬ濱は東

思想家としての地位を獲得し、「耽溺」「放浪」
「發展」「斷橋」「毒藥を飲む女」「ブルタルク英
雄傳」等を公にした。詩人思索家批評家並に小説
家として確かな筆を持つてゐる。けれどもあまり
に遠慮のないところから人に嫌はれた。大正七年
氏は「一元描寫論」を唱へて小説的發想法を一新
しその堂々たる描寫論に裏書すべく脚本「解剖學
者」及び十一月の中外に「淺間の靈」同文章世界
に「父の出走後」の二篇を吾人の前に提示した。
氏の主張する一元描寫論とか内的心理描寫とかい
ふのは「作品中の世界は現實の世界と同じく世界
は唯或一人の認識し得た世界のみであるから作品
に描かるべき世界は唯其作の主人公を通じて見聞
した範圍のみを描き決して作者がそれ以上に其世
界を説明したり傍觀的に描出したたりしてはなら
ぬ。何故ならばその作者から加へる説明や批判は
概念として存在するのみで藝術の本義たる具象化
から甚だ遠ざかつてゐる。」と言ふ議論なやうだ。
この見地から漱石の殘黨の作する文學は其説明的

西にのび行く晝の如し。
みどり黒かみ白き越えて、
せなに亂るゝあらし烈し。

ぬれし砂地にわが素足の
落ちて、一すぢ引くはうれひ。
遠き波より消えも行きて、
更によせ来る波のうねり。

われは友なくこの世の岸に
立てば、かなしみうしほなして。
あはれ、いづこの果を來り、
あはれいづこの果に行くや。

胸もどよめく海の音の
凝りしいはほの上にすはり。
沈むゆふ日の光見れば
ひとりわが身のかけぞ薄き。

見よや、すなだる人の子らは、
かたへよぎりて家路行けど、
われは磯姫、ひとり残り、
わらひさゞめく目には入らず。

夜の氣落ち來てこの世つゝみ、
萬物ねぶりに入らん時も、
われはとこ世にこゝろ醒めて、
沖のふるさと胸にゑがく。

あはれ、深みのあわび見よ
なれが住まひはくらくあれど、
かなしみもなく、憂さも見えず、
あるがまゝなるすがた戀し。

われも生れは海路なれど、
母を見知らず、父を知らず
めぐる月日のしほに浮きて、
かくも夜晝やすきを得ず。

故巖谷 一六 イワヤイチロク(書)

ら達者なる有数の美術學者兼評論家であつた。男爵であつて教壇に立つのみでなく其の實力のあつたのに門人等は敬服したものである。死後岩村透全集出版の計畫があつた。

故岩村 透 イワムラトオル(畫)

岩にあら波音ぞ高く、
朝日のほりてこゝろ寂し
われは深みの底を出でて
またもうれひの深き知りぬ。(後略)

明治三年一月高知縣に生れ、慶應義塾及び青山學院に學び、後外國に留學して繪畫を修め、次いで其後も二回歐米に遊學して斯道の研究をなし、三十五年以來東京美術學校に西洋美術史及英語を教授し、第一回より第七回まで文展洋畫部の審査員となつた。大正三年又歐州に航し、歸朝後學校を辭して美術雜誌「美術新報」「美術週報」等の編輯を主宰し、又時々美術評論「太陽」其他の雜誌に發表したが、大正六年八月、相州三崎の別邸に逝いた。年四十八。「巴里の美術學生」「西洋美術史要」「藝苑雜稿」等の著がある。氏は黒田、久米兩氏と共に白馬會の創立者で辯舌文筆兩つなが

江州舊水口藩士であつて藩醫玄通の男で、天保五年二月生れた。名は修、幼名は辨治、一六はその號、別に迂堂古梅園 霞樓主人等の號がある。幼より孤であつて六歳の時母に従つて京師に赴き、安見氏について書法を學んだ。尋いで皆川淇園の門に入つて漢學を學び十六歳の時醫博士三角東園の塾に醫學を修め、業成るの後歸藩して父の職を襲いだ。時に國家漸く多事であつたので、氏は慨然起つて勤王の大義を唱へ、藤本鐵石、松本奎堂等有志の士と交遊して時事を談じて慷慨した。藩儒中村栗園が藩の參政に擢んでられた時、氏も亦その左右に在つて贊畫する所が尠くない。該藩が他に卒先して大義の譽を得たるには、氏の力が餘

程大であつた。明治元年四月徴士議員政官吏官となり、當時の詔勅制令等多くは氏の筆に成つた。後大史小内史、權大内史權大史等に歴任し、九年十一月太政官大書記官に任じ、修史館監事、内閣大書記官兼修史館兼修史館監事、元老院議員、錦鶏間祇候、貴族院議員等の要職に就いた。氏はこの錦鶏間祇候と貴族院議員とを兼ねるより自ら號して金粟道人といつた。氏は性質極めて磊落であつて、少しも細節末枝には拘泥しない。又人と交つて城壁を設けぬから接するもの皆これと交るを歡ぶ。又音曲を好み雅樂俗曲概ね涉らないものはない。最も書に長じて明治の能書家を以て鳴る。書を言ふもの前には山陽海屋長三洲等を挙げたが今は入木道と言へば一六鳴鶴の二人を稱する。蓋し二人は當代に於て漢魏六朝の美點長所を自分のものにした書聖である。鳴鶴は人に頼まれても容易に書かなかつたが一六はよく人の求に應じてどん／＼書いた。これ蓋し前に書いた性質の必然的結果である。二氏出で天下靡然として六朝の全

風月 江山 結 夙縁、不_レ希_レ成佛、不_レ希_レ仙、

(略系)

江州水口藩醫

父玄道 巖谷一六 書家
明治三十八、七、十一歿
七十一歳

巖谷小波

イワヤサナミ(童)

名は季雄、樂天居漣山人と號す、號は氏の家がもと近江の出であるといふので「さざなみやしがの都は……」の古歌によつたものである。明治三年六月六日東京麴町區に生れた。父は元老院議員としてまた書家として名高い巖谷一六居士である。獨

盛時代に歸服した。又夙に詩を好み古梅の名詩壇に鳴つたものである。三十八年七月十一日七十一歳で病死したが病革まるに及んで從三位勳二等に叙し瑞寶章を授けられた。氏は在官の頃毎月一六の日は例として暇を賜はつたので一六居士の名があるのである。

夜間落葉

風葉蕭々和影斜、半簾寒月譜爬沙、
依稀會宿大悲閣、一夜不眠聽落花。

送春濤翁南遊次其留別韻

髯翁酒膽益雄豪、笑殺畢生甘小齏、
屠取巨鯨爲下物、乘風南海破狂濤、

遊湘雜詩次學圃韻

蒼松翠柏似蟠虬、下有寒泉碎玉流、
何物憂然驚我夢、一聲老鶴喚清秋、

竹

幽窓綠罩半叢雲、憂玉鏘金靜裏聞、
最好月澄風細夕、引入清夢謁湘君、

絕筆

昭朝恩澤一何厚、遊載入間七十年。

長子

立太郎

安政四年八月生
工學博士、東京工科大学教授
二十四年一月歿三十五歳

辨二郎

文久元年二月三十日生
工學博士、書家日下部鳴鶴の養子

妻

妻まらな 日下部鳴鶴二女

季

雄

明治三年六月六日生
少年讀物作家
號小波、漣山人

逸協會學校及杉浦重剛の稱好塾に學んだが、在塾中既に同窓の友大町桂月江見水蔭と小説家三幅對の名を謳はれた。のち尾崎紅葉氏等の硯友社の一員となり小説「妹背貝」等の作を以て世に知られた。夙にお伽噺に筆を染め博文館發行の少年世界を出して少年文學界唯一人者と稱せられたものである。「小波のをぢさん」の名は全國少年少女の

口に謳はれ、その著「日本お伽噺」「世界お伽噺」等の作は長く我少年文學の權威であつた。氏はまた俳句をよくし俳畫にも巧である。三十三年九月伯林の東洋語學校に聘せられ、三十五年十一月歸朝した。氏は好個の一紳士として最も社交の術に長じ知友朝野に多い。曾て文藝院設立の議を立てた。又風流宰相の名ある陶庵西園寺公望（當時の文部大臣）侯が文士をその官邸に饗せる如きは氏の斡旋に待つところが多かつた。

氏には「洋行土産」「新洋行土産」「日本お伽噺」「日本昔噺」「世界お伽噺」「お伽百話」「桃太郎主義の教育」等無數の著がある。又「我が五十年」は過去五十年の追憶録で、明治文壇回顧録、明治文學者月旦録である。

氏ほ獨逸語に長じてゐるので澁澤子等の日本實業家視察團に通譯として渡歐したこともある。氏のお伽噺を書き初めてより三十年になつたので周圍の人によつてその記念事業を起された。尙氏の趣味として馬の玩具を蒐集してゐるが嘗つて皇后陛下

下のお耳に達したので評判が高かつた。

現に博文館編輯顧問、三越呉服店顧問、文部省囑托臨時國語調査會員である。

はたと地に落ちぬ野分の雀堂

投入や小菊玉菊ないまぜて

大松にお馬繫がす鷹野かな

雨過ぎし小庭の隈や無名菌

善言と獲物に御狩了んぬる

青嵐關雲長の髯を吹く

北嵯峨や徑に竹の秋涼し

南國の土赤々と蟻の塔

芍薬の白きを植ゑぬ比丘尼寺

人さかる辻や夜長の志道軒

現住所 東京市芝區高輪南町五三〇

ウの部

上杉信齋

ウエスギシンサイ（書）（畫）

嘉永三年七月江戸に生れた。名は義順、信齋は其號である。夙に林鶴梁、長三州、蒲生聚亭等の鴻儒に就いて經史詩文を修め後市河萬菴に篆隸の書法を學び野口幽谷に南宗派の畫法を學んだ。博覽會、展覽會等に於て屢々褒賞状を受けた。

現住所 東京市牛込區市ヶ谷田町二ノ二

植竹雲邦

ウエタケウンボウ（書）

明治四年六月下總國千葉郡都賀村園生に生れた。字は宣好通稱武之助、雲邦は其號である。家世々里正であつて乃父貞吉氏壯にして亦其職を繼いだ。氏暫く家政の都合で小學校教師となつた。明治二十二年以來入木道四十三世尾形雲海氏に従ひ書法を修業し同二十八年十一月皆傳し四十四世となつた。平井魯堂馬形雲外氏等に従つて漢學を修

め兼ねて歌人小出榮氏に従ひ和歌を修業した三十二年四月東京書法學校を設立し認可を経て書法を教授した。又講義録を發行して通信教授を爲し之に寫眞を應用したのに世の稱賛する所となつた。翌年六月尋常師範學校同中學校高等女學校習字科教員檢定試験に合格し、三十二年四月京北中學校習字科教員となつた。又藥學校講師を兼ね尋いで手本筆意點を發明し特許を得た。三十三年二月曾て發明したる草書一定法を公にした。其著前記の外「特許手本三銘帖」、「特許手本七十二勢表」「習字活法」等がある。

震災前の住所 東京市下谷區東黒門町六

故上田耕冲

ウヘダコウチユウ（畫）

日本畫家、文政二年京都祇園町に生れ、幼名を萬次郎と云ひ、父は耕夫といつて、攝津池田の人で京都に住し、應舉派の畫を學んだ。耕冲十三の時大阪に來り、富豪平野屋五兵衛の家に寄食し、父の友長山孔寅に就いて畫を學び、技藝練熟して竟

に一家を成すに至つた。耕沖天資強健年老いても矍鑠として壯者に譲らない。又健啖にして遠遊を好み、足跡海内に遍く、八十五歳富士山に登り、九十歳にして松島に遊んだ。八十七歳の時揮毫を宮内省に献じて帷子を恩賜せられ、傑作甚だ多い。晩年の大作として明治四十三年夏、天満天神社貴賓室の襖二枚鷹狩と雪中老松の密畫を描いた。死に至る迄一日も畫筆を描いたことが無い。四十四年一月二十一日病歿した。享年九十三

上田 萬秋

ウエダマンシユウ(畫)

號は柳外。明治二年八月京都市に生れ、初め今尾景年に學び、後京都府立畫學校に入つて十九年優等の成績をもつてこれを卒業し三十六年以來、内國勸業博覽會、米國聖路易萬國博覽會、白國利榮壽博覽會、其他諸所の展覽會等に出品して受賞すること少くない。文展へは第一回に「冬の日」第二回に「閑庭」第三回に「秋」第四回に「逢坂山の逕」第九回に「光風霽月圖」第十回に「かか

所の秋」第十一回に「北山時雨」を出し度々三等賞の榮譽を得、京都日本自由畫壇によつてゐる。現住所 京都市下長者町東

上田 万年

ウエダマンネン(國)

尾張の藩士上田虎之丞の長男で慶應三年一月一日生れた。明治二十一年七月帝國大學文科大學和文學科を卒業し、後獨逸及佛蘭西に留學、歸朝の後文學博士の學位を受け、文科大學教授に任ぜられ文部省専門學務局長兼文部省參與官兼外國語學校長心得に歴任し一時東京帝國大學文科大學長になつた。國學者として固より立派な學者であるが氏は政治的手腕をも有してゐるので東京帝國大學總長候補者の一人として數へられた。大學に於ては得意の國語學國文學第一講座を擔任して學生の人望を集めてあつた。尙近くは神宮皇學館々長として神職の養成にも力を盡してゐる。現住所 京都市下谷區谷中清水町一七

故上田

敏

ウエダビン(文)

號は柳村、英文學者、家は舊幕臣、靜岡縣士族上田廻三の長男で幼より學を好み、刻苦精勵明治三十年東京帝國大學文科を卒業し、三十二年東京高等師範學校教授となり、幾くもなく歐州に留學し歸朝の後一時文壇に雄飛した、後京都帝國大學文科教授に任じ、四十三年文學博士を授けられ、大正五年七月九日を以て東京に歿した。享年四十三。氏の文學的生活は大層早い方で、島崎藤村の書いた「春」の中にも出てゐるが、文學界の連中で最も若くして文學についての趣味と理解とをもつてゐたのは博士であつた。英文學者でありながら日本の平安朝文學にも精通してゐるので英文講讀の際にも「源氏物語」や「枕草紙」等の中の文を誦讀してゐるのを比較に話されたものだ。非常にノブルな人であつて接してゐるだけでも上品な感じがあつて嬉しい人であつた。京都大學に轉じて行つても文科の學生は文學に興味を持たないの

で、考へ出しても其の頃の空氣は不愉快な程非文科学的なものであつたが、博士の講義は自由寛大で甚だ面白いものであつたことは菊池寛氏も博士の三週忌を記念する文の中に書いてゐる。博士は文學の研究に於て鑑賞と云ふことを最も重んじて居た。文學は研究すべきものでは無く、文學に對する第一義は鑑賞に盡きてゐる。従つて氏は學校に於て英文學を教授するに當つても、系統的な研究を無視してゐるので、文學を抽象的に若しくは哲學的に取扱つたり、又只文學的知識の集積にのみ没頭して居る日本に於ては博士の態度は可なり異色のあるものであつた。従つて博士の講義は多く文藝的談話になる。併し折にふれてその青年時代から持ち續けた黒い美しい瞳を輝かしながら、ダントの神曲を語り、ミルトンの失樂園を説いて居る時は博士が眞に文學を味ひ得た歡喜を持つて居ることをあり／＼と窺ふことが出來た。博士が明治三十年代に歐洲文藝輸入のバイロットとして、華々しく活躍し小説「渦卷」を書いて朝日に出し

たが、其の後の我が文壇は自然主義の勃興となつて、氏の信奉したクラシズムの藝術などは文壇に於て少しも顧みられなくなり、又自然主義の興起と共に生じた小説萬能の傾向は、その反響として詩壇を衰微せしめたので氏は甚だ不遇な位置に立つた。併し議論することを惡趣味と云うてゐる博士は時事を論ずることを好まなかつた。博士は文學の外音楽と繪畫を好んだ。音楽を好むやうになつたのは露西亞に幕府から差遣された氏の祖父の感化ださうな。著書には前記の外上田萬年博士と合著の英和辭書の外「現代の藝術」「海潮音」「牧羊神」及其の他藝術に關する諸論文を集めたもの等がある。

ちやるめら

薄日のかげも衰へて、

風冷やかに、雲ひくき

鈍色空のゆふまぐれ、

はづれの辻のかたすみこ

ちやるめらの聲吹きおこる。

戀し、なつかし、虹の橋。

いつしづれの日に架けそめて、

涙の谷の中空を

雲につらぬるそり橋か。

細き金具の歌口に

かなしみあふれ、氣も萎えて

折りまはしたる聲のはて、

忽ちくづれ、調かはる

ああ、ちやるめらの末の曲

「やぶれ菅笠、しめ緒が切れて

さらにきもせず、すてもせず。

人に思のなまなかあれは

夢に現を代へ難き――

えい、なんとせう、――あだごころ

博士の令嬢瑠璃子氏はこれも親に似た文學通であり作にも自信ある人ださうな。大正十二年の文部省中等教師の英語科檢定試験に及第した。

はじめの節のゆるやかに
心をさそふ管の聲、

音は華やけるしらべかと、

おもへば、あらず、せきめぐる

悲哀の曲の搖曳に、

みそらかけりてあの山越えて

越えてゆかまし夢の里。

よしや、わざくれ、身はうつし世の

榮にまぎるとがめびと、

有爲の奥山路嶮し。

響はるかに鳴りわたる

あふまが時のうすあかり、

館屋の笛にそぞろける

子供心もおのづから

家路をおもふ二の聲に、

夢の浮橋、あら、なつかしや、

上原桃畝

ウエハラトウホ(畫)

埼玉縣岩槻に生れ、初め文晁派荒木寛畝の門に入り後、其養嗣子荒木十畝に學んだ。讀畫會會員となり帝展第十一回に「春光」を出して大に名聲をあげた。

現住所 東京市小石川區原町一五

上原澹

ウエハラアワキ(書)

弘化四年九月十八日長野縣に生れた。字は子交、通稱澹、梁川は其號である。又如水、鵝湖東畔主人、自然堂等の號がある。幼時より學を好み長ずるに及んで和歌、書法を諏訪神社の官司諏訪頼武に學んだ。其歿後詩文書法を溝口明山に學び、後宋元明の古法帖を學んだ。曾つて俳諧を好み京師に往來して洋水園芹舎、芭蕉堂公成、古終庵黙池等の俳士に交り晩年好んで畫論を讀み渡邊省亭、松本楓湖、瀧和亭、野村文學等と親交して雅懷を養つた。近來其の消息を聞かない。

以前の住所 信濃國諏訪郡玉川村

故植松 彰

ウエマツアキラ(漢)

漢學者、佐倉藩老の家に生れ、堂と號し、明治の初め東京師範學校に入學し、卒業後三重縣津師範學校及仙臺師範學校に教員となり、又大學豫備門の教官として令聞あつた。嘗て漢學を川田夔江に受け、其の文章は交友間に於て甚重んぜられた。重野安繹の國史綜覽を稿する時、囑を受けて其の編纂に従事し、又岩崎家の靜嘉堂文庫の編輯を託せられた。平生作る所の詩文は積んで筐に滿つると云はれた。四十二年八月二十六日歿した。

故植松 有經

ウエマツアツネ(歌)

尾張藩士植松茂岳の五男で、天保十年六月十五日

(略系統)

植松有信號松隆 養子 植松茂岳小林氏、徳川元千代の師
文化十、六、歿 明治九、三、二十歿
八十二

名古屋藩ヶ城下に生れた。幼い時より詠歌を好み國學を修め、明治の初年京都中學校國文科の教師となつたが、六年太政官出仕を命ぜられ、十六年宮内省御歌所を置かれた時、召されて參候兼録事に任ぜられた。又文學御用掛となり從七位勳七等に叙せられたが、三十九年六月十三日京都の客舎に病を得て歿した。享年六十八。氏はまた書道をよくし多田親愛、高崎正風等の諸家と共に我國和様の大家として敬はれた。筆蹟は松花堂をよく熟習して其妙境に達し、その墨色、連綿、筆肉の趣は多田高崎の二家よりも味があるやうに思はれる。

手弱女が腰裳の裾の長き夜の更くるもしらすまひ遊ぶらむ。

有園 歌人

有經歌人、書家
明治三九、六、十三
歿、六十八

—西田藤次農學博士
—安東京帝大助教授、
文學士

植松 安

ウエマツヤスシ(圖)

明治十八年八月東京に生れ、同四十一年東京帝國大學文科大學國文科を卒業し、私立明倫中學校教諭となり、次いで東京帝國大學助教兼東京帝國大學司書官となり、大正十年より十一年まで歐米へ留學した。家は代々名古屋の國學者であつて曾祖父有信は本居宣長の高弟なることは世の知るところである。宣長の歿後山室山の墓側に廬を結んで三年の喪をなしたほどの人として名高い。氏の父有經は國學者であり歌人であり書家であつた。この家に生れた氏が國學を研究して「古事記新釋」「假名日本書紀」「記紀の歌の新釋」「教育と圖書館」等の著者となり、窪田空穂や尾山篤次郎諸氏と往來して作歌を嗜み

しら雲のたなびく彼方月に遠くかすかに見ゆる
星一つかも
桐の葉の落ちしをうけて一本の萩はうごかず風
なき夕

のやうなうまい歌を詠み出すのは何も不思議なこととは無い。尤も祖父植松茂岳は有經の實子では無くて小林家より入つてその養子となつたのであるが、この人また當時有名な國學者であり、徳川元千代の師範に擧げられ、八十二歳の高齡で歿するまで歌文の書を手放さかつたほどの篤學者であるから、有經の血にこの家に流れてゐると云つて差支無いのである。

現住所 東京市外高田町雜司ヶ谷龜原一

上 夢 香

ウエムコウ(詩)

名は眞行、京都の人、現に東京に在つて宮内省雅樂寮の樂長を勤め傍ら詩作を善くし、雅文會の顧問であつて、多作家で知られ、斯文や大正詩文等に寄稿をしてゐる。

富嶽
雲霞 天造幄。 日月 自然燈。 渴飲 金銀水。
飢噬 玲瓏氷。
送人之北海道

八采玲瓏映碧瀾。 洞湖晴景客停鞍。
芙蓉秀色神州望。 明日蝦夷國裡看。

題蘭石圖

山石貌奇古。 阜蘭葉健蒼。 磁盆貯二物。
置諸幽人牀。 石愛堅貞質。 蘭憐馨烈香。
憔悴三閩叟。 澤畔行吟傷。 抱笏肅拜石。
又有米元章。 楚宋雖異代。 二賢夢相望。
吾生千載後。 日夕愛幽芳。 清夜草堂夢。
亦復到沅湘。 日出南窓白。 蘭石粲晨光。
日本及日本人の詩壇擔當者で雅文館の編纂に當つて居る館森袖海氏は、夢香の詩を評して、「古調古雅にして泛腐せず、高手たる所以か」と、以て氏の詩人としての才能を知ることが出来る。

現住所 東京市

浮田和民

ウキダワミン(文)

熊本縣士族浮田十太の三男で安政六年十二月二十七日生れた。初め熊本洋學校に入り同九年同志社に遊び同二十九年米國に遊學しエール大學に學び

史學及政治學を修めた。歸朝後同志社政學部教頭に任じ同三十年上京して東京專門學校の講師となり史學政治學社會學科等を擔任し現に早稻田大學教授の任にある。同四十年法學博士の學位を受けた。

現住所 東京府北豊島郡高田村高田若葉一七

宇佐美不喚

ウサミフカン(俳)

名は英、明治十年五月石川縣鳳至郡白米村に生れ同二十六年函館商業學校卒業後東武鐵道株式會社に入つてその經理課長を勤めてゐる。氏は三十五年頃根岸の碧梧桐庵に出席以來十年間ばかり俳三昧に入つたが今は殆んど中絶してゐる。氏の句は「日本及日本人」に投稿され「續春夏秋冬」其他に蒐録されてゐる「見神論評」「不喚小什」「月藻」等の著書がある。

夏野路や着吳塵も笠も吹きまくる

城趾すぐに舟出の松霧晴るゝ

遺孤の爲めに脇起す句の菘

官に史料私に史眼ある寒し

不爲廻心機法千里の寒さかな

朴處枯野木履など咏み捨てに

現住所 東京府下隅田村一三四一

潮みどり

ウシチミドリ(文)

本名は長谷川桐子、舊姓は太田、銀作氏夫人、歌人若山牧水夫人喜志子の實妹、明治三十一年六月長野縣東筑摩郡廣丘村吉田に生れ、同縣松本市女子職業學校を卒業して義兄若山牧水に師事し大正八年結婚した。大正九年より約二ヶ年雑誌「創作」を經營した。

現住所 沼津市上香貫創作社内

牛田雞村

ウシダケイソン(畫)

名は治。もと仰俯と號した。明治二十三年横濱市に生れ、四十年歴史畫の大家松本楓湖の門に入つて巽畫會會員となり、四十五年其の展覽會に二等賞を得た。文展へは第七回に「町三趣」を出した

が日本美術院再興後第一回に「柳」第二回に「隅田川」第三回に「漁夫の家」第四回に「鎌倉の一日」を出し、「鎌倉の一日」は名譽の樗牛賞を得た。又大正四年には今村紫紅、速見御舟、富取風堂、小茂田青樹、小山大月、岡田壺中等と赤燿會を起して沈滞した畫壇を振起する運動を試みた。現に日本美術院々友である。

現住所 横濱市壽町二ノ八七

故薄井龍之

ウスイタツユキ(詩)

詩文家、小蓮と號し、字は飛虹、信濃飯田の人文政十二年を以て生れ少時昌平學堂に入り、後京師に遊び、頼三樹に師事し專尊攘の説を唱へた。更に東國に來り佐久間象山に従つて兵法を學び、嘉永中日光主府督學と爲つた。偶々三樹の事に坐し捕へられて獄に下され、幾くもなく江戸に脱走して、武田耕雲齋に依つた。藤田小四郎武田耕雲齋等の義を筑波山に唱へたとき入つて其の參謀と爲り、常野の間に轉戦し、三十七戦を経て身に十七

天恩 優渥 温泉水、賜與英雄 洗舊創

白田 亞浪 ウスダアロウ (俳)

名は卯一郎、明治十二年二月一日長野縣北佐久郡小諸町に生れ、三十七年法政大學卒業の後三十八年雜誌「向上主義」の編輯に從事した。三十九年電報新聞に入り、爾來毎日電報、横濱貿易新報を経て、四十三年やまと新聞に轉じ、編輯長又は編輯監督として大正五年に至つた。其の間二三の株式會社に關係し今は日住セリサイト合資會社の經營をなしてゐる。氏の作句は既に幼時より始まり三十六七年の頃高濱虚子の添削批評を乞へたる頃より月並調を破して新しき俳句に移つた。爾來句作に遠ざかつてゐたが、大正三年病氣靜養の折再び之に指を染め同四年雜誌「石楠」を創刊して今日に至つた。氏の句は嘗て「國民新聞」に投句したが「句集炬火」に蒐録されてゐる。著書には「句集炬火」評釋「正岡子規」「目ざすべき俳句の一路」「正傳眞田三代記」等の外數種ある。

創を負うた。のち其の謀議が衆の容るゝ所とならないので脱して江戸に走り、流離の間京師に到り、將に一橋家被役澁澤榮一に會して建白しようとした。時に幕府の追捕甚嚴なので龍之跡を四國に潜め、讃岐に赴き、日柳燕石に據り、徐ろに天下の形勢を察し、復た京都に往來し、志士と國事に奔走した。明治維新岩倉具視の幕客と爲り、後開拓監事と爲り山形縣參事に轉じ、東京名古屋各裁判所判事、山形縣大書記官大審院判事等に歴任し到る處令名あつた。明治二十五年官を罷め、専ら翰墨を以て樂と爲し、復た世事に關らなかつた。四十一年朝廷其功を録し特に從四位に叙し、是より先き勳四等に叙せられた。龍之學問該博尤も詩文に長じ、又書畫鑑識の明があつた。大正五年十一月二十九日東京に卒した。享年八十八。氏は常に經三十七戰生と稱したので土居香國に次の送詩がある。

送小蓮薄井判事賜暇浴芳名温泉
經三十七戰場、百年心力在勤王、

畫魔俳魔風邪にこもる今日もがな
現住所 東京市外代々木山谷一七五

歌川 國峰 ウタガワクニミネ (畫)

名は銀次郎。慶應元年二月江戸に生れ、浮世繪の家風を繼ぎ、傍ら岸竹堂に學び、明治三十四年以來日本繪畫協會、扶桑繪畫協會、米國聖路易萬國博覽會、日本美術協會、繪畫共進會、東京勸業博覽會、巽畫會等に出品して屢々受賞した。息、峰太郎洋畫を學び、娘に日本畫家歌川若菜がある。若菜女史は名はわか子。明治二十二年一月東京に生れた。初め武村耕齋、端館紫川、水野年方、川合玉堂等に學び、三十七年女子美術學校日本畫科を卒業し、後、永らく歐洲に遊んで大正五年歸朝した。文展へは第二回に「良人の室」を出した。現住所 東京市芝區高輪南町三〇

内田 遠湖 ウチダエンコ (漢)

名は周平、遠州の人、氏壯時大學に入つて醫師と

ならうとしたが、時弊を視て慨然として儒者を志し、洛閩の學を宗とし山崎闇齋を尊信し最も大義名分を重んじ、中學校漢文科廢止の議あつた時や南北朝並立の論起つた時の如き、痛論切議天下に號呼した。乃木家嗣を立つる時に當つても氏は又大に之を不可として書を當路に出した、辭意峻厲にして秋霜列日の如しであつた。其説は行はれなかつたが、而も士氣を砥厲して世教を裨益したことは決して尠く無い。氏には「王父東郊君宅址記」「小澤調庵翁傳」「懷德二十八詩跋」「書小林君扇面」「忠魂碑」「石川是我翁壽序」「闇齋山崎先生祠堂碑」等の外甚だ多くの漢文がある。氏の闇齋先生に私淑して居ることは祠堂碑の中にも出てゐる。即ち「介子爵谷君干城」囑「文周平、周平私淑先生有年矣、獲載名碑上、以自附於門流之末、固所願也、故不願誦陋、叙先生學問大節及祠堂因革以貽後昆云、云々と以て知るべきである。氏は「大正詩文」編纂係の一人で「雅文會」會員中漢文の妙手を以て重きを置かれてゐる。氏

は又帆影子と稱して歌も作つてゐる。
我がすきは鎮西八郎魯仲連

陶淵明と西行法師
現住所 東京市牛込區若宮町

内田青峰

ウチダセイホウ (詩)

名は復、字は士敦、通稱は又一郎、(一名は又新字は新卿) 作州二宮の人、明治二年三月十八日同地山西黒土に生れ、少時藩文學上原看雲の門に入つて經子詩文を研鑽し、二十八年縣師範學校を卒業して、訓導校長を歴任し、三十八年五月津山高
等女學校教師となり尋で教諭兼舎監になつたが大正八年十二月辭職して郡は製絲株式會社教育部に入つた。氏は弱冠にして詩文を好み、其の作る所を屢々東京日々新聞に寄せた。槐南嘗て其の詩を評して「鈎連鍵關。句有句法。章有章法。優具唐人程式。」と言つた。時に青峯年二十七。寧齋も亦評して「青峯天才雋逸。叢書叢說。材皆可取。瑣事遺聞。筆克堪書。要以格不卑語不笨爲主。蓋從

船山入。而不出從船山出者乎。と言つた。田邊碧堂の懇憊によつて森野二家に學び、其の後磯野秋渚、森川竹溪と交り、木蘇岐山に批評を求め、高野竹隱に學んだ。氏には未だ剗腕に附しないが「青峯集」三卷、「神崎與五郎傳」一卷、小説「老少年」二卷の草稿がある。氏はまた餘事として翰墨を嗜み、最も鄭文公、孟法師の二碑を喜ぶ。其の居處を聽詩堂と言ひ又峰青屋と稱し、別に青峯、壺山、容軒、玉壺山人、栖墨居士等の號がある。主として「新詩綜」「詩苑」等に寄稿した。

春畫

藥爐 經卷儘魂銷。 又被東風破寂寥。
唐代佳 人海棠睡。 召南女子絳桃夭。
漸知病骨逢春健。 已愧愁心借酒驕。
清世無能聊復爾。 青山笑揖舊書寮。
寧齋曰屏絕恒蹊。 羸秀有政
又寧齋、槐南、竹隱の三師を痛んだ三哭の中、槐南博士を哭したものは次の詩である。
槐翁教我願慙慙。 古體今體思不群。

日本 詩人晁卿後。 鴻才驚彼獨有君。
大雅 扶輪人已逝。 吁嗟二哭泣更涕。

天隨は三哭を評して「三首結末。倣杜陵同谷七歌體制云々」と激賞してゐる。

氏は又餘技として川柳を嗜み
他をのぞく自家の障子の孔も見え
顔色に沁み出る腹の黒さかな
の作があり、和歌にも
讀むふみをてらす螢のひかりもて人の心の暗照
らさばや
等の傑作がある。

哭竹隱先生

竹翁 誠我尙端嚴、 焚詩我口三年箝、
李杜文章秘法度、 喪君誰復光彩添、
詩人生命一何窘、 吁嗟三哭淚已盡、
桃山陵
鼎湖龍去碧雲流、 玉樹園陵春亦愁、
二百餘年號哭外、 無窮帝德被千秋。
贈森川竹溪

内田魯庵

ウチダロアン (評)

休算浮名到鬢絲。 春絃新唱蜀中知。
另儲貨貝夷船待。 不購柳書求竹詞。
不惟詞名萬里喧。 幺絃低按儘銷魂。
賈人珍重爭傳去。 君是蓬萊白太原。
讀張問陶詩次其佛前飲酒韻。
高山流水竟何之。 株兔十年空守持。
世屬泰平無物業。 人遭險厄見奇才。
曾憐白雪不前馬。 未羨黃金左顧龜。
誰以文章酬聖代。 此心唯有子期知。
現住所 岡山縣苫田郡二宮村山西字黒土五一

名は貢、明治元年九月東京市車坂に生れ、明治四十年前後は不知庵の名を以て文藝批評の筆を執つてゐた。氏は初め政治家にならうとし後軍人、醫師等に志し更に建築家、實業家等に志望を轉じたが、性來の嗜好に導かれて遂に文壇の人となつた。紅葉の全盛期に當り之を難じて徒に脂粉を事とする皮相寫實主義を斥け、自ら創作に筆を染め

て「暮の二十八日」等を書き日本に於ける社會小説の嚆矢をなした。又明治二十五年既にドストイエフスキイの「罪と罰」を譯し、四十一年トルストイの「復活」を譯して外國文學翻譯の功績も頗る多いが、その本領は評論にあるやうだ。博覽強記で座談の妙を極め、善諷惡罵口を衝いて出る。久しく丸善書店の顧問としてまた新書を讀破しては之を世に紹介するので、文壇の新知識として重んぜられてゐる。最近の著に「きのふけふ」がある。太陽等によく感想や時事談が載つてゐる。「バクダン」は讀賣に連載したものを後春秋社から出版したものである。バクダンは獏談であつて、前著獏の舌を承けたもので獏の話といふ意味である。評論でも感想でも考證でも史談でもなくして、行當りばつたりと思ひついたことを研究も考察も穿鑿も何もしないで漠然と書いたのだから、バクダンは漢談にも通ずるといふことである。氏は文壇第一の讀書家でその識は東西古今を貫き、その趣味嗜好が甚だ廣汎である。雜誌をするやうな假面を

冠りながら、實は甚だ識見高邁で妥當な批評を試みてゐるのである。右の外「片うづら」「うきまくら」「復活」等の著譯がある。氏は何事についても識見高く現代の思潮によく觸れてゐて、しかも之を達觀し、批評して行く人で決して之に巻き込まれて其渦中にあへぐやうな人でない。人物も圓滿玲瓏玉のやうだといふことだ。其の優しい溫容と一點批難すべき點を見出せない殆んど完璧な人で、臍の緒切つて未だこのやうな人にあつたことがないと某氏の言つたやうに好い人である。その巧なる座談の間口を滑つて出る話、それは決して饒舌冗談では無くて何れも立派な論文である。圓轉滑脫縱橫自在、これを聞く人決して長きを倦まないで傾聽するといふことである。漱石氏の皮肉は眞面目くさつた面をしていふ皮肉であり、氏の皮肉は笑ひながら言ふ皮肉だ。大震災後の作に「典籍の廢墟」がある。

現住所 東京府下淀橋町柏木三七一

内村鑑二

ウチムラカンゾウ(文)

氏は基督教徒中有數の文章家であり思想家であり説教家であつて、嘗つて萬朝報に記者たることもあつた。氏は傳統的の基督教に反對して縱議横論したので、遂に教會問題について物議を醸して絶縁した。氏は従來の所謂「教會」を離れ、孤立して機關雜誌「聖書の友」の刊行を續けた。更に努力して従來の著述及説教を二十卷程の「全集」に纏め内村全集と名づけて毎年二三卷宛數年に亘つて刊行し若き日本人の間に不朽の教會を建設するといふ理想を實現しつゝある。氏の著述は徳富蘆花氏の不如歸、櫻井忠温の肉弾などと共に、世界の各國語に翻譯されてゐるがそれらも他日全集の中に輯められる筈である。

現住所 東京市外淀橋柏木

故内村鱸香

ウチムラロコウ(儒)

出雲の藩學、名は篤柴、字は子輔、又倉山と號し、

性温厚學實幼より學を好み稍長じて浪華に出でて篠崎小竹に學び、後ち江戸に出で佐藤一齋、安積良齋の門に入り經史を修めた。鱸香本市井の人であつたが元治元年召されて松江藩の儒臣となり傍ら家塾を開いて生徒に授けた。門に入つたもの二千五百人、詩文に巧で重野成齋等と交り深かつた。明治三十四年歿した。年八十一。著はす所通鑑擊要補註其外雜著がある。

内海吉堂

ウツミキチドウ(畫)

嘉永三年一月越前國敦賀町晴明に生れた。内海元紀の四男である。氏名は復字は休卿吉堂又葉葭楊柳室主人と號した。幼時鹿六後に吉堂をもつて通稱となした。幼より鹽川文麟について業を修めた。明治十年清國に遊び蘇州杭州の山水の間に逍遙し汎く江南知名の士と文酒の交をなした。十五年一旦歸朝し後支那貿易に關し支那貿易私説を著した。二十三年の交故荒尾精氏は貿易研究所設立の擧があつた。こゝに於て大に意を安んじ爾來丹

青の外復他事を説かない。作品は日本美術協會等で受賞し、文展へは第六回に「船過孟浪梯圖」(褒状)第七回に「江南春靄」を出して好評を得た。
現住所 京都市高倉二條北

内海月杖

ウツミゲツジヨウ(文)

明治五年三月神奈川縣相模國中郡大山町に生れた。東京帝國大學國文科の出身で明治大學の講師をしてゐる。「われから」「作文大成」「文章十講」「徒然草評釋」「平家物語」等の著があつて高等女學校及其の卒業生程度の参考書として廣く用ゐられてゐる。

現住所 東京市本所區向島請地町一四〇

鵜殿梁園

ウドノリヨウエン(書)

安政五年江戸に生れた。名は長生、梁園は其號、一に通哲齋の號がある。夙に書法に通じて令名あつた。維新後駿府に移り中井敬所に就いて數年鐵筆を學んだ。明治二十六年展覽會競技會等に於て

屢々褒賞狀を得た。二十七年我が皇室銀婚式を擧げさせられる時、自刻の印額を献納して嘉賞の光榮を擔つた。東京の書家中屈指の人である。
震災前の住所 東京市京橋區桶町三〇

海上龍子

ウナガミタツコ(歌)

明治十三年二月福島縣信夫郡鎌田村大字本内に生れ幼時より和歌を好んで天才を表した。偶々歌道の大家海上胤平翁巡歴して同地に泊し一日歌會を催して一少女の才學に驚き約して養女となした。これ即ち龍子であつた。當時女學校在學中の龍子は卒業の後上京して胤平家に入り國語歌學の研究に専念した。進境著しいので翁は常に膝をうつて我に後ありと喜んだ。和歌雜誌「わか竹」鶴見總持寺發行の「禪の生活」其他數種の雜誌に寄稿し椎園曾を主宰して數百人の門下を有してゐる。著書には女子百人の小傳と和歌とを集めたる「たのもしき婦人」「椎葉集」「椎の下草」「椎園歌がたり」及未刊のもの數種ある。養父及女史は孤獨で

らめる

現住所 大阪市外箕面

故海上胤平

ウナガミタネヒラ(歌)

あつて親族縁者が無い。唯女史に一人の甥があつて東北大學理科大學の教授をしてゐるのみである。女史は名家の後を汚すを恐れて後繼者を設けないと言つてゐる。
やがてたつみさをかくしてふる雪にしばしたはめる庭のなよ竹
浪と見し雲より遠のしまやまもやしらみゆくしののめの空
浦松にかゝれる月の影すみ浪にしらぶる夜半のすま琴
おもかけを月に残して一聲は雲に入りぬる時鳥哉
さゝの葉の露ばかりとてのむ酒はみたるふしのはじめなりけり
松たてし門もとゞろに三河人新年いはふうたぞきこゆる
一聲をおもかけにしてほとゝぎす月にあととふ夏のみぢか夜
心あての雲より上にあらはれて中空高く月ぞし

天保元年正月元日千葉縣海上郡三川村に生れ幼名を六郎と言つたが強かつたので里人は呼んで鬼六と言つた。賢胤の男で正胤と言つた。加納諸平の門に入つて平の一字を貰ひ胤平と改めた。石川依平伴林光平飯田年平の三人と共に諸平門の四天王と言はれたが三人は早く歿して胤平獨り諸平の歌道をついだ。眞淵宣長を経て大平に至り大平はその子内遠があつても歌道を諸平に譲り別に紀州に國學院を立て、内遠に本居の家名を繼がした。諸平は子なくその養子紀州の神職をしてゐる。そして歌道は胤平が繼いだ。胤平も子が無かつたので遊歴中龍子の歌才あるを見て養女に迎へた。併し海上家は龍子を以て後を繼つ考である。何となれば胤平は初め武術家で千葉周作の門に這入つて一刀流の達人となり山岡鐵舟高橋泥舟など、同門の

友人であつた。胤平は壯年時代諸國武者修業の爲足跡國內に遍く遂に紀州に這入るに及んで同藩武藝の師範として紀州藩客分格で止まつた。この頃諸平は國學院を和歌山に開いたので這入つて學んだ。翁が後年武を捨て、歌道の師となつたが之はその素志で無いといふので龍子も其意を以て後繼者を立てないと言つてゐる。翁は和歌の才も亦武道以上の天才があつて世の推服するところであつた。椎園會を設けて數千の門下を指導し、「歌學歌範評論」「新自讚歌集評論」「詠史百首評論」「東京大家十四集評論」「椎園集」の外未刊の著書數種ある。養女龍子歌道書道に於て聲名あつて翁の名を恥かしめない。大正五年三月二十九日八十八歳で歿した。

新年をよめる歌並短歌

新年のけふは新月にひ月のけふは新日かきかぞふ三の始めと現身の人のことごとく門毎に松竹たて松竹にみしめひき引きはへ敷妙の家はききよめ百とりの机の上にひきの餅飯をそなへ池田の豊御

宇野浩一 ウノコウジ(小)

本名は格次郎、明治二十四年七月筑前博多に生れ大阪に育つた。早稻田大學英文科を卒業後、一度筆をとつて文壇に出でるや、世評喧嘩目して或は氏を奇人といひ又はモンスターと言つた。「藏の中」は氏の創作を集めたものである。「永い戀仲」の作者たる氏の小説は、ふざけてゐると非難するものもあるが、又一部の人よりは將來のある作家として注目されてゐる。大正八年十二月新小説に出した「耕左衛門と彼の周圍」は文壇の好評を博せる百枚の長篇傑作であり、「戀愛合戦」は新劇勃興當時の文壇と劇壇との裏面を精細に描き出したもので、文壇、劇壇、畫壇知名の人々がモデルになつてゐると言はれてゐるので、興味を惹いてゐる。其他「苦の世界」「男心女心」「美女」「我が日我が夢」「武勇畫傳」等の著書がある。最近小説「二人の青木愛三郎」「夢見る部屋」「山戀ひ」「續山戀」「屋根裏の戀人」「婚約指輪」「青春の

酒をすゑ大野の甘菜辛菜大海のひろめわかめとりくにおきたらはしとこよ香具の木の實の時自久に守らせたまふ天地の神をうやまひ刺竹の君をたふとび人皆のゐや言すなりよ言ほぐこと人皆のとひみとはれみ新年のよごとゐや言ことかはしつゝ、
朽ちのこる梅もさき出で、春を待つわか木の花におくれざりけり
高きにはうつりもゆかで位山麓の野邊に鶯の鳴く
等は何れも氏老後の作である。

宇野喜代之介 ウノキヨノスケ(小)

明治二十七年四月六日茨木縣水戸市に生れ東京帝國大學に入學し、大正七年獨文科を卒業後「お弓の結婚」「家うちの話」等の作を發表して前途を期待されてゐる。
現住所 長野縣上諏訪町新井

生方敏郎 ウブカタトシロウ(小)

明治十五年八月群馬縣沼田町に生れ、明治學院を経て早稻田大學英文科を卒業した。翻譯創作の外評論が澤山あるが凡て滑稽諷刺を特色としてゐる。「敏雄集」「人のアラ世間のアラ」「一圓札と猫」「洋服細民の悲しい笑」「金持の犬と貧乏人の猫」「虐けられた笑」「玉手箱を開くまで」其他數種の著書がある。大正八年十一月大正日々新聞に入社して幹部員となつたことがある。大正十年頃より飄逸的諷刺的批評家より創作家となつたが筆致は矢張諷刺的飄逸的である。最近の作に隨筆「我大に笑はん君も亦笑へ」「女人團遊記」小説「妻の留守」「花から花へ」評論「日本子福者の悲哀」眼で見えて來たエポックメーカーキングな事件」婦

人の成就すべき生活革命」「逐鹿閑話」等矢継ぎばやに發表してゐる。氏は大正の齋藤緑雨を以て目される作家である。

現住所 東京市小石川区音羽町三ノ二一

梅原龍二郎

ウメハラリユウサブロウ(畫)

もと良三郎と號した。明治二十一年三月京都に生れ、十七八歳の頃京都の洋畫研究所に入り、斯道の大家淺井忠に就て學び、四十一年から大正二年まで五年間巴里に留學した。大正三年二科會の創立に際し鑑査員となり、其第一回到「靜物」第二回到「座裸婦」第四回到「風景」「靜物」を出した。他に「自畫像」「黄金の首飾」「讀書の女」「ナルシース」等の作がある。大正七年三月二科會を脱會し、十二年大震災後大阪毎日新聞社主催の日本美術展覽會洋畫部審査員となつた。十三年三月春陽會第二回展覽會に出品の「臥裸婦」の美しくして而も類稀なる磊落さを示したのもや、古代錦のやうな秋色のスケッチ等大に注意された。

現住所 東京府下北品川七三三

故梅本黑人

ウメモトクロンド(國)

岡田氏後梅本屋といふ商號を採りて氏とした。初名黑人後敏鎌と改めた。通稱儀兵衛、眠齋魯幽の號がある。天保十年二月十四日江戸駒込團子坂に生れ、父の業を繼いで質屋となつた。後姉婿に家を譲つて別居し、和歌を林麴雄加藤千浪等に學んだ。明治十年十月一日新潟縣新津町に住める實兄の家で病歿した。享年三十九同所の正法寺に葬つた。法號は瑞靜信士。

海野厚

ウンノアツシ(童)

明治二十九年八月駿河國靜岡在の農村、没落の間際だつた舊家に生れ大正四年以來、花鳥畫家として一代の宗とせられた故渡邊省亭氏の息でホト、ギス派俳人渡邊水巴に師事して俳句を作つて來たが、近來子供ものゝ童謡童話の研究創作に力を入れてゐるので、句作の方は怠り勝になつてゐる。しかし氏の性格がかなり俳句の影響を受けてゐる

ので俳句を棄てゝしまふことは出来ない。つまり中絶の形だ。主として實業の日本社發行の子供のものや「サンデイ毎日」等に童謡童話を寄稿してゐる。まだ著書として纏まつたものを出しては居らないが日本趣味を有し祖先に文人肌の人を有する氏はどこまでも子供のために歌つてやらなければ止まぬと言つた若い叔父さんである。童謡の研究機關として「鳩の笛社」を起してゐるが同人は外山國彦、中山晋平、小田島樹人の四人でゐる。つまり作歌者と作曲者との親しい會合のもとに無理の無い諷ひものとして童謡を生みたいといふのである。作品は「子供達の歌」として毎集五篇づゝ刊行してゐる。

現住所 東京市外下目黒三六九

故海野勝珉

ウンノシヨウミン(彫)

彫金家、水戸の人少い時より裝劍技を學び、年二十四五の頃既に家をなした。明治初年政府廢刀令を發したので、裝劍を業とする者多く職を失つ

た。勝珉亦關口に窮したので傍ら善くする所の長唄を以て人に教へ僅かに飢を凌いだ。此の間勝珉裝金の技を美術品に應用することを工夫して成就し、加納夏雄と共に彫金の名人を以て推された。夏雄歿後は金工界に於ける唯一人と稱せられ、明治二十二年東京美術學校の起つた時勝珉其助教となり、後教授に進み、前後其職に在ること二十五年、傍ら家塾を開いて、子弟を養成した。當時の金工を以て家を成す者で勝珉の薰陶を受けない者が無い。のち帝室技藝員に擧げられ從四位勳四等に叙せられた。大正四年十月十八日病歿し、東京染井墓地に葬られた。

故海野美盛

ウンノビセイ(彫)

彫金家、水戸の人盛壽勝珉の兄、三たび海外に遊び歐洲技術の長を採つて一家をなし、日英博覽會に鳳凰堂の模型を出して名聲を博し、大正博覽會には純金聖德太子の像を出品し、大正天皇御即位の大典に献上した鳳鸞は其の製作である。のち東京

美術學校教授に任じ、從五位勳五等に叙し特に帝室技藝員となるべき詮衡を経て御裁可を得ようとした際、大正八年九月二十二日病歿した。年五十七。特に正五位に陞叙せられた。

工の部

江川成之 エガワナリユキ(書)

嘉永五年二月十三日三重縣に生れ。父は約行と言ひ氏は其の次男である。近情居士と號し別に春雲月心、兩日菴、夜春房等の號がある。夙に漢學を修め次いで松阪の三井半痴に從つて書法を學んだ。慶應より外宮宮崎文庫講堂に於て臨池の事に從ひ、専ら高野山の弘法大師流を慕ひ、これに貫名海屋を參酌して一流をなした。明治二十五年書學會を開いて書法を授け門下頗る多い。一時山田中學校習字教授を囑托せられたこともある。氏はその性質古物を愛して蒐集する所の内古器物古書畫は頗る多いといふことである。近頃其の消息を詳

にしない。

現住所 伊勢國度會郡宇治山田町大字中島町

故江木冷灰 エギレイカイ(詩)

名は衷、前の文部大臣江木千之氏の令弟で且つ其の後繼である。法學博士であるから世人は普通氏を呼ぶに冷灰博士の名を用ゐてゐる。詩を巧みにして隨鷗吟社の協賛員である。夫人欣々女史も亦中島歌子門の閨秀文人として知られ、特に漢詩を善くする。大正十四年五月病歿した。

恭趨新年和歌題意

玉龍戰退 曉光新。 幻出山河草木春。
天下風流誰是主。 看他訪戴上舟人。
瑤屑繽紛粧陳夢。 空林枯木一朝榮。
休言萬象無生氣。 城外仍聞凍雀聲。
遠近山莊之作
青山如佛白雲仙、 雲自無心山欲眠、
山色昏々入三昧、 去來雲影別開天。

汝知大義記吾言、 遺訓丁寧淚欲吞、
荒驛只餘松一樹、 冷烟寒雨弔忠魂。

江口 渙 エグチキヨシ(小)

明治二十年七月二十日東京麹町區富士見町に生れた。父は襄と言つて少將級の軍醫を勤めた醫學士である。氏は東京帝國大學英文科に這入つたが半途で退學した。處女作「かゝり船」を「スバル」に發表して以來評論や小説を書き、現時評論壇に於ける活躍を續けて居る。著書として長篇小説「性格破産者」短篇小説集「赤い矢帆」「或女の犯罪」「勞働者誘拐」「惡靈」評論集「新藝術と新人」童話集「木の葉の小判」等を出したる外、最近に評論「階級と藝術との關係を論ず」「藝術か愛か」感想「結婚生活の分裂の後に」小説「崩されたる團體」「最後の夜」「峠」「無數の寫真機」「留置場の一隅にて」等の諸作がある。評論の態度は随分峻厳で思ひ切つた言ひ方をするが、感情的に議論をするやうなことはなくどこまでも純理でおし詰

めて行くといふ態度に見える。又社會運動にもたづさはつてゐることは世の知る處である。新作「戀と牢獄」は進んだ社會思想の一青年と個性に目覺めた一婦人記者との性愛關係や生活苦を描破したものである。「崩されたる團結」は家主の屋賃値上げに對して借家人が團結して反對するが、結局家主の術策に陥つて團結が崩されて終ふ経路を川瀬といふ人物の心理を透して描いたもの、「無數の寫真機」も勞働者「源」といふもよく描出してこの階級問題にふれ、「留置場の一隅にて」も知識階級勞働階級の問題を取扱つて一般の注意を惹いた。

現住所 東京市小石川區宮下町四

依知川朝陽 エチガワチヨウヨウ(詩)

名は敦、下總の人、夙に土屋鳳洲の門に學び、詩を善くして雅文會員中鏘々の聞えがある。其の詩は「斯文」「大正詩文」等に寄稿してゐる。

山中偶得(節二)

驟雨過梧竹、奇涼漲小庭、山人睡醒處、
簾外數峯青。品茶且論水、空谷養吾眞、
綠竹三千尺、書窓覺有神。

咏菊壽土屋鳳洲先生

道勝者文至、德高者氣純、一理之攸發、
粲然物與人、山中霜初下、籬菊方挺然、
綠葉何蔚蔚、黃花自絕塵、高秋雖氣凜、
馨香猶必芬、吾師鳳洲翁、聖學修厥身、
壽既躋八十、文章世皆珍、督學麴溪上、
講道礫水濱、淵默尙存養、經說戒效顰、
竊思若先生、菊花當同倫、菊花待先生、
其色愈加鮮、先生得菊花、其樂將無垠、
祝壽引是花、比擬洵得眞、天道扶善類、
人物共千年、

其の詩古氣あつて浮薄で無い。また羅馬滞在の中
の姉崎博士に二莖の春蘭を贈り次の詩を得てゐる。

春蘭挺二莖、猗々競其美、白肖白雪白、
紫滅紫雲紫、長將託幽心、萬里贈君子、
現住所千葉縣香川郡吉田村山崎

りであつて、氏は凡てに於て舊道徳舊思想を破壊
し、新道徳新思想を建設しようと努めてゐるとい
ふことである。多くの人は性欲即戀愛であると考
へてゐるが、氏はこの兩者に截然區別を立て、年
少時代既に男操俱樂部を組織したことがある程で
ある。三卷の「新約」大に版を重ね、續いて「舊
約」を出した外に、氏には「江原短篇集」「心靈
學」等の著がある。尙氏の著「復活」はイエスの
復活、タルソのサウロ、サウロの聖地行迫害、使
徒とユダ、等の五篇より成り、「女子多面」は發
狂して自殺した女、情夫に殺された女、苦惱の日
を送る人妻、嬰兒を殺して入獄した女教師、其他
の變態的な六人女主人公に對する十數人の男子と
それに伴ふ複雑なる事件を描いた長篇の大作であ
る。近く「親鸞」を取扱つたものも書いたが、近
來流行の「人間としての親鸞を描いてゐる。弟子
の情事を嫉んだり、都の妻子を戀しがつてさめざ
めと涙を流したりして、その弱い醜い一面の人間
的暗黒の部分を書いてゐる。聖人として佛様とし

故榎本虎彦

エノモトトラヒコ(劇)

演劇作者、紀州和歌山の人で福地櫻痴に師事し、
明治二十三年歌舞伎座の開かれた時入つて作者と
なつた。其後やまと新聞の記者となり、二十五年
再び歌舞伎座に入り、櫻痴の歿後立作者となり、
幾多の脚本を草して好評を博した。就中「南都炎
上」「名工柿右衛門」最も稱せられた。大正五年
の夏上場せる「院本黒塚」は其最後の作である。
同年十一月十六日歿した。享年五十一深川法善寺
に葬つた。

江原小彌太

エバラコヤタ(小)

明治十五年十月新瀉縣刈羽郡柏崎村に生れ、教師
記者、會社員、海員、商人等になつた。氏は「新
約」「舊約」を出して以來、急に其名が世間的に
なつたがこの人の生ひ立ちは何と云ふに、氏は
幼時數人の假親の爲に苦しめられた結果、親子の
關係の觀方も餘程變つてゐるし、夫婦關係も亦然

て仰慕してゐた親鸞がこんな人かと思つて、正視
するに堪へぬ人もあらう。前に赤裸々のキリスト
を描き、後にこの人間親鸞を書いた。倉田百三氏
の「出家と其弟子」以來、宗教的なものが流行し
て、「人間親鸞」「女性を體認せる親鸞」「嗚呼
蓮如」「親鸞全集」「親鸞讚仰」「念佛の師弟」「眞
宗の世界」「法然上人」「法然」等淨土もの、外、
「經典と劍」「うまぶね」「基督の血によりて」「地
に惱める釋迦」「聖愛」「マホメット」「彼岸の夕」
等戯曲に小説に或は單行本とし、又は雜誌を創刊
して、すばらしい勢を呈してゐる。一方聖人賢人
の如く一部分の人より崇拜的となつてゐた人々
殊に文章家の情事が頻々として暴露するに及んで
宛も人間基督人間親鸞を現實に見るやうな感じが
して、こゝに一脈相通する或るものに接して、悲
哀と痛嘆とを禁じ得ない者が少くないやうであ
る。

現住所東京府下玉川新町

故江馬天江

エマテンコウ (詩)

京都の書家、名は聖欽、字は永弼、通稱は正人、天江は其號である。文政八年十一月三日に生れ、生れて齒二枚あつたので人はこれを異とした。幼名貞吉、江州阪田郡下阪中村の舊族下阪幸内の第六男である。幼より讀書を好み夙に才名があつた。十八歳の頃醫を學び、後京都の榴園江馬權之介といふ仁和寺宮侍醫の養子となり、駿吉と改名し仁和寺宮に仕へた。次いで緒方洪庵に就いて洋學を修め傍ら詩作を好み、梁川星巖の門に入つた。當時廣く諸名士と交を結び最も正義を固持し、慶應二年王政復古の際、仲兄板倉筑前介(淡海介堂)と共に徵士となり筑前介は大津後參謀に任じ、氏は太政官史官に任ぜられ、通稱を正人と改めた。明治天皇御即位の節衣冠笏履を賜ひ、且つ大典に列するの榮を擔つた。明治二年官を罷め居を東山に移し帷を下して生徒に教授して。西園寺公望侯學校を設立するに及んで賓師の禮を以て氏を聘し

た。後林下に優遊して意を臨池吟詠に用ゐて書名詩聲關西に鳴つたが明治三十四年三月八日死した。享年七十七。

南朝遺蹟

老木陰 森苔逕荒、 鶯愁花 泣總傷神、
春深來吊南朝跡、 古寺無人鎖夕陽。

一目千本

澆季其如薄俗何、 延元陵畔亦絃歌、
看花只道芳山好、 看到芳山感更多。

生前の住所 京都市上京區柳馬場姉小路

江馬 修

エマナガシ (小)

二十二年十二月十二日飛彈國高山町に生れた。斐太中學を半途退學して田山花袋について創作を學んだが激烈な神經衰弱に罹り、ツルゲネエフのエフナ(十分)を讀んで極度に憂鬱に陥り幾度か自殺を企てた事がある。死なうとして死ぬ事が出來ず日蓮宗の一寺院に入つて僧となつた事もある。四十四年に初めて處女作「酒」を公にして新進作家

生れ、東京府立第四中學を中途退學して、仙臺陸軍幼年學校に入り、中央幼年學校を経て近衛歩兵第二聯隊士官候補生となつたが、意を決し方向を轉換して早稻田大學文科に入り、大正九年卒業して今日に至つた。現に早稻田大學講師として母校に在つて教鞭を執つて居る傍ら多くの文藝評論を書いてゐる。近く評論「杉森孝次郎論」「倉田百三論」「職分と境遇」「現代感傷主義への投擲」「主張たる文學と快樂たる文學」等を「早稻田文學」「大觀」「新潮」「學生評論」等の諸雜誌や「東京日々新聞」等に發表してゐる。

現住所 東京市外西大久保六一

江見 水蔭

エミスイイン (小)

名は忠助、明治二年八月岡山市に生れた。十五歳上京して天台居士杉浦重剛翁の稱好塾に入つたが塾生の時既に大町桂月、巖谷小波等と共に小説を作つた。詩趣豊かな短篇を作つて異彩を放つた。花袋、玉茗等と共に江水社を起して雜誌「小櫻絨」

江間道助

エマミチスケ (評)

として認められた。大正四年の秋約千枚の大作「受難者」を完成して好評を博し、詩人福士幸次郎氏と共に雜誌「ラ、テール」を出した。評論家阿部次郎氏と共譯のストリンドベルヒの「赤い部屋」「地獄」トルストイの「幼年少年」等の譯がある。武者小路實篤氏と親しく、その作の色彩白樺派に近いと言はれた。右の外長篇「暗礁」「不滅の像」「運命の影」戯曲「訪るゝ女」創作集「櫻の葉」「三つの木」小品感想集「小さき窓」等の著がある。戯曲に於ては時に未だしと思はるゝ點もあるが、小説に於ては時に一讀三嘆に價する妙味をもつてゐるものがある。尙最近の作としては小説「歓迎」「記念のために」「朽ち行く彫刻」感想「レンブラント」「悲しむべき傾向」「現代婦人の新傾向」等がある。

現住所 東京市外代々木初台六〇九

明治二十七年八月九日東京府豊多摩郡大久保町に

を發行し、同二十二年の頃尾崎紅葉、山田美妙齋等の硯友社と合併して斯文の發達を計つた。のち讀賣新聞神戸新聞等の記者となりついで博文館に入つて「大平洋」「少年世界」等の編輯に従事したが、今は専ら石器の發掘に興味を有して石器蒐集家として考古學界に活動し通俗小説を諸新聞や面白俱樂部等に載せてゐる。「絶壁」「水の聲」「炭焼」「女房殺し」等何れも當時に喧傳せられた名篇である。近くは新講壇「海老藏本鎧」といつたやうなものにまで手をつけて一般の家庭を目あてに通俗的なものを書いてゐる。

又近く著した「探偵實話黒猫抱いて」のごときものを見るに興味中心の面白い話を集めたもので中には「男を忌む女」「泣き入る女」「貴夫人の指」「湯好きの女」「黒猫抱いて」「死美人の聲」「船幽霊の笑」等十篇を集めて極めて通俗的に興趣溢るゝものである。氏はまた小説創作の餘技として俳句を善くする。

水かさか吳越同醉沖鋒

陶器繪の初筆冷めたき且かな

本來は菊より芋を作る男

頼まれてカルタ張る身や年の暮

吾庵の梅に香なきぞ恨なる

筑波峯やそれからつゞく雲の峰

現住所 東京府下品川小倉山二五二

故遠 藤 足穂

エンドウタリホ(歌)

幼名を嘉平と言つて上野國館林町に生れ、同國足利町吳服商小佐野商店に丁稚奉公をした。しかるにその店主は頗る和歌を好んで當時第一流の國學者であり歌人なる橋守部の門に入つた。足穂はその勤務の傍ら夜間は讀書習字の研究練習に全力を盡して、大に奮勵するところがあつた。殊に店主の影響感化によつて、歌道に大なる興味をもつてゐた。晝は商事に勵んで夜間人静まつて書に對するけれども、その勉學の時間の少いのをかこつてゐた。終に主人の許を得て親しく橋守部の教を受けるに至つたが、三十歳の時下野國佐野町の素封

家遠藤猪右衛門の婚養子となり、六十歳の時長女に婚を迎へて、隠居して専ら歌道を樂しんだ。且つ氏は身素封家の主人でありながら頗る平民的思想を有し、其の所懐を「米國獨立歌」にあらはしてゐる。明治二十三年十二月六日年七十七歳で病歿した。「稻廼家長歌集」はその家集である。

大泉 黒石

オオイズミクロイシ(小)

名は清、明治二十六年十月二十一日長崎崎市八幡町八幡神社境内に生れ、日本と佛蘭西の小學校と中學校、それから第三高等學校と第一高等學校に學んだが卒業はしない。「俺の自叙傳」や「俺の見た日本人」其他の文によつて見ると、父は露西亞人で母は天草島の人のやうだ。筆は頗る達者で縦横自在である。大阪朝日に「戀を賭くる女」を書き諸雜誌にも寄稿した。前途有望の文士であるが、泡鳴式の傲慢な筆癖のあるのは氏の文の題目を見ただけでも分るのである。過去の生活は奇々怪々數奇を極めたもので國際的

浮浪人を以て自ら任じてゐる。ありとあらゆる人間の善惡の行爲を悉く世界的にやつてゐる痛快な人である。文章の明快は文豪漱石を思はせるものがあり、而も想華絢爛として大魅力を含んでゐる。氏はルソオの懺悔心も、トルスイトの遁走心も、ドストイエフスキイの愛も、ツルゲネフの自由解放も、ガンヂーの無抵抗も、皆老子を學んだのでは無いかといふ見地から、氏の奉ずる浪漫主義の立場から、純藝術的の哲學小説「老子」を書いた。大に迎へられたので更に「老子とその子」を出した。氏の著には右の外文學史の方面に於て、「露西亞文學史」がある。最近の作には小説「江戸つ子」の外隨筆「ある頃の俺この頃の俺」等がある。尙日本活動寫眞株式會社向島撮影所に新設された脚本部へ顧問として入社した。氏が同社の映畫劇に撮影するため原本としての小説や物語を集めて、「血と靈」を出したが、これには「血と靈」「貴夫人の手」「天女立像」「女人面」「聖母觀音」「赤い船」「犬儒哲學者」「俠盜」等九篇を收めて

ゐる。映畫劇の原本だけに興味深いものが可なり多いから唯讀本だけでも歓迎されさうである。

現住所 東京市外長崎村五郎窪四二二三

故大出東臯

オホイデトウコウ(畫)

名は絢、字は素巧、通稱愛次郎、東臯は其號で別に蝸牛窟の號がある。天保十二年四月四日江戸神田に生れた。父を五郎兵衛光雄と言つた。氏は九歳の時前原五瀬に畫を學び二十歳の時に江戸に出て藤堂凌雲につき専ら花鳥を研究した。元治元年年二十四諸國漫遊の途に上り、遍歴凡そ十六年間その技大に進んだ。會て日本繪畫協會の共進會に於て銀牌を受領し、爾來内國勸業博覽會、日本美術協會の展覽會、京都後素協會の共進會、名古屋の全國繪畫共進會に於て妙技銅牌及銀杯、銅印等を受けしこと數十回、又繪畫研究會より木盃及褒狀を受けしこと十三回に及んだ。又會て美術協會の秋季展覽會及日本畫會第一第二展覽會審査員となり其の出品する所の畫は多く宮内省御用の榮を

荷つてゐるほどである。氏は花卉翎毛を畫いてよく眞を寫して特に名聲があつた。明治三十八年三月十四日病歿した。年六十三。

生前の住所 東京市小石川區江戸川町六

故大江敬香

オオエケイコウ(詩)

漢詩人、徳島藩士大江孝文の長男。安政二年十二月二十四日江戸八丁堀に生れ、幼名小太郎後孝之と改めた。子琴敬香は其の號。蓋し中村敬宇を敬慕し、其の許を得て敬香と號したのである。又楓山、愛琴、謙受益齋主人、澹如水廬主人との別號がある。敬香幼より強記、藩養修文館に入つて漢學を修め、又別に英學を修め神童と稱せられ、又水泳術を學び、免許皆傳を得た。藩主より選拔されて英國に留學を命ぜられたが、祖母の故あつて遠遊の命を辭した。明治五年更に藩主の命を以て慶應義塾に入り、卒業の後一時共立學校に教鞭を執り、次で外國語學校を経て東京大學文科(理財學専攻)に入つたが病のために中途退學し、遠江

歿する前日迄筆硯を廢しない。敬香の詩は大抵獨學で自ら白樂天、陸放翁、高青邱の風を悦び最も五言律詩に長じ又其賦する所送別應酬其の他抒情を主とするものを得意とした。そして其の「敬香詩鈔序」は詩人松平破天荒齋の作になつて敬香を知るにも便である。

大木雄三

オオキユウゾウ(著)

氏は明治二十八年五月群馬縣佐波郡赤堀村大字西久保に生れ、郷里に於て中學校の教育を受けて二十歳上京轉々流浪して正則の學校には入らない。小學校教師又は新聞雜誌記者たること前後數年であつたが、雜誌「國粹」の編輯を辭すると同時に永年の記者生活の足を洗つた。著書には「街路と口笛」「童話劇集」等がある。

現住所 東京市本郷區根津須賀町二七松翠閣

大草小雲

オオグサシヨウウン(畫)

文政八年三月二十四日周防國岩國藩の城下に生れ

國掛川佐倉眞村岡田良一郎の「翼北學舎」に聘せられて、その都講となり、英漢學を教授し、旁ら病を養つた。岡田良平一木喜徳郎等其の門弟である。八月静岡の静岡新聞主幹となり、十二年函右日報客員となつた。此頃より旁詩に志し十三年三月岡山の山陽新報社に聘せられて其主筆となり八月神戸新報社員となり主筆代理となつた。當時神戸駐在清國領事寥錫温等と往來し、詩學の蘊奥を叩き大に啓發された。十五年大隈重信の改進黨を創立したる時同黨掌事補となり、六月參事院御用掛となり、尋いで東京府に出仕し、二十四年之を罷め爾來仕官しないで専ら詩文を以て自ら立ち、「詩文詳解」「學海」「精美」等の雜誌に於て詩文の普及を計つた。其體裁編纂方法は往年成島柳北の主宰した。花月新誌に則り、私かに其の遺旨を繼がんことを期したが、三十四年八月廢刊した。四十一年三月「風雅報」を刊行し再び漢學詩文の鼓吹に努め、後宮中乙夜の覽に供せらるゝに至つた。大正五年十月二十六日病歿した。享年六十。

た。幼名與四郎、後與兵衛、小雲はその號、後に之を通稱とした。藤岡甚右衛門氏の四男である。出で、大草藤右衛門氏の家を嗣いだ。性風流を好み、能く南宗の畫を作り兼ねて詩歌花茶等を嗜みこの技を以て四方に遊歴し足跡天下に半し、神社佛閣を拜する千數百に及んだ。交通不便の當時に在つては蓋し稀有の事として驚かれた。四十歳にして參禪し、觀音經一萬部を讀終つて經塔を其の墓地に立てた。氏は茶道中の七事を最も解し門人男女三百餘人あつた。茶室別莊を作ること八ヶ所西推寺、守採堂、反古庵、安閑屈、琥珀園、兔唇樵舎、容膝齋、桂山坊の號がある。書畫を作る所によつて別に愧天書屋と號した。其著に「骨董集」二十五卷、「賣筆日記」二十卷「仁壽小集」一卷ある。

現住所 山口縣玖珂郡錦見村

故大口 鯛 一一 オオグチタイジ(歌)

愛知縣名古屋の人幼名は鯛一郎と言つて慶應元年

結果であるが大口氏も其一人であつた。書は行成卿の流を汲み常に故近衛豫樂院公に私淑して居た。故落合直文氏が大口氏は歌はあまり巧者ぢやないが書は實にうまい寧つそ書家になつたらどうだと言つていたく感服したといふ逸話がある位である。

かく各種の方面に才能のあつた氏は長野縣山田温泉に滞在中腦貧血より中風症を起し一旦小康を得て長野市赤十字病院に入院して小布施院長の診療を受けてゐたが大正九年十月十三日遂に五十七歳で歿した。特旨によつて従六位勳五等に叙せられた。

あま雲のよその高峯もたかどのゝ窓にせまりて
雪ぞはれたる

ひろゝかにかしのみづえのつゆちりてしらめる
月になくほとゝぎす

菊の花咲ける山路のつゞらをり仰ぐ梢ももみぢ
しにけり

年明けてとる杯や喜びの數を重ねる初めならむ

に生れた。始め同地の伊東祐命翁及大島、三浦等の諸先輩について歌道を學び又書に巧みであつた。後宮内省御歌所寄人になつても毎日書の練習を怠らなかつた。書は流暢といふ方では無く寧ろ堅い方ではあるが漢字も假名も其堂に達したもので人格の謹嚴さは書の一劃一劃にも表はれてしつかりしたものであつた。明治二十三年録事として御歌所に入つて以來高崎正風男の指導を受け斯道に貢献したことは少くない。傍ら千種會を起して全國に五萬の門人を有するに至つた。毎年の勅題の預選者中に同會員のよくあるのを見ても氏が門下生を指導するにいか力盡してあつたかわかる。御歌所參候加藤義清氏の談に「大口氏は温厚謹直の人であつたばかりでなく昔から歌人と歌學者は兎角兩立し難いのに大口氏は珍らしくも佐々不信綱君と共に此の二道を兼備し其の上書特に假名文字に堪能であつて誠に得難い人であつた近年假字文字の著しく普及發達を見るに至つたのは田中光顯伯等が難波津會を起して鋭意盡力した

神園のみ池の水あつからしふみありきつゝ子らの遊べる

今に知る大和心の守り神世にあらはれし世なりとは

生前の住所 東京市麻布區六本木町一

故大國隆正 (野々口隆正) オオクニタカマサ(國)

有名な國學者、石見國津和野藩の世臣、寛政四年に生れ、幼より學を好み、長じて平田篤胤の門に入り國學を修め、又漢籍を好み、昌平黌に入り舎長と成り業成つて國に歸り専ら國學を攻究した。

文政八年「得經談」を著し世に公にした尋で國語の著書數種ある。十一年藩の武具役となつた。偶々同僚の某に私曲があつたので隆正之を誡めたけれど聽かない。互に反目して翌年隆正脱藩して姓を野々口と改め、帷を下して門生を集め、國典を講じた。天保六年大阪に出で國學を教授し門人日に多く、其主唱する所の學を稱して、「本教本學」と曰つて、名聲噴々たるものがあつた。七年播州

小野藩主一柳末延隆正の學說を尙び聘して五人扶持を給した。隆正旨を承けて學校を創設し歸正館と稱し藩主及藩の子弟に和漢の學を授け、十二年小野藩を辭して京都に移り、其家塾を「報本學舎」と號した。嘉永六年姫路藩に聘せられ「國典を講じ、又福山藩主阿部正弘に聘せられ老臣以下其の門に入つた。隆正大に皇道の復興を唱へ尙武の國體を講明し、倭魂と題する書を著して之を正弘に呈した。夏蔭一讀大に隆正の學識を歎稱し、皇學の本源實に此書に述ぶる所の如しと爲した。徳川成齊も一讀して是皇學の骨髓であらうと言つた。夏蔭之を聞き喜んで正弘に申上り是非の論竟に定つた。三年關白鷹司政通に見え、後常に政通の門に出入して皇典を講じ皇室の復興を説いた。四年藩主龜井茲監隆正の學識を嘉みし學資として五人扶持を給し、藩養老館國學教授となし、次いで津和野及江戸藩邸に至り子弟を教授せしめた。隆正我古典を國學と稱するの穩當でないことを辯じ養老館總司に告げて之を本學と改稱せしめた修正

の學は菅公の倭魂と一條禪閣の神理とを本として本居平田二家を蟬脱して別に一機軸を出した。慶應三年廣島藩主淺野長勳に聘せられた。十二月朝廷神武創業に基くの大詔を發せられたが是は隆正の門人玉松操の議に基いたのである。操は隆正に聞く所を以て岩倉具視に説いた。既にして朝廷神祇官を再興したがこれも亦隆正の考案に基いた。操は隆正に聞くところをもつて岩倉具視に説いた。又朝廷の神祇官再興も隆正の考案に基いたのである。明治元年三月内國事務局權判事に遷り、翌月病のために之を辭し、二年黒住神道本家の請に依つて其教法を匡正し、此年「當世要語」を著し宮内省に獻じた。四年八月十七日歿した。年八十著す所「古博通解」「本級神理説」「文武虛實論」がある。大正四年十一月從四位を贈られた。

大久保作次郎

オオクボサクジロウ(畫)

洋畫家。明治二十三年十一月大阪市に生れ、後東京美術學校に入つて大正四年に西洋畫科を卒業し

文展へは第五回に「少女」第九回に「千もの」を出し、第十回に「庭の木影」第十一回に「三月の日」を出して各特選となり、大正八年帝展推薦となつた。大正十二年帝展審査員に擬せられ、十四年遂にこれを實現した。
現住所 東京府下落合村五四

那須野

極目平蕪抹暮霞、

凄涼何處一聲笳、

秋風吹入那須野、

野草無名亦自花。

次 落合東郭晃山雜詩韻

寶幢一片捲朱雲、

舉目神山鼎足分、

滿地松花薰石室、

斜陽影裡醉將軍、

中元絕句

月氣荒荒坐作煙、

靈燈如夢照寒泉、

龍頭聽得冷蛩語、

枯骨一年多一年、

故大久保湘南

オオクボシヨウナン(詩)

慶應元年十月十九日佐渡相川に生れ、幼時より慧敏であつたので神童と言はれた。碩儒圓山溟北に就いて漢詩文を學び、出藍の譽があつた。後北海道函館區役所書記となり、内務省屬に轉じた。更に大倉土木組の役員となり、遞信省屬を経て高等高業學校講師に任じ、再び北海道に行つて函館日々新聞主筆となつたが、三十七年四月上京して隨鷗吟社を創立し、四十一年二月七日病氣のために逝いた。年四十四。隨鷗吟社の今日あり、詩壇の活氣あるに至つたのは實に氏の力によることが尠くなく。

大熊氏廣

オオクマウジヒロ(彫)

安政三年六月武藏國鳩ヶ谷町に生れ、工部省美術學校に入り、伊人ラグーザに就て學び、明治十五年卒業し後伊太利に留學してアレグツチ、モンデヴェルデに就き二十一年十月羅馬美術學校を卒業した。十六年五月皇居御造營彫刻模型を作り、十八年八月獨逸バイエルン國萬國博覽會に出品して銀牌を得、二十七年三月大婚二十五年大典に兩陛下御料御馬銀鑄を造り、二十八年第四回内國勸業博

覽會に優等妙技賞牌を得、三十三年五月皇太子殿下御慶事に際し兩陛下御鍾愛の駿馬二頭の銀鑄を造り、文展には第一回より第七回まで彫刻部審査員となつた。製作の重なるものには故兵部大輔大村益次郎銅像、故有栖川熾仁親王殿下御銅像、故小松宮彰仁親王殿下の御銅像等がある。

現住所 東京市小石川區竹早町一〇一

大倉桃郎

オオクラトウロウ(文)

明治十二年十一月十七日香川縣仲多度郡本島村に生れ、幼時より郷里を去り相州横須賀に育ち、造船所圖工となつたことがある。學業は苦學に終始して僅かに國語傳習所を出たのみである。三十三年兵役に就き、三十七年の春日露役のため歩兵第二聯隊の下士として出征し旅順方面及奉天方面に轉戦し負傷二回、三十九年二月凱旋し翌四十年萬朝報社に入社し今日に至つた。「琵琶歌」「江城」「新世帯」「障子の穴」の外十餘種の著書があるが、中でも「平和の日まで」「屍の中より」の二

書は氏の苦心した傑作である。
現住所 東京市四谷區愛住町三六

大河内翠山

オオコウチスイザン(文)

明治十三年二月五日東京本所に生れ、府立第一中學校を経て私塾電波學館に入り漢學を根本通明翁に學び米人サンマー氏に就いて英語を學び三十八年大阪朝日新聞社に入り尙關西の諸新聞に家庭小説を掲載した。四十三年講談俱樂部の客員となり其の新らしき試みを講談俱樂部誌上に「新講談」と銘を打つて發表した。これが新講談なるものゝ世に紹介された初である。尙ほ氏は筆の人は口の人でないといふ定評になつてゐるが、自分で書いたものが講談の出來ぬ譯が無いと思つて居る矢先大杉榮、荒畑寒村等の一派が平易の文章に平易の講演に所謂新講談的に其の思想を宣傳するやうになつた。氏はこれらの危険思想家に對抗して道義的觀念に因る國家主義宣傳の必要を深く感じたので世間よりは古いと言はれても筆に講演に忠孝義

貞の美談を發表して今や東京の小學兒童の大半は親のやうに友人のやうに將た教師のやうに懐しみ慕ふに至つた。主として譚海、少年俱樂部、少女俱樂部、話の國、講談俱樂部、面白俱樂部、現代雄辯、文藝俱樂部、少年世界の諸雜誌及やまと新聞、大阪日本織物新聞、と地方の新聞社十五六社

コドモ新聞等に寄稿してゐる。氏は筆の人であつて經營の人では無いから嘗つてコドモ新聞をやつてゐたが廢刊し別人によつて經營されるやうになり自分は寄稿するのみである。頗る達筆だから美談叢書の如きは國史を基礎として硬軟兩様の美談を深刻に取扱つて千頁位のを毎月出してゐる。著書は右叢書の外通俗江戸史其の他數十種あつて目下は各國の驛の附近にある名所舊蹟名物等を小説化すべく計畫中である。又父君が宗匠であつたために幼時より俳句を解してゐたがこの頃は狂歌も得意に弓術碁鬪球の餘技もある。氏の祖先大河内兵庫守の足輕某の子佐橋といふのがあつたが即ち有名な曲亭馬琴である。馬琴は氏の菩提寺

故大澤清臣

オオサワスガオミ(國)

にあつて八犬傳の大部分を書いたものであり芳流閣を思ひ付かせた芳流の大額もこゝにあるのは興味のあることである。
氏は翠山の外に坂東太郎、井筒女之助、桐柯樓一夢、春の家隴、竹の家雀、鈴の家操、若菜家胡蝶などいふ名を用ゐるが坂東太郎の名で發表するのが最も多いやうだ。
現住所 東京市下谷區下根岸町五七

國學者、舊名采女、大和國添下郡都迹村の人、天保四年に生れ、初め漢學を僧定賢及橋本雄平に受け、後歌學を香川景樹の門人御影顯成及伴林光平に受け、安政四年京都に出で、壬生家の雜掌となり、又谷森善臣に就いて國史を研究する事多年、文久元年勅命によつて山陵を捜査し、其の功を以て金を賜はつた。明治二年神祇官諸陵權允となり諸陵允に進んだ。五年文部省編輯部に入り、六年出でて龍田神社大宮司大講義となり、七年廣田神

社に轉じ尋で教部省權大錄に任じ神社諸陵の取調に従事し、十年内務省權社寺局に入り、十一年三月宮内省御陵掛りとなり、十四年文部省編輯局に兼務し、又東京大學御用掛准講師等を兼ね、二十五年五月從七位に叙し、九月二十五日歿した。享年六十、氏は終身帝陵神社の調査に従事し、其考證該博周密、又和歌に長じて明治十四年勅題和歌預選に入るの光榮を得た。著す所「皇朝紀事」「文葉」その他「考證紀事」の類諸雜誌に收録せるもの多し。因みに明治十四年の勅題は「竹有佳色」といふのであつたが、清臣氏の預選歌は

ふしごとにもれる千代の吳竹のかはらぬ色に
あらはれにけり
といふ調子のよいものであつた。

大澤 鐵石

オオサワテツセキ(詩)

名は眞吉、東京の詩人、隨鷗吟社協賛員雅文會々員であつて、其作詩は「隨鷗集」「大正詩文」「太陽」等に載せられてゐる。

した。年四十二。作品には文展第一回に「穂高山の麓」二回に「深山の夏」四回に「春」五回に「やなぎ」を出品した。「水彩畫寫生旅行」水彩畫の葉「水彩畫楷梯」「寫生畫の研究」等の遺書もある。水は氏の最も好めるものであるから、作品に山中の湖沼の多いのもこれがためである。

故大須賀乙字

オオスカオツジ(俳)

明治十四年七月相馬中村町に生れた。磐城藩儒神林復所の季子大須賀筠軒の長男で、安積中學校仙臺第一中學校仙臺第二高等學校を歴て東京帝國大學文科大學に入つて國文科を専攻した。曹洞宗大學東京麹町高等女學校等に奉職し次いで東京音楽學校教授となり呼吸器病に罹つて大正九年一月二十日歿した享年四十。中學校四年級の時不圖友人の宅の運座に會したのが俳句に指を染めし初めであつた。後國民新聞の吉野左衛門日本新聞の河東碧梧桐氏選俳句欄に投句した。高等學校在學時代奥羽百文會を起してその幹事をやつたこともある

謝人贈簾

斷州笛竹卷風漪、喜比昌黎寄鄭詩、
常愛簾紋涼似水、從教簾外有炎曦。

送碧堂之山陽

祖席高歌惹興長、送君載筆上歸娘、
鷺洲西望桃花外、細雨春帆是故鄉。
海角巉巖坐巨鼈、暮天縱目渺雲濤、
滄溟擎出芙蓉雪、神代靈光萬仞高。

故大下藤次郎

オオシタトウジロウ(畫)

水彩畫家。明治三年本郷眞砂町に生れ、二十四年中丸精次郎に就き、二十九年中丸歿後原田直次郎に就いて油繪水彩畫を學び、三十一年軍艦金剛に便乗して濠洲に行き、三十五年「水彩畫の葉」を發行し、秋歐米に遊び翌年歸つて太平洋畫會創立理事となつた。三十八年春鳥會を起し美術雜誌「みづゑ」を發行し三十九年丸山晚霞、河合新藏等と水彩畫講習處を興し、又毎年講習會を各地に開いて水繪の普及に努力した。四十四年十月十日歿

三十八年末頃より東京日々新聞俳欄の選をした。四十一二年の交俳壇の新傾向を論じ東北に遊びて諸俳家と交り俳句大會に出席し、雜誌「アカネ」によつて高濱虛子等の俳句を駁した。更に四十二年頃より河東碧梧桐氏の新傾向の變化を喜ばず「懸葵」「蝸牛」等に於て屢之を駁した。大正三年より八年頃の間奥の月山に登り中尊寺十和田湖に遊び八郎瀉に巡り伯耆大山信川八ヶ嶽に登り出雲大社に詣でた。爾來「人生と表現」「石楠」「常磐木」「懸葵」の俳誌に關係し「雄辯」の選句をした。著書には「故人春夏秋冬」「俳句評釋」「乙字俳論集」「乙字選碧梧桐句集」「乙字選鬼城句集」「俳句の研究」「俳句調子論」等がある。吉田冬葉は乙字氏の遺志を紹ぎ句集「枯野」を完成するに努めた。「碧梧桐句集」は碧梧桐が前半生の句を集めてゐる。

帆の端のひたりて行くや春の水
倒れ木のある水澄めり浮寝鳥
藥喰わりなき人をだましけり

乾飯や蟻の天氣の降り晴れて
生前住所 東京市小石川區高田老松町四八

故大杉 榮

オオスギサカエ(譯)

明治十八年一月香川縣丸龜に生れた。一説に新瀉縣新發田に生れたといひ、又は愛知縣名古屋に生れたと云ふやうな種々の説があるのは、氏の父が軍人として諸所を轉任して定住無き爲に起つた誤解である。氏夙に新發田中學に入り更に父の轉任地なる名古屋地方幼年學校に學んだが、中途退學した。三十八年上京して、東京外國語學校に入つて佛語科を卒業したが、頭腦明敏語學は最も彼の得意とする處であつた。従つて歐書を読み耽る彼は早くより佛國のルソーの自由説に共鳴を感じて、我が國體とは相容れざるやうな極端な主義を懷いて居たので、其筋の注意人物となつた。我が國にも近時所謂社會主義者と稱する者が多くなつて、穩健なる思想の把持者を慳感せしめ又は其の筋の人をも困らせて居るのであるが、其の中でも

「改造」其他の諸雜誌に發表した。尙ほ世界大戰後佛國へ脱して母國に護送されし顛末を書いた「日本脱出記」は原稿整理中であつた。氏はまた自由戀愛主張者で先夫人に堀やす子があり、戀の遺恨で嘗て神近市子に頸を刺された事は有名な話であり、最後の夫人伊藤野枝との間に五人の子供があつた。

大關 五郎

オオセキゴロウ(詩)

明治二十八年十一月二十四日水戸市新島見に生れ郷里の小學校卒業後、上京して早稲田實業學校に入り、東京主計學校に學び、方向を轉じて文學創作に移り、歌集「寂しく生きて」詩集「愛の風景」童謡集「星の唄」等の著書を出して居る。現住所 茨城縣北相馬郡取手町新道中屋方

大關 終郎

オオセキトウロウ(戯)

本名は太一郎、明治二十三年十二月茨城縣筑波郡北條町に生れ、東京外國語學校に學び次いでアメ

氏は頭腦があり巧妙で深刻であるため特別に危険視されて居た。それはかの死刑に處せられて斷頭臺上の露と消えた幸徳秋水を思はせるやうな程度主義者であつた。氏は最初荒畑寒村氏等と「近代思想」を出して大に社會主義の宣傳に努め、後寒村氏と分離して「勞働運動」其の他を續刊して來た。幾度か牢獄に入り數年の間赤衣麥飲の苦楚を嘗めたが、氏はそれがために自己の信條を改更するどころか、獄中にあつて寧ろ落付いて社會學の專攻獨學をする機をつくつた。大正十二年九月關東大震災の後、同月十六日妻野枝姪橋宗一と共に、甘糟大尉等の爲に殺害されたことはこゝに更めて説くまでも無く周知の事實である。論集「生の鬭争」「社會的個人主義」「勞働運動の哲學」「惡戯」「正義を求める心」翻譯「種の起原」「民衆藝術論」「一革命家の思出」「二人の革命家」等の外に「自叙傳」「獄中記」「フアブル昆蟲記」を書き近くは「武者小路實篤論」「クロボトキンを想ふ」「勞働運動と勞働文學」其他の評論を「新潮」

リカのポストン大學文科に入つて劇文學の研究に力を用ひ、一時歸朝して暫らく東京日々新聞の記者となつたが、辭して再び外遊の途に就き、途中歐洲の大戦争に遭つて戦時中アメリカに滞留し、戦後歐洲に渡つてフランス、イギリス、ドイツ其他の各國を歴遊して大正九年の末に歸朝し、第一戯曲集「嵐」現代フランス戯曲傑作叢書十編即ちエルヴェーの「呪はれたる夫婦」ラブダンの「若公爵」ブリウの「村の娘」ドンネーの「情人」キユレルの「化石」ロスタンの「シヤントクレール」ルメイトルの「容赦」ベルンステイの「盗人」サビューの「辯護士とその娘」ベツクの「月」戯曲「蹂躪」第二戯曲集「新歸朝者」を出したる外評論に「寧ろ美術劇場を起せ」「佛蘭西の戯曲に就いて」「佛蘭西劇壇の現在と將來」「情話劇の大家とドンネー」「キユレルの戯曲に就いて」「有島氏の戯曲に就いて」等を「舞臺藝術」「解放」其他に發表して居る。氏は劇作家協會々員、イブセン會々員、帝劇來者

會々員、舞臺藝術員等として各種の劇研究團隊に關係して、其の新智識の一員として重んぜられて居る。職業は劇作であり住所は震災前横濱西戸部町七二三及び東京本郷區弓町一ノ八朝陽館支店であつた。

現住所 兵庫縣武庫郡六甲苦樂園南枝庵内

大瀧雨山

オオタキウザン(畫)

名は正治。明治四年二月山形縣鶴岡町に生れた。石川靜山、川村雨谷に就て南宗畫を學び、四十一年以來南宗畫會、日本美術協會等で屢々受賞し、日本南宗畫會評議員となり、文展へは第九回に「溪山幽邃」第十回に「山驛」を出して好評を博した。

現住所 東京市本郷區元町二丁目六六

大瀧鞍馬

オオタキクラマ(文)

名は邦雄、明治十七年十二月一日長野縣埴科郡豊榮村皆神山に生れ、日本鐵道、成田鐵道、總武鐵

道、北海道鐵道の諸株式會社に運輸課員、運輸主任、乗客主任等として勤務し、後「二六新報」「長岡日報」「長野日々新聞」「小樽新聞」「札幌新聞」「北海旭新聞」「中外商業新報」等に經濟記者、編輯長、主筆等として操觚界の人となり、更に旭川新報を創立し、専ら其經營に努めたが病氣の爲大正元年上京し、全快後日本製粉株式會社に入り、扇橋工場長、久留米支店長、商務課長、庶務課長等を勤務し、大正七年獨立して機械器具代理店を東京日本橋區堀江町に、肥料雜穀製粉問屋を同區新和泉町に設け、數會社に重役をしたが、大正十年全く牙籌を棄て、爾來主として政治經濟に關する論文に筆を執り、傍ら小説漫文等「現代」「講談俱樂部」「ダイヤモンド」「雄辯」「婦人俱樂部」「少年俱樂部」「少女俱樂部」「面白俱樂部」等へ寄稿し、「三菱王國」の著書がある。

現住所 東京市小石川區大塚坂下町一〇五

大田喜二郎

オオタキジロウ(畫)

第十一回「卓に凭りて」を出して好評を博し、浮世繪に關する研究數篇、傳説に關する二三の著があり現今有名な挿繪家の一人である。

現住所 東京市小石川區丸山町五

太田稠夫

(久佐太郎)(丘草太郎)オオタシゲオ(小)

明治二十四年六月二日兵庫縣神戸市の辯護士の家に生れ、東京開成中學を経て早稻田大學に入學し大正二年同英文科を卒業し、其の前後より文筆生活に入り、同年十二月東京時事新報に入社した。同紙に於ては主として美術文藝方面の記事を擔當し、又丘草太郎の名で小説、戯曲評論翻譯、雜文等を「新小説」「早稻田文學」「新潮其他の雜誌」に發表し、別に同人雜誌「假面」を發行して外國文學の紹介に力めた。大正九年創刊の婦人雜誌、婦人俱樂部編輯主任として大日本雄辯會に入り、轉じて讀賣新聞「婦人欄」編輯主任となつたが、目今は一切の關係を放れて原稿生活に従事してゐる。尙氏は久佐太郎の別名で「現代」「講談俱樂部

明治十六年十二月十一日京都市に生れた。初め白馬會溜池研究所に學び、後東京美術學校西洋畫科に入り、四十一年卒業し、白耳義に留學してウィットマンに就き大正二年十月歸朝した。白馬會等には前から出品してゐたが文展へは第八回に「歸り路」第九回に「薪」を出して忽ち各二等賞を得第十回に「山家」「桑つみ」「夏の朝」を出して推薦され、第十一回には「四月の野」「田植」を出した。此他、光風會等にも出品があり、大正八年帝展審査員となつた。また大正十二年大震災後秋季に日本美術展覽會の審査員を囑託せられた。

現住所 京都市外大宮村西賀茂字川上

太田沙夢棲

オオタサムロウ(畫)

明治十七年十二月愛知縣西枇杷町に生れ、白馬會研究所に入つて黒田清輝の指導を受けた。雜誌「葉がき文學」の編輯により、挿繪畫家として名を知られ、文展へは第四回に「ビヤホルの女」第七回に「カフェーの女」を出して三等賞を得。

部」等に主として通俗的なものを寄稿してゐる。因みに氏の従兄故西郷孤月氏は雅邦の女婿として横山大觀、下村觀山、故菱田春草等と共に橋本翁門下の四天王として大に期待されたものである。現住所 東京市小石川區大塚仲町四一

大谷 句佛

オオタニクブツ(俳)

名は光演、童名は光養鷹、明治八年二月二十七日京都市東六條に生れ、寺内に在つて小中學の課程を終了して、その後文學博士南條文雄、同村上專精、同井上圓了其他同派内の高識について宗乗と餘乗とを研學し、十七年九月得度、三十三年五月二十二日佛骨奉迎正使として暹羅に赴き、三十四年六月二十日眞宗大谷派副管長となり、四十一年十月十日大谷派本願寺第二十三世の法燈を續いで遂に管長となつた。氏は多藝多趣味であつて、書は幼時より諸大家に就いて學んだが現今も尙杉山三郊の門人として研鑽し、俳句は既に大家の列に入りながら河東碧梧桐高濱虛子兩大家に作句の選

評を乞うて怠らない。その句は「ホト、ギス」懸葵」等に投稿し、「春夏秋冬」「續春夏秋冬」「俳句帖鈔」「一萬句」等の諸俳書に蒐録されてゐる。餘技として繪畫、謡曲、書道を嗜んで何れも其の堂に入つてゐる。

子は寝ねて消ゆるにまかす走馬燈

いづくより我よぶ聲ぞ秋の暮

噂高き横町の娘浴衣きて

紺足袋の女の冬の鮭かな

餅配る文に日暮るゝ冬至かな

裏庭に弦音高き小春かな

現住所 京都市東本願寺

大谷 繞石

オオタニシヨウセキ(俳)

本名は正信、明治八年三月島根縣松江市に生れ、同地中學卒業後三高の豫科に入り、學制改革の爲二高に轉じ、二十九年東大英文科に入つて三十二年七月卒業し、眞言宗東京高等中學林、私立中學都文館、私立京北中學、私立哲學館、兵庫縣洲本

中學、眞宗大學、東洋大學(哲學館大學改稱)等の

教職を経て、四十一年八月第四高等學校教授となり、翌年九月英國に留學を命ぜられ四十五年二月歸朝し、大正十二年五月第十臨時教員養生所講師を兼勤した。氏は二高時代に虛子碧梧桐二氏と同窓であつた爲、勧められて句作をするやうになり上京後は直に子規庵に出入して俳三昧に耽つた。當時の同門なる鳴雪・露月・樂天・肋骨・鼠骨・虛子等とは今尙交りを續けて「回覽十句集」をやつて居る。又大學の同窓なる久保天隨・八杉蒞舟・中内蝶二の三氏と共に「新文藝」を創刊したが、これは三十四年一月から始めて十號位續いたきりで廢刊した。沿波瓊音・若月紫瀾・尾上柴舟・小日向是因氏はその投書家のうちにあつた。嘗ては種々の雜誌に氏の文を見たが、此頃では「日本及日本人」や俳句専門の雜誌等に求められる時に限り筆を執り、纏まつたものに力を用ひて居る。氏の著作十種の中小泉八雲文集の四五の二編に收められた「蟲の文學」「海の文學」及び大正十年前後三

四年の間、諸方の雜誌に載せたものを集めた隨筆集「北の國より」等は特に面白く且つ有益なものだ。又特に氏の句を見ようとするとする人は「落椿」を一讀すればよい。尙ほラフカデオハーン即ち小泉八雲氏には最初松江中學校時代に一年間教はり更に大學で三年間直接指導を受けたばかりで無く、繞石氏が大學時代父母より一文の學資を得られぬ時に當つて、先生より三年間の學資全部をみつがれたことに對して氏は罔極の恩を感じて忘れな

い。師弟の情義の美しいこと誠に其の例が少い

うだ。氏は餘技として繪畫をよくする。大正十三年三月廣島高等學校教授に轉じ勅任待遇となつた

伐株の小さき蘂二月かな

一山に響く魚板や秋ゆふべ

別るゝといふに況んや秋無月

宵の火の消えて雲となりけり

赤蜻蛉東寺に夕日残りけり

家ありや枯木の中に灯の見ゆる

奥の院鎖しに上る落葉かな

鹿笛の一つは谷に下るらし
壽の一字古りたり箸包
現住所 廣島市

太田水穂

オオタミズホ(歌)

名は貞一、明治九年十二月長野縣筑摩郡廣丘村に生れた。長野縣師範學校卒業の外學歴はない。日本齒科醫學專門學校教授で歌道に精進してゐる。「つゆ草」「山上湖上」「土煙」「拇指」「愛情」「雲島」等の外、「新譯伊勢物語」「紀記歌集講義」「短歌立言」「芭蕉俳句研究」等の著がある。潮音主幹、氏の歌には自然を詠んだものが多く技巧の繪畫的に彫琢されてゐることが其特色であつて、やゝもすると技巧のために、却つて一首の感銘を稀薄にしてゐるやうな作が時に無いでも無い。「松林月さしくれば松の葉に霧たち迷ひ河音さやけし」などを見ても道具立てが多くて煩はしく、讀後の印象が纏まり悪い。即ち内容よりも形式が勝つてゐるとの評もあつたが、近來芭蕉の境地を悟つて

大村 廣陽

オオムラコウヨウ(畫)

名は種五郎。明治二十四年十月備後國に生れ、竹内栖鳳、山元春舉、都路華香の諸大家に就きまた京都繪畫專門學校に學んだ。四十一年以來、京都美術工藝學校、京都美術協會に於て屢々受賞し、文展へは第五回に「休み」第六回に「水牛」第八回に「せんたくもの」第九回に「初夏」第十一回に「はぜの木」を出して屢々褒狀を得た。
現住所 京都市御池堀川東、竹内方

太田原宗悦

オオタワラソウエツ(書)

舊幕士、嘉永二年生れた。名は清明、宗悦は其號である。彭又齋一巢の別號がある。初め飯島墨菴に就いて書法を修め、後松平宗柏に従つて茶道を學び、松雪庵と號し兩道を以て業としたが何れも其奥儀を極め且つ教授の方法よろしきものがあるので門人の進歩は著しいといふことである。近來其の消息がわからない。

來たので、一轉期に向つてゐるとの事である。最近の作に和歌數百章の外隨筆「心縁を辿りて」評論「田端夜話」研究「芭蕉研究」等がある。

夢とあひ夢と別れはつらかりき花ほの白き明け方の空
別れ來しみ母を慕ひ父をこひ常世の坂に袂ふりけむ
千曲川岸のうばらに春行きて卯木に老いし渡守る子よ
ひとり身の旅におぼゆる憂きおもひ干瀉に鳥よをちかへり鳴け
汐ぐもり午より吹き立つ南風に死ぬけはひなる海ぞひの町
こまやかに枝さしかはす青松の葉群のもやひ晝の雨ふる
松林月さしくれば松の葉に霧たち迷ひ河音さやけし
現住所 東京府下田端二八二

以前の住所 東京市本所區小泉二一

大智勝觀

オオチシヨウカン(畫)

名は恒一、美術院同人、日本畫家。愛媛縣の人、明治三十五年東京美術學校日本畫科を卒業し、各種の展覽會に出品して屢々受賞し、文展へは第七回に「雨の後」を出して三等賞を克ち得て名聲を博し、大正三年日本美術院が再興した時其第一回に「聽幽」を出し、其の天才を認められて、同人に推され、第二回に「四季」第三回に「蛇が池」第四回に「わだつみの宮」「桃の島」を出し大正十二年大震災後の院展には「島四國の一日」の力作を出して益々其技の冴えを示してゐる。
現住所 東京市牛込區余丁町六九

故大塚楠緒子

オオツカナオコ(小)

女流作家、土佐の人名古屋宮城及東京各控訴院の判事をした大塚正男の息女で、御茶水高等女學校卒業後入夫保治博士に配した。容貌端美にして頗

る才識があり、音楽歌文繪畫より裁縫割烹に至るまで能くしないものは無い。小説は初め尾崎紅葉の作風を愛し、後夏目漱石に私淑した。「露」及「晴小袖」「相合傘」等の文何れも萬朝報、中央公論等に出で、世人の注意を惹いた。「空柱」は作中の最長篇であつて東京朝日新聞に連載した。又好んで新體詩を作り、日清戦争の際軍歌を作り、雑誌太陽に掲載した。偶々出征中の某軍隊中之を愛讀するものがありて。直に之に音譜を附して戦に臨んだ。一隊之を齊唱して敵中に肉迫した。軍氣大にあがつたので軍隊は花瓶を贈つて感謝した。別に二三の脚本があつて女史の多方的天才を證してゐる。明治四十三年病に罹つて靜養中十一月九日歿した。享年三十六。

大塚保治

オオツカヤスハル(美)

群馬縣平民小屋右兵衛の弟で明治元年十二月二十日に生れ同二十八年大塚正男の養子となり大正五年十二月分家して一家を創めた。明治二十四年帝

國文科大學を卒業し進んで大學院に這入り同二十年獨佛伊三國に留學を命せられ在留五年の後同三十三年歸朝し東京帝國大學文科大學教授に任ぜられ現に其職にあつて美術史や美學を講じてゐる。是より先同三十四年文學博士の學位を授けられた。氏はあまり筆にも口にも發表せぬから注意されぬが美學に於ける造詣の深さに於ては現今第一流の學者である。氏は謙遜な篤實な學者で、明快な頭腦を深く藝術及藝術學の研究にひそめ、博識にして一家の見識があり、眞に文學を解するもの東大に夏目漱石以後此人を推すべしと言はれてゐる。先の夫人は有名な閨秀作家故大塚桐緒子女史であつた。

現住所 東京市本郷區西片町一〇、ろ二

大槻如電

オオツキジョデン(漢)

巖手縣磐井郡の人、名は修二、如電は其の號、蘭學者醫師大槻磐水の孫、近古史談の著者として名

高き大槻磐溪の長子、字書「言海」の著者大槻文彦博士の實兄で篤學の聞え高く、國史に通じ又戯文を善くして才名がある。鉛槧に従事して夙に操觚界に名を知られた。著書に「東西年表」「東洋文國史」等の著がある。

さくもよしちるもよし野の山さくら雪のきぬ傘

一目千本 (端唄)

現住所 東京府下日暮里町金杉大槻文彦方

大槻東陽

オオツキトウヨウ(詩)

東京の儒者、名は誠之、字は仁壽、東陽は其號である。神奈川縣に生れ、幼時より學問を好み壯歳出で、大槻磐溪について漢詩文を受けた。後帷を東京小石川に垂れて數年の間教授した。文久二年幕府に徴されて茗溪齋に勤め、維新革命の際廢學して専ら心を彫蟲に潜め、經史を校刻すること若干部、後林道春臺命を受けて撰むところの本朝通鑑稿本や、湮滅に歸するを憂ひ、其裔孫林昇及加藤千浪等と相謀り原稿二百五十卷を刪定し、全部

八十四卷とした。この事業については文部卿大木喬任伯の贊助によること大であつた。老齡尙鑿鑿として未だ嘗て一日も手卷を釋かない。且暮詩文書を翫誦するをもつて老後の樂とした。其編著「詩文良材」「標注春秋左氏傳校本」等數種ある。近來其消息を聞かない。

以前の住所 東京市牛込區東五軒町五五

大槻文彦

オオツキフミヒコ(國)

號は復軒、仙臺藩士大槻磐溪の二男大槻如電の弟で弘化四年十一月十五日に生れた。初め幕府の林大學頭の門に入り漢籍を學び尋で開成學校又は米人に就いて英學を修め明治四年箕作秋坪の英學三文學舎の塾長となつた。同五年文部省に出仕し同六年宮城師範學校長に任ぜられ同八年文部省本省に轉じ、日本辭書「言海」の編纂を命ぜられた。同十六年音楽取調掛兼勤となり同十七年文部省奏任御用掛に進み同十九年第一高等學校教諭に任ぜられ同二十五年宮城尋常中學校長宮城圖書館長に轉

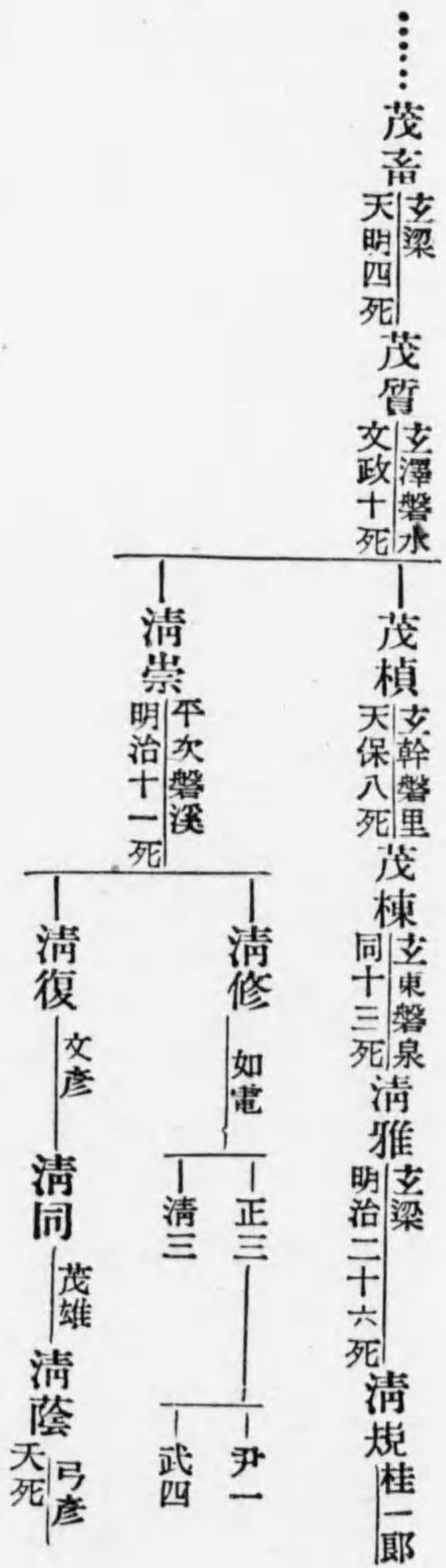
じ同三十年高等師範學校國語科講師となり同三十二年文學博士の學位を授けられ爾來帝室博物館列品鑑査掛文部省國語調査委員會主査委員となり同四十四年帝國學士院會員仰付けられた。著書は「言海」「廣日本文典」「同別記」「伊達騷動實錄」其他十數種に及んでゐる。氏の父磐溪翁の近古史談も有名なもので多くの愛讀者が居たものであつたが「言海」の愛用者はそれ處で無い。今日でこそ漸次よい辭書が出たが當時の辭書としては役立つものであつた。外來語の説明中如何と思はれるものも無いでは無いが外國語の智識の進歩せぬ當時としては珍らしく思はれた説が澤山あつた。但し博士の外國語に對する智識に祖父磐水に負ふ所が尠くない。廣文典や同別記も整頓した我が國文法書の嚆矢といふべきものであつて、この著書だけについて言つても博士は我々が一日も忘れること

の出來ぬ大恩人である。現に「言海」の大改訂に着手してゐるが立派なものが出來るに違ひない。氏の家は磐井川の名勝地嚴美溪附近にあつて代々の學者を出したが、美作の吉井川沿岸津山に於ける箕作一家と類する處があるので世の人はこの二家を並稱してゐる。現に帝國學士院會員に擧げられてゐる。子が無いので故人となつた實兄文學博士大槻如電の二男農學士茂雄を養子とした。

無題

幾道筧 泉煙噴騰、 人家據 壑路登々、
 半空屢氣衝 雲起、 重閣飛 樓層又層、
 枯草 蘇兮病骨仙、 四方萬客誇 靈泉、
 闔鄉浴 得浴餘水、 又浴山 村幾頃田、
 興疾 溪山客萬千、 煙霞笑 我枉流連、
 浴餘剩得 一枝筆、 草起香湯 志幾篇、
 現住所 東京府北豐島郡日暮里町金杉二五八

(略系)



大坪正義

オオツボマサヨシ (畫)

名は正吉。明治七年四月東京市に生れ、畫伯山名貫義に就いて土佐派を學び、日本美術協會歴史部評議員となり、文展へは第六回に「雪見の御幸」第七回「管絃」を出して褒狀を得、又「納涼」を出して好評があつた。
 現住所 東京市牛込區大久保余町五〇

故大沼枕山

オオヌマチンザン (詩)

名は厚、字は子壽、幼名は捨吉、江戸出身の有名なる詩人である。父は竹溪と言つて尾張侯の儒者であつたが枕山の幼時は家道頗る振はないで、枕山は弊衣破履實に見るも哀れな生活をした。菊池五山翁を訪うた時は其の家の人枕山を乞食と思つて入れなかつたとさへ言はれてゐる。後大にその詩才を認められて名聲を博し、梁川星巖、鹽田隨

齋大窪詩佛小野湖山等と相交り、下谷吟社を起した。植村蘆洲溝口桂巖杉浦梅潭中根半嶺等の諸家皆こゝに従學した。明治二十四年九月十三日中秋の詩を賦し十月一日病篤く下谷の花園町の自宅に於て歿した。年七十四。枕山詩鈔、房山集、江戸名勝詩、咏物詩選、絶句詩鈔、歴代詠史百律、日本詠史百律の外遺稿少くない。

中秋作

良宵逢著別般良、

俯仰乾坤寄賞長、

山豹助晴先歛霧、

河蟾消暑不順霜、

豊年分此多禾邑、

明月添他幾種光、

報答豊明期底物、

詩排千句賀千腸、

東台

吹到幾番花信風、

東台春色日冲融、

今朝殊覺鐘聲緩、

來自香雲暖雪中、

蘆洲夜月

釣船閑在柳根沙、

渡口潮來月欲斜、

橫玉一聲人不見、

半篙撐雪入蘆花、

春寒絶句

一四二

嫩草如煙翠色加、
綠來小雨墜烏紗、
出牆紅杏多酸態、
一夜春寒瘦了花、

八幡公踰勿來關圖

韜鈴餘事亦詞雄、
詠向關門駐鐵驄、
部伍令嚴春晝寂、
白旗不動落花風。

故大西 祝

オオニシハジメ(文)

元治元年八月岡山に生れ叔父大西定道の後を嗣いで大西姓を冒したが父は木全正修といふ岡山藩士であつた。氏幼より穎悟讀書を好み、同志社に入り在學八年學力拔群常に優秀の成績を得た。明治十八年東京大學豫備門に入り、次いで大學に進み哲學を専修し、毎學期特待生となつた。二十四年東京專門學校の聘に應じて、哲學、心理、倫理の諸科を講じ、又高等師範學校講師を囑托された。傍ら六合雜誌を編輯し丁酉倫理會を起した。三十一年二月歐洲留學を命ぜられ獨逸イェーナ大學に學び、後ライプチヒ大學に轉じ、傍ら歐洲諸國に遊び見學觀光した。しかし元來蒲柳の質故屢々病

魔に冒された。三十三年文學博士の學位を授けられ又京都帝國大學講師を任せられたが、病氣のため就職することが出来ないで歸郷靜養加療したが十一月二日遂に歿した。享年僅かに三十六。氏は頭腦明敏博覽強記、一度眼を晒したものは終生忘れぬ。従つて哲學と論理とは氏の最も所長であつて、やがて氏の哲學大系を作りあげたものはこのためである。語は英佛獨伊羅典の諸國に通じ後更に希臘語を修めた。思想深遠にして眞理を闡明し學界に貢獻するところ實に尠くない。而も氏の論を進む時必ずしも難語難理を用ゐぬ。極めて平明に諒々と説いて、しかも眞理の根柢に徹しなければ止まぬといふ處が、單に學者としてゝは無くして學校の教授としても生徒に喜ばれたわけである。早稻田と言へば文科、早稲田文科と言へば坪内逍遙を頭に浮べるが、彼等生徒に同校教授の中で文學的感化を與へたものが坪内博士であり、それに廣さと深さを與へる哲學的要素を供給したものは確に大塚保治博士と大西祝博士の二人であつた。

故大野 幸彦

オオノサチヒコ(畫)

本姓は會山。鹿兒島藩に生れた。年少の時東京に出て工部省美術學校に入り、サン、ジヨベニトに

就て洋畫を學び後、友人と共に美術會を組織し、美術學校を起したが振はなかつた。其重なる作品は「武者試鶴之圖」「弓術の圖」及び「皇后陛下御肖像」等である。明治二十五年年三十四歳で病歿した。門下に岡田三郎助、和田英作、三宅克己、中澤弘光、玉置金可、矢崎千代二等の名家がある。

故大野洒竹

オオノシヤウチク(俳)

俳人、名は豊太、洒竹は其の號、熊本縣玉名郡彌富村の人上京して東京帝國大學醫科に入り、夙に俳句を好み、精神を之に傾けて醫學を怠つたので父の怒に觸れ其の俳書は悉く燒棄せられた。卒業の後東京にて開業し大野病院を設けて其の院長となり、専ら生殖器療養をなした。然し宿好の俳諧は之を息めず再び俳界に出入し、又珍本古書の蒐集を好み之が費用を惜しまず爾來俳名は醫名を掩ふまでに上達した。大正二年十月十二日歿した。享年四十四東京青山に葬られた。尙ほ數萬卷

の多き氏の俳諧に關する藏書は、後悉く皆東京帝國大學圖書館に寄贈されたので、同大學國語研究室に保存されて同方面の學者に多大の便宜と利益とを與へて居たのであるが、大正十二年九月關東に於ける大震災火災のあつたとき、全部烏有に歸してしまつたのは誠に惜しいことである。

丸窓のがたつく明けの吹雪かな。
國を去つて一笈重き霞かな。

松ひよろり春雨糸の如く降る。

永き日を洒落ばかり言ふ男哉。

橋朽ちて杭一二本水馬。

大野隆徳

オオノリュウトク(畫)

明治十九年十二月千葉縣山武郡福岡村に生れ、中學時代に堀江正章に就て洋畫を學び、後東京に出て菊版研究所に入り、一年後東京美術學校に入り四十四年卒業した。同期の卒業者と共に赤蘂會を起し、又最初の二科會の鑑査委員に選ばれたが辭した。文展には第三回に「日本橋」第六回に「落

葉を拾ふ兒童」第七回に「池畔夕涼」第八回に「花壇のほとり」「散歩」第九回に「麥はたき」を出して褒狀又は三等賞を得第十回に「高原に働く人」を出して特選の名譽を負うた。第十一回に「山國の收獲」を出した。大正七年支那に遊び、後に光風會會員となつた。

現住所 東京市外巢鴨村新田七六六

故大橋乙羽

オオハシオトワ(文)

名は又太郎、乙羽は其號、明治二年羽前國米澤に生れた。渡部治兵衛の一男である。幼時上京して文學を修め竟に小説紀行文家となつた。後博文館主大橋佐平氏に認められ請はれて遂に其の女婿となつた。寫眞術の未だ幼稚な當時に在つて氏は既に其技を練り、到る處の自然美をカメラの中に入れて歸つたものだ。氏は好んで山紫水明處に勝景を探り足跡殆んど海内に遍かつた。其遠遊を紀するものは「千山萬水」「續千山萬水」である。當時の紀行文の中珍らしくも多くの寫眞繪挿入があり且つ

文章が平明で面白いといふので好評があつた。其他「耶馬溪」、「初子集」、「風月集」、「藤侯實歴」、「花鳥集」、「名流談海」、「若菜籠」、「累卵之東洋」等の著を合せて之を乙羽十種といふのである。明治三十四年六月一日齡僅かに三十三歳にして夭折したので世人は甚之を惜しんだ。樋口一葉女史の文才が世に認められたのは乙羽氏の仲介によつたのであつて、女史の處女作は乙羽氏の紹介によつて始めて太陽に載つたのである。

生前の住所 東京市小石川區戸崎町一六

大橋翠石

オオハシスイセキ(畫)

名は宇一郎。慶應元年四月美濃國に生れ、攀山の子渡邊小華に就て南畫を學び、動物畫を得意とし明治二十八年、第四回内國勸業博覽會に褒狀を得たのを始めとして、三十六年第五回内國勸業博覽會に銅賞、三十三年佛國巴里萬國大博覽會に金牌、米國聖路易博覽會に金牌、四十年の東京勸業博覽會と四十二年日英博覽會に二等賞を得、其他諸所

に出品して受賞が多い。大正七年一月橋本關雪等と神戸に神戸繪畫協會を起して盡すところがあつた。門下に三尾吳石等がある。
現住所 兵庫縣西須磨

大橋 房子

オオハシフサコ(小)

明治三十年十二月六日東京芝區公園十八號の五に生れ青山女學院英文科を卒業した。愛とは何ぞといふ問題に對して若き目覺めた女性の純真なる心持を取扱つた論文集「愛の純一性」を始めとして「恐怖」「斷髮」「係りなき人」「?」童話「おもちやの家」及「提灯と螢」「ナンキンダマ」の作がある。大戦争當時獨佛等で流行した斷髮を日本に移し卒先して日本にこの流行の先驅をなした人である。故有島武郎氏や音楽家山田耕作氏等はその友人といふことである。創作集「船出」は處女の戀愛を描ける濃艶なる名篇で一女學生が老外國人の博士の火のやうな愛着を逃れて夢のやうに過ぎ去つた一少壯哲學者との果敢ないロマンスの追

憶に耽り遂に世間的の道徳を捨て、愛人と強く生きんとする悲愴な戀の場面を描いたものであつて傳統を破つて個性に生きようとする近代人の心境を表はしたものである。
現住所 東京府下中野字原一七一九

大場 白水郎

オオバハクスイロウ(俳)

名は惣太郎、明治二十三年一月十九日日本橋區南茅場町四番地に生れ、三十八年始めて俳句に親しんで、當時既に暮雨、雨之助、花醉の諸氏と伊藤松宇氏の俳席に出入して句作に熱中した。四十一年頃慶應義塾在學中三田俳句會の復活した時癖三醉、江戸庵、椿花の諸氏と知つた。千鳥吟社に水巴氏と藻花吟社に孤軒氏を知つたのも當時である。氏は大正四年七月孤軒氏の手によつて「藻の花」の發行により之に盡力し、同六年同誌休刊以來多くの俳諧雜誌の選者となつた。氏の句は「俳諧双紙」「藻の花」「俳人」「時事新報」等に投稿し伊達秋航氏の「五萬句集」「藻花集」等に蒐録

されてゐる。

春水や中洲にかゝる橋二つ

涼しさや一石橋の水の闇

うなぎやの二階にゐたり秋の暮

震災前の住所 東京下谷區谷中清水町五

大曲 駒村

オオマガリクソン(俳)

本名は省三、明治十五年十月八日福島縣相馬小高町に生れ、中學校卒業後二十餘年の間銀行員生活をしたが現在は仙臺市に在つて俸給生活をしてゐる。氏は三十二年頃より鈴木餘生と共に作句をなした。當時金森匏瓜、永井破笛、菅野其外、平田青籃の諸氏福島に在つて隈水吟社を結んで盛なものであつたが、餘生の死後氏は幾分俳句に遠ざかるやうになつた。其間に會費一圓の俳畫會を起して餘生と青籃の遺稿を編纂した。氏の句は「ホト、ギス」「俳星」「寶舟」「鵜川」「アラレ」に主として投稿されたが「双岩集」「枯檜庵句集」の二集には多く蒐載されてゐる。尙氏は俳句の外に繪

畫、音楽、將棋、圍碁、大弓、謡曲、錦繪等各種の方面に興味を有し、「双岩集」「枯檜庵句集」の二著を公にしてゐる。

短夜や水に漂ふ舟の夢

曼陀羅に夕日まばゆし百日紅

雲の峰牡丹の蕊に崩れけり

雷に菅笠小さき夏野かな

現住所 仙臺市大町三ノ六

大町 桂月

オオマチケイゲツ(文)

土佐の人。舊高知藩士大町通の三男。名は芳衛。明治二年一月二十日高知市に生れた。土佐の名勝地桂濱に取つて號を桂濱月下漁郎又は桂月と稱す。初は軍人を希望し、更に政治家を志望したが漸く長じて、自己の天分を理解し、文學を以て身を立つる事に決し、第一高等中學を経て東京帝國大學國文科を出た。好んで文筆を執つたので、學生の時文稿既に等身に至つたと言はれる。二十九年大學を卒業する頃より文名漸くあがり、武島羽

衣故鹽井兩江兩氏と共に文集「花紅葉」を出したが、天下の青年皆この書に心酔した。更に「黄菊白菊」を出すや多感艶麗の筆一世を魅了して文名益々高く、三十二年島根縣簸川中學に教鞭を執り留まる事年餘、上京して博文館に入り、「太陽」「中學世界」に評論の筆を執つた。中學世界に於ては主として青年の爲に修養訓を書いた。今は中學世界に筆を絶ち「學生」の主筆として相變らず學生の爲に興味ある教訓の筆を執つてゐる。人格清高、酒と旅行とを愛し、文章の妙は當代第一と稱せられる。「關東の山水」は紀行文中の雄篇として知られ、「伯爵後藤家二郎傳」「八犬傳物語」等の歴史的著述は學生訓以下の修養書類と共に廣く世に行はれてゐる。この外漢文を通俗的に翻譯したり解釋したものは實に無數にある。大正七年四十年ぶりに高知に歸省して上京したが、その頃より精神に異状を呈して精神病院に入つて略々快くなつた。全快後即ち大正七年十月頃朝鮮の各地を旅行して紀行文を發表したが、中でも金剛山登

山記などは面白かつた。氏は言は訥でも文に巧みで、佐々醒雪博士の葬式に於て、博士の靈前で酒を飲み酒を硯に入れて作つた弔文を讀んだが、句々言々肺腑より出で、會葬者を泣かせたのは有名なものだ。門人田中貢太郎氏は桂月の風格について氣魄、敦篤、飄逸、超脱等を列擧してゐる。近時書道を研究して其堂に達し、世間之を喜ぶものが少くない。大正十二年大阪市に滞在して書を賣り全國登山の費用を作つた。文人にして最も訥なるもの三宅雪嶺、久保天隨の兩氏と三人あるので訥りの三幅對と言はれてゐる。訥りではあるが決してあせらぬ人であるからそれ程聞きにくいことはない。口が吃して聲の出ない時は何時までも黙してゐる、舌の廻り出すまで待つてゐる。氏はよく飲むが飲めば益々面白くなる。盃が手から放れる時は煙草を吸ふ。天真流露一度逢つた人は忘れ得ない。

金剛山 飄然身與白雲遊。紅葉黃蘗爛作秋。

萬朶芙蓉筇底落。三千世界掌中收。

吟爾實

風雲當日變乾坤。幾處淒涼碧血痕。

恨殺松花江上月。清光依舊照英魂。

五月雨や土佐を見おろす鷲尾山耳を傾けて而してのちに語れ。

生前住所 東京市小石川區雜司ヶ谷町一〇八

大村嘉代子

オオムラカヨコ(戯)

本名は嘉代、明治十八年東京麴町區に生れ、高等女學校卒業後女子大學に學び、戯曲研究の爲現代劇作の第一人者と言ひれてゐる岡本綺堂氏に師事して數篇の戯曲を書いた。戯曲「亂水金春」「柳橋夜話」「白糸と主水」等の作がある。

現住所 東京市小石川區大塚仲町四一

故大村桐陽

オオムラトウヨウ(漢)

名は成章、字は斐夫、作洲津山の藩士である。初

大森眠歩

オオモリミンボ(戯)

め稻垣木公に學び、後江戸に出で、古賀侗庵の門に入つた。成業の後藩に歸つて藩學に従事し、安政元年大番格となり、累進して明治元年町奉行となつた。翌年學問教授頭取となり、八年文部省に出仕し九年東京女子高等師範學校教官となつた。晩年故山に歸臥して詩酒優悠世を終つた。資性質實謹嚴にして浮華を事としない。其詩文は平易眞率専ら辭達を旨として技巧の末に走らない。門人實に數百人の多きに達した。二十九年四月二十四日年七十九で歿した。大阪府女子師範學校長をしてゐた故大村芳樹氏は實に氏の令息であつて高德い教育者であつた。著書に「晃山記勝」「松島遊記」「備作人鑑」「澡泉日記」「詩文集」等がある。

明治三十四年三月東京神田五軒町に生れた。父は石工請負師であつて、家には色彩のあかるい西洋の大きなボンチ畫本が澤山あつたのを、幼い氏の